

看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科

看護実践研究指導センター年報

平成28年度



CHIBA UNIVERSITY

巻頭言

看護実践研究指導センター(以下、センター)は、昭和 57 年に千葉大学看護学部で全国共同利用施設として、設置されました。以来、社会的要請および全国の看護学教育研究者、実践者のニーズに応えるように、看護系大学、大学病院をはじめ多分野の方々のご協力とご支援をいただきながら、事業を改変し活動してきました。平成 22 年度には、文部科学大臣より「看護学教育研究共同利用拠点 (以下、拠点)」として認定され、平成 27 年 4 月 1 日から再認定を受け、第 2 期の活動を開始しました。

平成 28 年度も、さらに多くの看護系大学や地域の多様な医療機関のご協力と参画により、拠点としての事業を実施できました。年報をお届けして事業報告を致しますとともに、心からお礼申し上げます。

「看護学教育における FD (Faculty Development) マザーマップの開発と大学間共同活用の促進」(平成 23 年度～27 年度)の成果および課題をもとに、拠点としての主要なプロジェクトとして、平成 28 年度は 2 つの事業に取り組みました。一つは、「学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発」(文部科学省平成 27-29 年度医療人養成受託事業)です。この事業の目的は、各看護系大学が教育成果としての学生の卒業時到達目標の達成に向けて、着実に教育の質改善を継続し、独自性を発揮するために有効な、各大学の多様性を前提とした評価方法を提言することです。

もう一つは、「看護学教育の継続的質改善 (CQI : Continuous Quality Improvement) モデルの開発と活用推進」(平成 28-31 年度)です。この事業の目的は、学生の卒業時到達目標の達成をはじめ、多面的な評価、看護職に対する社会的要請に応えるための目標の見直し、FD、地域の保健医療福祉機関との連携等の教育活動をもとに、自律的に教育の質を保証する手がかりとして CQI モデルを開発し、看護系大学の相互支援あるいは個別支援の体制を構築することです。

これらの事業とともに、センターの機能強化に向けて、4 つの研修事業(看護学教育ワークショップ、看護学教育指導者研修、国公立大学病院副看護部長研修、看護管理者研修)及びプロジェクト研究を行い、得た知見を看護学教育ワークショップや報告書等を通して、全看護系大学に発信してきました。

なお、認定看護師教育課程(乳がん看護)は、平成 17 年の開設以降 12 年間、全国に認定看護師を輩出してきました。フォローアップ研修等も構築し、修了生が他の教育課程の開設に貢献した等から、社会的要請に応えるプログラム開発の役割を終えたと判断し、平成 28 年度で終了しました。

今後もセンター教員が中心となり、看護学研究科教員と協力して、全国の看護学教育研究に関わる皆様に、より活用され、貢献できるように、拠点としての機能強化に努めますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本年報をご一読くださり、センター発展のためにご批判、ご助言をいただければ幸いです。

平成 29 年 3 月 31 日

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
センター長 吉本 照子

目次

巻頭言

I.	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター概要	
1.	看護学教育研究共同利用拠点としてのセンターの機能強化	1
2.	センター事業概要	2
1)	設置概要	
2)	事業概要	
3)	各研究部における研究内容	
4)	認定看護師教育課程（乳がん看護）	
3.	看護実践研究指導センター 活用実績	5
4.	スタッフ紹介	6
II.	平成 28 年度事業報告	
1.	年間トピック	8
2.	看護学教育の継続的質改善（CQI）モデル開発と活用推進プロジェクト	9
1)	看護学教育 CQI モデル開発プロジェクトの概要	
2)	看護学教育 CQI プロジェクトの全体計画	
3)	平成 28 年度の取り組み	
4)	CQI 支援の試行としての学内FD企画-看護学教育の継続的質改善（CQI）への挑戦、 看護系大学教員として大学評価とどう向き合うか	
3.	大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業	31
	看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究	
	ー学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発ー	
4.	プロジェクト研究	
➤	プロジェクト 1 新人看護師教育担当者育成プログラムの精錬	36
➤	プロジェクト 2 看護師長が取り組む組織変革プロジェクトを支援する 研修プログラムの精錬に関する研究	39
➤	プロジェクト 3 教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える 看護学教育向け FD コンテンツの開発と評価	42
➤	プロジェクト 4 看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究	44
➤	プロジェクト 5 公的病院における ELNEC 教育プログラムの開発	46
➤	プロジェクト 6 FD コンテンツ開発（国際） ー10 年後を見据えたグローバル人材育成と国際交流推進ー	49
➤	プロジェクト 7 合理的配慮を要する学生の臨地実習にむけた FD プログラム開発	53
5.	研修事業	
1)	国公立大学病院副看護部長研修	54
2)	看護管理者研修	59
3)	看護学教育指導者研修	63
4)	看護学教育ワークショップ	67
5)	認定看護師教育課程（乳がん看護）	74
III.	資料	
1.	教育・研究活動実績	78
2.	職員配置	91
3.	看護実践研究指導センター運営協議会記録	92
4.	看護実践研究指導センター運営委員会記録	94
5.	看護実践研究指導センター認定看護師教育課程運営教員会記録	97
6.	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程	99

I. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター概要

1. 看護学教育研究共同利用拠点としてのセンターの機能強化

当センターは、全国の看護系大学の教育の質向上のための看護学教育研究共同利用拠点(平成 22 年度、平成 26 年度再認定)として、研究・研修・情報集約と発信および看護系大学の連携の推進を行っている。各事業の企画・実施に際しては、全国の看護系大学への貢献と看護学の発展に向けて「研究、教育および実践をつなぐ」こと、看護系大学間、保健医療福祉機関間相互の支援、および看護系大学と関係機関との連携を大切にしている。また、センター教員が看護システム管理学専攻教員との兼任教員として、現職の看護管理者の力量開発に従事し、博士後期課程における研究教育者養成、また学部教育の一部を担っているという特徴を活かしている。

主な研究として、平成 28 年度は、看護学教育拠点としての機能向上に向けて、「看護学教育の継続的質改善 (Continuous Quality Improvement : CQI) モデルの開発と活用推進」(平成 31 年度まで)に着手した。また、文部科学省「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業」として「学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発」(平成 27-29 年度)に取り組み、全国調査結果をまとめ、事例研究に着手している。あわせて、「研究、教育および実践をつなぐ」ことにより、看護人材とおよび看護の質を高めるように、FD (Faculty Development)、SD(Staff Development)および新規事業のシーズ探索に関して、全国の看護系大学教員あるいは実践者との共同研究を行っている。これらの共同研究は、参画者を毎年公募しながら、FD あるいは SD プログラム開発の考え方と方法、および実用性の検証まで、継続的に実施している。平成 28 年度は 2 つのプロジェクト研究が終了し、課題解決型共同研究 2 件をもとに、平成 29 年度に新たな研修事業を開始する計画である。

研修事業では、FD に焦点をあてたものとして、各看護系大学における教育の質保証に関わる管理的立場の看護系教員を対象として、看護学教育ワークショップを行っている。平成 28 年度は、文部科学省、日本看護系大学協議会 (JANPU) と連携して、平成 27 年度文科省委託事業調査結果を報告し、各看護系大学における取組みについて、相互支援の場を創り、ネットワーキングを強化した。このほか、例年通り、看護学教育指導者研修、国公立大学病院副看護部長研修、看護管理者研修を行った。

当センターでは、FD および SD について、先進的なプログラム開発と実用を重視している。その一環として、乳がん看護への大きな社会的ニーズに応え、認定看護師 (乳がん看護) 教育課程のプログラムの開発を目的として、平成 17 年から実施してきた。平成 25 年、26 年に他機関でも開設され、本教育課程のプログラム開発の目的を達成したと判断し、本年度に終了とした。

こうした研究・研修を通して、看護学教育に関する国内外の動向を共有し、各大学の教育の質改善の方向性の手がかりを得られるように、ホームページ、データベース等で情報発信を続けている。これに加え、平成 28 年度は、より効率的に看護系大学と情報交換できるように、拠点メーリングリストを作成した。

2. センター事業概要

1. 設置概要

昭和50年代半ばにおいて、看護学は、医学と密接な連携を保ちつつ、独自の教育研究分野を確立しつつあったが、高齢化社会の進展及び医療資源の効率的運用への社会的要請の増大傾向の中にあり、特に生涯を通ずる継続的な看護教育のあり方、高齢化社会に対応した老人看護のあり方、病院組織の複雑化等に対応した看護管理のあり方についての実践的な研究及び指導体制の確立がせまられていた。

このため、昭和57年4月1日千葉大学看護学部は、これらの実践的課題に対応するとともに、国立大学の教員その他の者で、この分野の研究に従事する者にも利用させ、併せて看護職員の指導的立場にある者及び看護教員に対して生涯教育の一環としての研修を行うため、全国共同利用施設として看護学部附属看護実践研究指導センターが設置された。

設置当初は、継続看護研究部、ケア開発研究部、看護管理研究部の3研究部から構成されていたが、より柔軟で時代に即した活動が展開できるよう、平成19年4月からは政策・教育開発研究部、ケア開発研究部の2研究部構成となり活動している。その後、平成21年度からは看護学研究科が部局化されたことに伴い、看護実践研究指導センターも研究科附属となった。

また、平成22年度より、看護学分野では全国唯一の「看護学教育研究共同利用拠点」として文部科学大臣より認定を受けた。さらに、平成27年度より5年間の再認定を受けたことである。

2. 事業概要

本センターは、事業として次のことを行っている。

(1)看護学教育の継続的質改善(CQI: Continuous Quality Improvement)モデル開発と活用推進

国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」を推進し、地域で人々のLife(生命・生活・人生)を支える看護職を輩出するために、看護学教育の継続的質改善(CQI: Continuous Quality Improvement)モデルを開発し、全国の看護系大学の自律的・持続的期の強化を支援する。

(2)大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業

(調査研究等テーマ: 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発)

看護系大学が、「学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標(到達目標2011)」を活用しながら着実に教育の質改善を継続するために有効な、多様性を前提とした評価方法の提言を目指す。

(3)プロジェクト研究

個人又は複数の共同研究員と千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員が研究プロジェクトを形成し、看護固有の機能を追及する看護学の実践的分野に関する調査研究を行う。

(4)国公立大学病院副看護部長研修

日本の医療が直面している現状を理解し、大学病院の上級管理者として現在直面している課題の中から問題を認識して構造的に分析し、問題解決に結びつく計画案を作成し、実践・検証することを通して看護管理者としての実践能力を高め、看護の充実を図る。

(5)看護管理者研修

大学病院の特殊性にかんがみ、医療機関としての機能を十分に発揮し、看護の充実及び看護業務の円滑化を図るため、看護師長等看護管理者に対し看護管理上必要な知識を習得させ、その資質の向上を図り、大学病院における看護管理の改善に資することを目的とする。

(6)看護学教育指導者研修

臨地実習施設等において看護学生の看護実践を直接指導する看護学教育指導者として必要な実践的指導能力を高め、臨地における看護学教育の充実を図ることを目的とする。

(7)看護学教育ワークショップ

看護系大学間の情報共有と相互支援のネットワークを構築し、参加者が自大学の CQI を推進するための FD の場として企画・運営している。平成 28 年度は、大学改革時代における CQI に挑戦する第一歩として、「卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすか～大学改革時代における看護学教育の継続的質改善への挑戦～」をテーマとして実施した。

(8)認定看護師教育課程(乳がん看護)

日本看護協会認定看護師制度に基づき、特定された認定看護分野(乳がん看護)において、熟練した看護技術と知識を用いて、水準の高い看護実践のできる認定看護師を社会に送り出すことにより、看護現場における看護ケアの広がりや質の向上を図る。

3. 各研究部における研究内容

(1)ケア開発研究部

本研究部では、「看護学教育の継続的質改善(CQI: Continuous Quality Improvement)モデルの開発と活用推進」に加えて、FD マザーマップの開発に関する FD コンテンツ開発にも継続して取り組み、成果物を順次センターHPに公開し、学会における交流集会および報告書として公表し活用促進に尽力した。センターの独自事業である国公立大学病院副看護部長研修のプロジェクト成果もHPおよび学会発表を通して、実践と教育研究をつなぐ活動を継続している。

野地教授は、千葉大学研究支援プログラム(科研費申請支援)を受けた後、「アジア圏における看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する国際比較研究」(文部科学省科学研究費補助金基盤研究(A)一般 研究代表者 野地有子 (<http://ancc.link/>))の最終年度に組み込み、日本における看護職の文化的能力を測定し、臨床応用に向けたアプリを開発している(<http://app.ancc.link/>)。また、医療介護総合推進法による地域包括ケアシステムに関するシンポジウム、産業看護およびゲーミフィケーションに関する研究を実施し、日本産業看護学会においてストレスチェック後の保健面接に関する共同研究が第1回学会賞を受賞した千葉大学医学部附属病院臨床栄養部と千葉 NCM (Nutrition Care and Management) 研究会を立ち上げ、病院と地域が連動した栄養ケアマネジメントのシステムづくりの研究を開始した。

黒田准教授は、個人の研究においては、糖尿病看護に関するケア開発に取り組んでいる。「認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族への援助指針の開発」(文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C) 研究代表者 黒田久美子)を継続し、「糖尿病セルフケア能力測定ツール(修正版)の信頼性・妥当性の検討」が5年に一度の日本糖尿病教育・看護学会の2016年の研究論文賞を受賞した。糖尿病看護・医療・患者会のネットワークの基盤として、千葉県糖尿病協会の理事、千葉大学医学部

附属病院の糖尿病患者会いのはな友の会の副会長，千葉県糖尿病看護研究会の顧問を継続している。
また，センターの共同プロジェクト研究では「新人看護師教育責任者向け支援プログラムの開発と評価」に取り組み、成果を発表した。

(2)政策・教育開発研究部

政策・教育開発研究部は、平成 19 年度から、看護管理研究部と継続教育研究部を発展的に統合し発足した。

近年の医療・看護を取り巻く社会的環境は著しく変化し、安全・安心な質の高い医療・看護が社会的にも期待されている。それに伴って医療・保健・福祉制度の改革も進んでいる。

政策・教育開発研究部では、このような状況を背景とした看護職者の役割の拡大や看護職者に寄せられる社会的ニーズに、より効果的に応えられる政策を提言するための医療・看護全般・看護教育に関する政策研究と、それに不可分である基礎教育と連動させた看護職者の資質の向上のための、生涯に渡る教育・人材・キャリア開発の研究・実践を目指す。

4. 認定看護師教育課程(乳がん看護)

乳がん看護の充実・発展に向けたエキスパートの育成及び教育プログラムの開発と、乳がん看護認定看護師の活動を推進するための研究を行う。

3. 看護実践研究指導センター 活用実績

当センターは昭和 57 年の設置以来、様々な研修・研究事業に取り組んできた。平成 22 年の看護学教育研究共同利用拠点認可後の研修利用者数は、総計 1666 人（看護学教育指導者研修 249 人、看護学教育ワークショップ 639 人、国公立大学病院副看護部長研修 169 人、看護管理者研修 609 人）である。



図 平成 22 年から平成 28 年度の研修受講者数

大学単位の活用実績は、看護学教育ワークショップ 186 大学、FD 研修の講師対応（うち一部の大学では、個別 FD コンサルテーション事業も行っている）は 24 大学、FD マザーマップや FD コンテンツの共同利用を可能にしている FD 支援データベース登録大学は 35 大学である。次年度は、より利用しやすい情報発信としてホームページのリニューアルを予定している。

表 センター利用看護系大学数（平成 22 年度～28 年度）（単位：校）

設置主体	看護学教育 ワークショップ	FD 研修講師対応 （ ）は個別 FD コンサルテーション	FD 支援データベース登録
国立（省庁立舎）	38	1（1）	7
公立	41	5（1）	7
私立	107	18（4）	21
計	186	24（6）	35

4. スタッフ紹介

◇センター長



氏 名 吉本 照子 (よしもと てるこ)
職 名 教授
学 位 博士 (保健学)
所 属 センター長 (看護実践研究指導センター)
兼 地域看護システム管理学 (看護システム管理学専攻)

多様なケアの場の看護管理者が自律的なケア人材を育成し、自組織の機能の発揮と地域ケアのシステム化を推進しながら、保健医療福祉制度の維持・発展に貢献することをめざして、研究・教育を行っています。

◇ケア開発研究部



氏 名 野地 有子 (のじ ありこ)
職 名 教授
学 位 博士 (保健学)
所 属 ケア開発研究部 (看護実践研究指導センター)
兼 実践看護評価学 (看護システム管理学専攻)

様々な価値観の変換と多様性 (ダイバーシティ) に直面している社会において、看護職の役割は人々のつながりを通して益々重要になってきています。新しい看護提供システムの研究と教育から、グローバル・リーダーの育成に取り組みます。



氏 名 黒田 (垣本) 久美子 (くろだ (かきもと) くみこ)
職 名 准教授
学 位 博士 (看護学)
所 属 ケア開発研究部 (看護実践研究指導センター)
兼 実践看護評価学 (看護システム管理学専攻)

「教育－研究－実践をつなぐ」をキーワードに教育研究をすすめたいと考えています。関心のある方は是非、ご連絡をお待ちしております。



氏 名 赤沼 智子 (あかぬま ともこ)
職 名 講師
学 位 修士 (教育学)
所 属 ケア開発研究部 (看護実践研究指導センター)

◇政策・教育開発研究部



氏名 和住 淑子 (わずみ よしこ)
職名 教授
学位 博士 (看護学)
所属 政策・教育開発研究部 (看護実践研究指導センター)
兼 継続教育・政策管理学 (看護システム管理学専攻)

個々の看護職者が、看護の専門性を発揮しつつ組織に貢献していくことができるような教育体制づくり、政策形成過程について、実践と研究を重ねています。課題を共有できる全国の看護職者、看護教員と積極的に連携したいと考えています。



氏名 銭 淑君 (せん しゅくくん)
職名 准教授
学位 博士 (看護学)
所属 政策・教育開発研究部 (看護実践研究指導センター)
兼 継続教育・政策管理学 (看護システム管理学専攻)

中国の「太極図」は自然界の現象を、陰・陽両立の状態に相互変化するという万物の動きの法則を表します。看護にもこのような法則が適用すると考えられ、日々の生活、研究を通じて、その意味を検証したいと思います。

◇認定看護師教育課程 (乳がん看護)



氏名 阿部 恭子 (あべ きょうこ)
職名 特任准教授
学位 修士 (看護学)
所属 認定看護師教育課程 (乳がん看護) (看護実践研究指導センター)

乳がん看護認定看護師の育成と活動推進を目指して、教育・研究を行っています。研究テーマは、乳がん看護相談支援、治療選択と意思決定支援、乳がん看護の e-learning、乳がん看護認定看護師の活動に対する看護管理者の支援、乳房再建の看護などです。



氏名 井関 千裕 (いせき ちひろ)
職名 特任助教
学位 修士 (看護学)
所属 認定看護師教育課程 (乳がん看護) (看護実践研究指導センター)

乳がん患者とその家族の QOL 向上に向けて、質の高い看護実践ができる「乳がん看護認定看護師」の育成と研究に取り組んでいます。

◇特任教員



氏名 吉田 澄恵 (よしだ すみえ)
職名 特任准教授
学位 博士 (看護学)
所属 看護学教育の継続的質改善 (CQI) モデル開発と活用推進 (看護実践研究指導センター)

国がめざす医療提供体制の構築の課題を解決し、地域で人々の Life (生命・生活・人生) を支える看護職の輩出のために必要な看護学教育の継続的質改善 (Continuous Quality Improvement :CQI) モデルを開発する事業に取り組んでいます。

Ⅱ. 平成28年度事業報告

1. 年間トピック

全国 254 大学の看護学教育の責任者 1 名と、継続的質改善の推進者 1～4 名を対象に web 調査を実施。

全国 248 大学の管理責任者と科目責任者 1～4 名に郵送調査を実施。報告書は HP にてダウンロード可

事業	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
看護学教育の継続的質改善 (CQI) モデル開発と活用推進	個別001支援 (FDコンサルテーション/FDマザーマップ活用支援)	情報集約・情報発信	全国調査	HPリニューアル準備	報告書作成	事例研究	Web調査					
文科省委託「看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究」	全国調査											
看護学教育ワークショップ	企画案検討	主要企画決定	日程等HP発信	参加者募集	参加者決定	10/27～28 WS開催	報告書作成					
国公立大学病院副看護部長研修	受講者決定	6/21～24 開講 研修①		9/27～30 研修②			3/2～3 研修③ 閉講 ※報告書をDBに掲載					
看護管理者研修	ベシックコース 受講者募集	ベシックコース 受講者決定	8/29～31 ベシックコース									
看護学教育指導者研修	ベシックコース 受講者募集	ベシックコース 受講者決定	8/24～26 ベシックコース									
認定看護師教育課程 (乳がん看護)	5/14 選抜試験	5/26 合格発表	7/1 開講									12/22 閉講

ホームページのリニューアル準備に着手しています。

副看護部長研修 22 名、看護管理者研修 103 名、看護学教育指導者研修 52 名に参加いただきました。

全日程参加者 70 名とともに、「卒業時到達目標評価をどう行い、どう活かすか」を検討しました

平成 17 年から開講、本年度閉講です

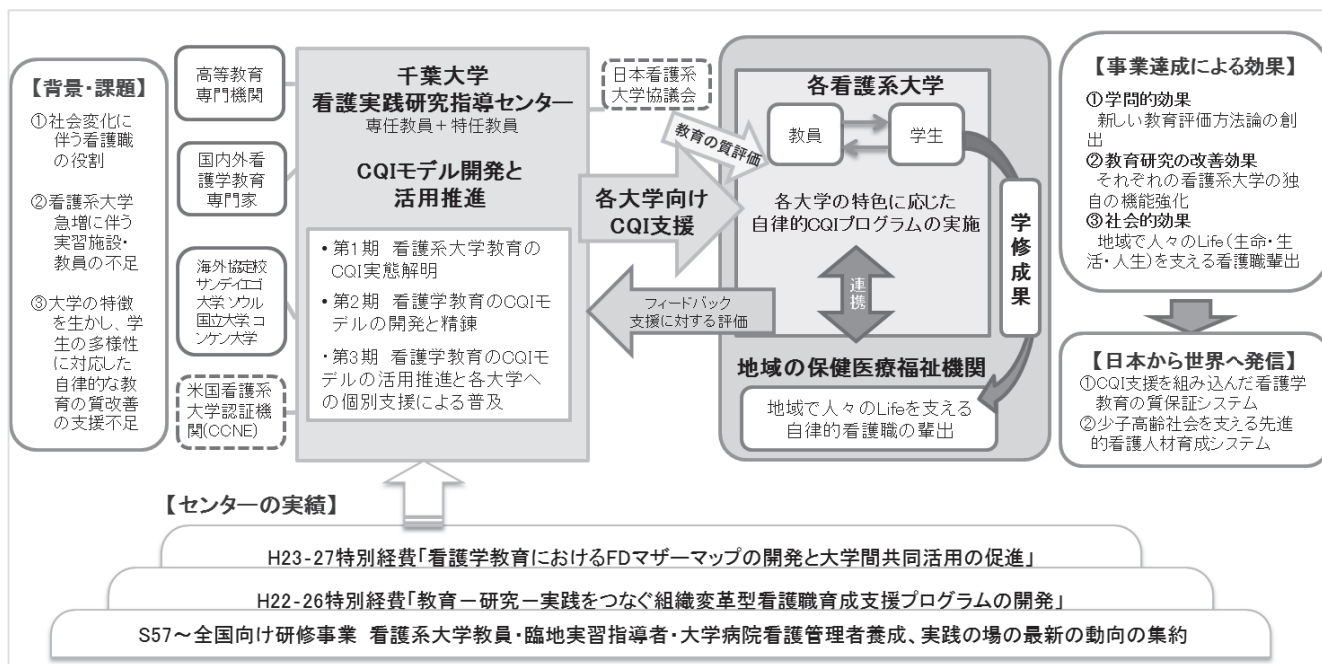
2)看護学教育の継続的質改善(Continuous Quality Improvement : CQI)モデル開発と活用推進プロジェクト(以下、看護学教育 CQI モデル開発プロジェクト)

(1)看護学教育 CQI モデル開発プロジェクトの概要

平成 28 年度から、当センターは、これまでの「教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」(平成 22-26 年度)、「看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進」や、他の研究・研修事業を連繋させながら、より看護学教育研究共同利用拠点としての機能強化に努めるため、「看護学教育の継続的質改善 (CQI : Continuous Quality Improvement) モデルの開発と活用推進」(平成 28-31 年度) プロジェクトに着手した。

【目的・目標】

国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」の課題を推進し、地域で人々の Life (生命・生活・人生) を支える看護職を輩出するために、看護学教育の継続的質改善 (CQI : Continuous Quality Improvement) モデルを開発し、活用を推進することにより、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援することである。



看護学教育の継続的質改善(CQI)モデルの開発と活用推進 事業概要の説明図

【必要性・緊急性】

- ① 国が指向している地域包括ケアシステムの構築に向けて、今後看護職の配置は病院中心から地域の多様な場に拡大し、看護職への役割期待が増加することが予測される。こうした社会的要請に対し、各看護系大学が人材育成の教育目標・内容・方法等を各大学の特性を活かして精練し、質の高い人材輩出体制を構築することは喫緊の課題である。
- ② 看護系大学の急増(平成3年度11校⇒平成27年度241校)による看護系の大学教員の質的・量的不足及び教育組織体制の脆弱性に対し、組織的な教育の質保証体制を構築する必要がある。しかし、教員確保のため教員の流動性が高まり、その結果多様な背景の教員が組織を構成することとなり、

多様な視点からの組織改革の推進力ともなり得る一方、組織的な取り組みが困難ともなり得る。したがって、CQIの考え方・方略を共有するためのCQIモデルが必要である。

- ③ 各大学がそれぞれのミッション・役割及び人材育成目標や受入学生の特性に即して、自律的にCQIに取り組む必要があるが、各大学の教員組織が単独で長期的・広範な視点から情報を収集・分析し、CQIを推進するには、基盤となるCQIモデル等の情報提供や中立的立場からのCQI推進への取組支援が必要である。

2)看護学教育 CQI モデル開発プロジェクトの全体計画 3

4年間で3期で構成する。

第1期(平成28-29年度)：看護学教育のCQIモデル開発のための実態解明

<CQIモデル開発>

①日本看護系大学協議会(JANPU)との連携による看護系大学教育のCQI全国調査

②CQI事例研究：先行してCQIを行っている看護系大学の事例研究

③国内外高等教育支援機関におけるCQI支援のヒアリング調査

<CQI支援>

④各大学個別CQI支援：FDマザーマップを活用した個別FDコンサルテーション

⑤CQI研修事業：看護学教育ワークショップ等の研修の継続と教員向けCQI支援の拡充

<CQI支援体制の確立>

⑥JANPUとの連携

⑦CQI支援Webシステムの開発

<事業評価と発信>

⑧外部評価

⑨CQI研修広報・CQI情報発信

第2期(平成29-30年度)：看護学教育のCQIモデルの開発と精錬

第3期(平成30-31年度)：看護学教育のCQIモデルの活用推進と各大学への個別支援による普及

看護学教育の持続的質改善(CQI)モデルの開発と活用推進 年次計画(平成28年度修正)

		平成28年度(実施中)	平成29年度	平成30年度	平成31年度	
事業フェーズ		第1期：看護系大学教育のCQI実態解明		第2期：看護学教育CQIモデル開発	第3期：CQIモデルの活用推進	
実施内容	CQIモデル開発	<ul style="list-style-type: none"> CQI全国調査(JANPU連携実施) CQI事例研究(一部実施) 国内外機関ヒアリング調査 	<ul style="list-style-type: none"> CQI全国調査報告(JANPU連携) CQI事例研究(追加実施) 国内機関のヒアリング調査 CQIモデル試案作成 	<ul style="list-style-type: none"> CQIモデルの活用説明会実施 活用協力校の募集、選定、ルール決定と共有 CQIモデルの精錬・完成 	<ul style="list-style-type: none"> CQIモデル活用支援の効果検証 CQI推進者研修プログラムの開発 全国CQI調査の実施と分析 	
	CQI支援	<ul style="list-style-type: none"> 個別CQI支援 	各大学個別CQI支援(FDマザーマップ活用/FDコンサルテーション)			
		<ul style="list-style-type: none"> FDマザーマップ活用の効果検証 	<ul style="list-style-type: none"> 各大学要請対応型CQI支援 FDマザーマップ活用型FD支援 	<ul style="list-style-type: none"> CQIモデル活用型CQI支援 各大学要請対応型CQI支援 FDマザーマップ活用型FD支援 	<ul style="list-style-type: none"> CQIモデル活用型CQI支援 各大学要請対応型CQI支援 FDマザーマップ活用型FD支援 	
		<ul style="list-style-type: none"> CQI研修事業 	教員向けCQI研修の拡充(全国看護系大学と協働)			
		<ul style="list-style-type: none"> 看護学教育ワークショップ(10月) 看護系大学のCQIに関する課題認識の共有 	<ul style="list-style-type: none"> 看護学教育ワークショップ(10月) 看護系大学のCQIの実態共有と動機づけ支援 	<ul style="list-style-type: none"> 看護学教育ワークショップ(10月) 看護系大学のCQIに対する効力感の上昇に向けた支援 	<ul style="list-style-type: none"> 看護学教育ワークショップ(10月) 看護学生の学修成果の向上に向けたCQIへの着手支援 	
	CQI支援体制の確立	<ul style="list-style-type: none"> JANPUとの連携準備への協議 研修事業のwebシステム開発 	<ul style="list-style-type: none"> JANPUとの連携会議 研修事業webシステムの試用 	<ul style="list-style-type: none"> JANPUとの連携会議 CQI支援webシステム改善と運用 	<ul style="list-style-type: none"> JANPUとの連携会議 CQI支援webシステムの運用評価 	
	事業評価と発信	<ul style="list-style-type: none"> 外部評価一部実施・候補者の選定と打診 CQI研修広報 	<ul style="list-style-type: none"> 外部評価 CQI研修広報 CQI情報発信のHP改善 	<ul style="list-style-type: none"> 外部評価 CQI研修広報 CQI情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> 外部評価 CQI研修広報 CQI情報発信 	
	各年度の事業評価指標	<ol style="list-style-type: none"> CQI調査票完成・調査回収率 研修事業webシステム試行版完成 CQI情報集約・発信数 大学の特性に応じた研修事業の活用度の上昇 JANPUとの質保証に関する連携および調査協力に関する合意 	<ol style="list-style-type: none"> CQI調査結果報告書 CQIモデル試案の可視化 CQI情報の発信数 大学の特性に応じた研修事業の活用度の上昇 JANPUとの結果および課題の共有 	<ol style="list-style-type: none"> CQIモデル活用支援システム試行版の完成 CQIモデル活用協力校参加数 CQI情報の発信数 大学の特性に応じた研修事業の活用度の上昇 JANPUとの連携方法に関する合意 	<ol style="list-style-type: none"> CQIモデル・活用支援webシステムの完成 大学の特性に応じた研修事業の活用度の上昇 CQI情報の発信数 CQIに自律的に取り組む大学数の増加 JANPU等連携機関との役割分担 	

3) 平成 28 年度の取り組み

平成 28 年度は、看護学教育 CQI モデル開発のための実態解明のフェーズであり、以下の取り組みを行った

(1) 個別 CQI 支援

看護学教育 CQI モデル開発プロジェクトでは、CQI の観点から「看護学教育 FD マザーマップ」(以下: FD マザーマップ) の活用促進と短期的効果検証を課題の一つとしている。また、開発する看護学教育の CQI モデルには、個別の大学の CQI 活動の実態を把握することが不可欠である。さらに、看護学教育の CQI モデルを開発後は、その活用推進において、拠点としての当センターが、どのような支援体制を整えていく必要があるか見出す必要がある。そこで、平成 28 年度は、個別 CQI 支援を行うことを、チラシやホームページで広報するとともに、講師依頼や研修企画相談などの連絡があった大学に対し、協力関係を結び、FD 研修の実施に関連する個別 CQI 支援を下記 6 大学に行った。

平成 28 年度 個別 CQI 支援対応事例

大学	主な依頼事項	主な対応
A 大学 (私立)	<ul style="list-style-type: none"> ● 教育方法に関する FD を主にしてきたが、完成年度後の教員の世代交代により若い教員が増えたこともあり、自大学の FD ニーズを見出すため、FD マザーマップを活用したい 	<ul style="list-style-type: none"> ● FD マザーマップ活用に関する講演 ● FD マザーマップ check sheet を用いた組織的な FD ニーズの自律的分析の支援 ● 全日程参加とアンケート評価および実施内容報告論文による FD マザーマップを用いた研修企画の運営と評価の把握
B 大学 (私立)	<ul style="list-style-type: none"> ● FD 研修の系統的な実施に向けて、まずは、FD マザーマップを活用した自組織の課題を発見し、意見交換していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ● FD マザーマップ活用に関する講演 ● FD マザーマップ check sheet を用いた組織的な FD ニーズの自律的分析の支援 ● 全日程参加とアンケート評価による FD マザーマップを用いた研修企画の運営と評価の把握
C 大学 (私立)	<ul style="list-style-type: none"> ● 開学してまもないが、初の FD 研修を企画するので、FD マザーマップの活用を試みてみたい ● 研修のコンサルテーションも依頼したい 	<ul style="list-style-type: none"> ● FD 研修の企画内容の提案と相談 ● FD マザーマップ check sheet を用いた組織的な FD ニーズの自律的分析の支援 ● FD マザーマップ活用に関する講演 ● GW への参加 ● アンケート評価による研修評価の把握
D 大学 (公立)	<ul style="list-style-type: none"> ● 看護学分野だけでの FD を試みていきたい。その皮切りに、看護系教員の FD ニーズを把握できる可能性のある FD マザーマップについて、まず、開発過程を含め、活用する方法などを知りたい 	<ul style="list-style-type: none"> ● FD マザーマップの開発過程と活用に関する講演 ● FD 支援データベースの紹介 ● 全日程参加とアンケート評価による FD 研修の企画や運営の評価の把握
E 大学 (国立)	<ul style="list-style-type: none"> ● FD 担当部門主催の附属病院臨地実習指導者と教員の合同研修。過去に、センター事業の「看護学教育指導者研修」に参加したメンバーから情報があり、今回の研修に適合するため、「看護学教育の基礎、臨地実習場面の教材化」の講演を依頼したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「看護学教育の基礎、臨地実習場面の教材化」に関する講演 ● 講演の際に、FD マザーマップを紹介 ● FD 支援データベースの活用の紹介 ● 今後の FD 企画において相談に応じる
F 大学 (私立)	<ul style="list-style-type: none"> ● 福祉系学科と合同 FD 研修。いずれも国家試験受験がある。講義形式の授業が必須であるが、講義形式でも学生が主体的に自学自習する工夫を検討したいので、実践的な講演のできる講師を探している。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 要請にセンター教員が応じられたため、講演を担当。(大学教育における講義法の特徴と課題と講師の工夫) ● コンサルテーション担当教員も含め、各教員の工夫の GW に参加しコメント ● FD 支援データベースの紹介 ● アンケート評価と、同テーマの 2 回目の FD 研修内容への発展からの FD 研修支援ニーズの把握

(2) 看護学教育ワークショップの開催

「卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすか～大学改革時代における看護学教育の継続的質改善への挑戦～」をテーマに、118 大学の参加を得て開催した（詳細は、別項）。全日程参加した 70 大学とのグループワークでは、各大学の卒業時到達目標評価に焦点をあてた、CQI の取り組みについて情報交換した。このワークショップを通して、各大学における CQI 活動には、【FD 企画を主としたトップダウン的な CQI 活動】、【個々の教員からのボトムアップ的な CQI 活動】【日常の教育活動そのものを CQI としての価値づける活動】【教育の質の維持に自負があり、CQI 活動の必要性の認識に働きかける活動】などがあることなどがわかってきている。引き続きのテーマでのワークショップ開催を望むとのアンケート結果もあり、次年度の本事業の中核の研修として開催していく。

(3) 各事業による CQI 研修ニーズの情報収集

前述の個別 CQI 支援、看護学教育ワークショップの他、当センター事業である各研修事業（国公立大学病院副看護部長研修、看護管理者研修、看護学教育指導者研修）、および、課題解決型別プロジェクト研究、他大学教員等との共同研究などを通して、CQI 研修ニーズについて情報収集した。

主に、看護学教育の中核を担う臨地実習施設との合同の研修ニーズ、看護系大学教員の新任者向け研修のニーズや、看護系大学における FD 研修等を企画する人材養成のための研修ニーズ、さらには、学士課程教育と看護職養成教育の機能を果たす看護系大学の特徴を踏まえた大学の事務系職員向けの SD 研修ニーズなどがあることがわかってきている。このうち、看護学教育の CQI に欠かせないものとして、看護系大学の FD 企画者研修について、平成 29 年度に開講することとし準備した。

(4) 日本看護系大学協議会（JANPU）との連携会議

当センターは、文部科学大臣の認定している看護学教育研究共同利用拠点であり、常に、全国の看護系大学の教育研究に資する事業展開が不可欠であるが、当センターの利用は、各大学の自由意思に基づくものである。一方、日本看護系大学協議会（JANPU）は、任意ではあっても、わが国の看護系大学がほぼ全加入しており、組織力が高く、看護学教育の質の維持・向上・保証に資するさまざまな活動を展開している。また、JANPU が母体となって発足予定の看護学の分野別評価機構との機能分担と連携なども検討していく必要がある。

そこで、平成 28 年度は、まず、上述した看護学教育ワークショップの開催の後援協力を依頼し、合わせて今後の連携に向けた会議を行った。また、JANPU の主催・共催する「公開シンポジウム 分野別質評価のための教育課程編成上の参照基準」（平成 29 年 3 月 26 日）や「討論会 安全保障と学術問題に看護学はどう取り組むか」（平成 29 年 3 月 26 日）などに参加し、JANPU の機能との相補性、連携可能性について検討している。

(5) 国内外ヒアリング調査の準備

平成 28 年度は、看護学教育の CQI モデル開発に関する外部評価を得るために、適切な評価者を複数見出すべく、様々な情報収集と検討を行った。

まず、国外については、米国の看護学教育の認証・支援機関である Commission on Collegiate Nursing Education(CCNE)の Substantive Change Advisory Group の委員として、米国の看護学教育への CQI 支援活動経験のある Dr. Mary Jo Dummer Clark に、米国の実情をヒアリングし、かつ、本プロジェクトのコンサルテーションを検討したが、CQI モデル開発の進捗状況から、本年度は以下のような情報収集活動を優先した。

国内については、高等教育に関する情報共有のメーリングリストなど多方面からの情報収集を継続している。平成 28 年 11 月 12 日には、「世界のリーディング大学とのベンチマーキングが開く可能性」（金沢大学国際基幹教育員高等教育開発・支援部門研究セミナー主催平成 28 年 11 月 12 日）に、特任教員が参加し、世界規模の大学評価の動向を踏まえた我が国の大学・大学院教育全体の継続的質改善の取り組みを把握した。このほか、上越教育大学が取り組んでいる文部科学省委託事業「総合的な教師力向上のための調査研究事業（カリキュラム企画運営会議を中核とした PDCA サイクルによる教職カリキュラムマネジメントシステムの再構築）」にかかる調査研究に協力し、教育学分野全体の CQI に関する動向を

把握し、今後の連携関係の足掛かりを得た。さらに、平成 28 年度は、文部科学大臣認定の教育関係共同利用拠点が母体の大学教育イノベーション日本が発足した。(http://heij.ihe.tohoku.ac.jp/index.cgi#)

この団体の発足には、当センターも当初から加わっており、第 1 回フォーラム「SD 義務化と大学の未来～全教職員の能力開発を組織開発につなげるために～」(平成 29 年 3 月 9-10 日)には、センター長が、当センターの継続している FD・SD 支援の取り組みを報告している。

(6) 全国看護系大学の CQI 活動に関する実態調査の実施

平成 28 年度は、まず、看護系大学における CQI 活動の実態把握を計画し、さまざまな情報集約とネットワークキング、ならびに、文献検討、さらに専門家会議を経て、調査票を開発し、平成 29 年 3 月に「大学における看護学教育の継続的質改善 (CQI) 活動と背景要因に関する研究」を web 調査にて行った。平成 29 年度に結果を報告する予定である。

なお、この調査における看護学教育 CQI 活動とは、看護系大学の教員が実施している自大学の看護学基礎教育課程における教育の質改善活動のうち、組織的に行っており、回答者が、継続的な質改善につながると判断しているものとした。

(7) FD コンテンツ開発

看護学教育の CQI に必要な FD コンテンツの開発にも取り組んでおり、平成 28 年度は、下記のコンテンツを開発した。

FD 支援データベース登録大学用ページからの配信

- 動画教材「看護学教育指導者研修 (ベーシックコース) 看護学教育の基礎」 講師 和住淑子
- 動画教材「看護学教育指導者研修 (ベーシックコース) 臨地実習指導の基礎」 講師 黒田久美子
- 動画教材「看護学教育指導者研修 (ベーシックコース) 自施設の現状を踏まえた指導過程のリフレクション」 講師 和住淑子

FD 支援データベースからの配信・各大学郵送 (平成 29 年 4 月センターホームページにも更新予定)

- 資料 10 年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進 FD コンテンツ報告書 野地有子他
- 資料 教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考えるー学生への対応に困った 10 事例を通して 和住淑子他



(8) 情報発信

看護学教育研究共同利用拠点としての情報発信の強化と利用者のユーザビリティ改善の観点から、センターホームページのリニューアルに着手している (平成 29 年刷新予定)。また、拠点のメーリングリストを作成した。登録大学は、74 大学であり、周知に努めている。

4) CQI 支援の試行としての学内 FD 企画—看護学教育の継続的質改善(CQI)への挑戦. 看護系大学教員として大学評価にどう向き合うか

平成 28 年度は、CQI 支援の試行として、看護学研究科の経費負担により、学内向けの FD 企画を実施した。実施に先立ち、企画素案段階で、様々な立場にある看護学研究科教員 8 名に、企画案についての意見をj得るヒアリングを行い、企画を洗練させ、次のようなプログラムを実施した。教員 41 名（センター教員 6 名を除く）、大学院生 7 名の参加があった。アンケート結果から高評価が得られ、千葉大学における看護学教育の CQI 活動のための貢献や教員発信型の CQI 活動への支援要請があり、次年度取り組んでいく契機となった。今後、他大学への個別支援方法等に還元したい。

テーマ：千葉大学における看護学教育の継続的質改善（CQI）への挑戦。看護系大学教員として大学評価にどう向き合うか

日時：平成 29 年 3 月 15 日（水）10:00～11:30

会場：千葉大学大学院看護学研究科 第一講義室

対象：本学研究科 教員 大学院生

プログラム：10:00 「看護学教育の CQI モデル開発と活用推進」事業の紹介

10:05 企画主旨説明

10:10 現状認識の共有

10:20 教育講演と質疑応答

『世界の大学評価の動向からグローバル化時代の人材育成を考える』

講師 石川真由美（大阪大学 グローバルイニシアチブセンター 教授）

なお、本企画は、千葉大学における FD 実績として、講演資料とともに、FD 支援データベースの登録大学用ページに掲載している。（講演資料は、講師の許諾を得て、次頁以降に掲載する）

アンケート結果：

参加者 48 人、回答者 34 人（回収率 70.8%）であった。企画全体の満足度は、「とても満足」21 人（61.7%）、「まあ満足」13 人（38.2%）、教育講演の満足度は「とても満足」24 人（70.6%）、「まあ満足」10 人（29.4%）であり、高かった。自由記載から、各々の CQI に関する認識、大学における人材育成への期待と大学評価の関係性等の共有が進んだと考えられた。

自由記載（主なもの抜粋）

- ・このような教育、大学運営を見直せるような機会が大切だと思った。
- ・現状認識の共有で話された准教授と助教の先生の思いが伝わってきてよかった。
- ・世界の大学評価という視点は、これまであまり意識していなかったのでグローバル化の人材を育てるというが、何が求められているのか問題点も含め学びになった。
- ・他領域の専門家からの興味深い講演であり、貴重な機会であったと思う。具体例があり、わかりやすかった。
- ・大学を見る新しい鏡としてランキングの基準、データ源を知り、本学・看護学研究科の目指す教育・研究・社会貢献の在り方を崩さず、チャレンジしていくことの重要性がよくわかった。
- ・なるほどと思うところもあったが、明日からどうするかヒントにはならなかった。それを考えろということか。
- ・CQI を行うセンターや、千葉大学看護学研究科の位置づけもよくわかった。
- ・とても興味深く、刺激的な内容だった。今後自分なりに色々と考えて形にしていきたいと思った。
- ・今後の教育および研究の参加になった。
- ・活動—評価の中核となる概念の創出と社会化に期待する。

世界の大学評価の動向から： グローバル化時代の人材育成を考える

大阪大学
グローバルイニシアティブ・センター教授
石川真由美
ishikawa@iai.osaka-u.ac.jp

千葉大学看護学研究科
CQIモデル開発委員会主催FD
「世界の大学評価の動向を見据えた千葉大学における看護学教育の
継続的質改善(CQI)への挑戦」
2017年3月15日

まずは身も蓋もない 世界大学ランキングの話から…

- ランキングでみる千葉大学
 - 主な世界ランキング: タイムズ (THE)、QS、上海交通大学 (ARWU) ランキング
 - 分野別ランキング: QS社のNursingの例
- 世界大学ランキングとは何か、どのように向き合うか
 - 採点方法や問題
 - 海外の大学の動き 等をふまえて
- グローバルな評価・競争時代の人材育成を考える
 - 大変革期を生きる、明日のnursing scientistsへの期待

世界大学ランキングの衝撃！



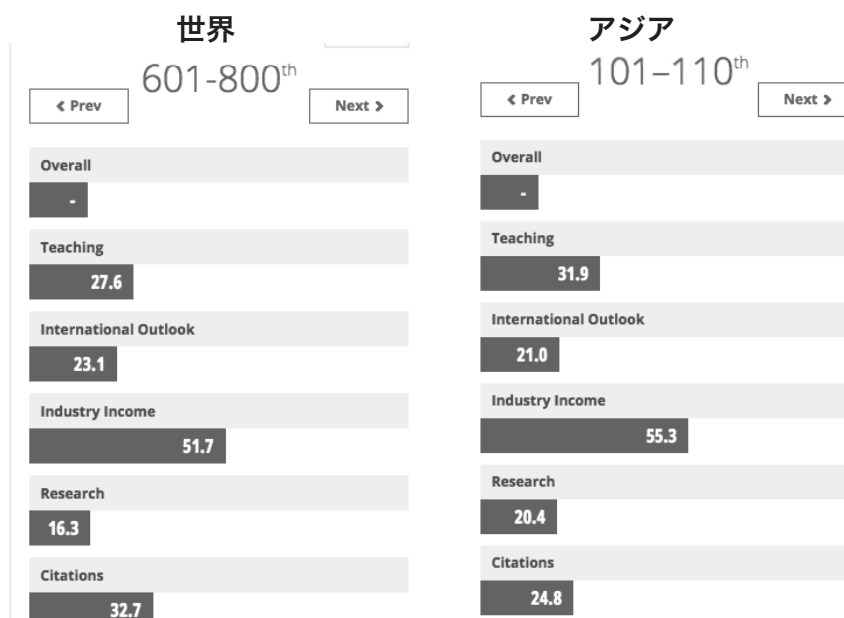
「日本の大学の順位低下」
 「東大アジア1位から転落」
 「世界での存在感低下」

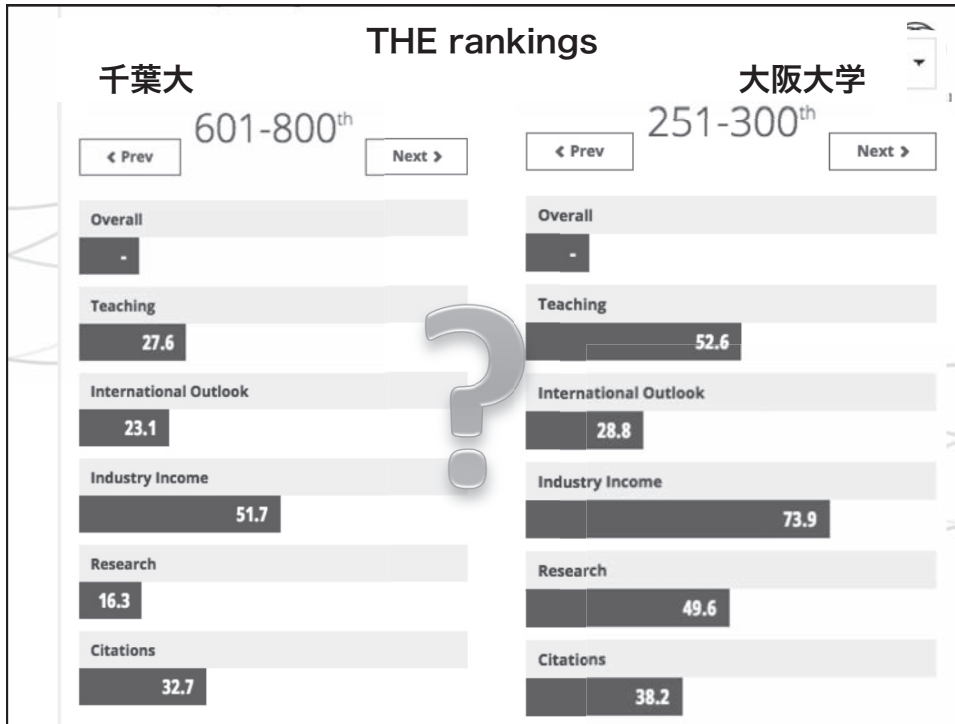
- 国内序列 → 「グローバル」な評価・レピュテーション
- 世界での立ち位置は？
- 海外に伝える大学像は？
- 全学国際化のきっかけ



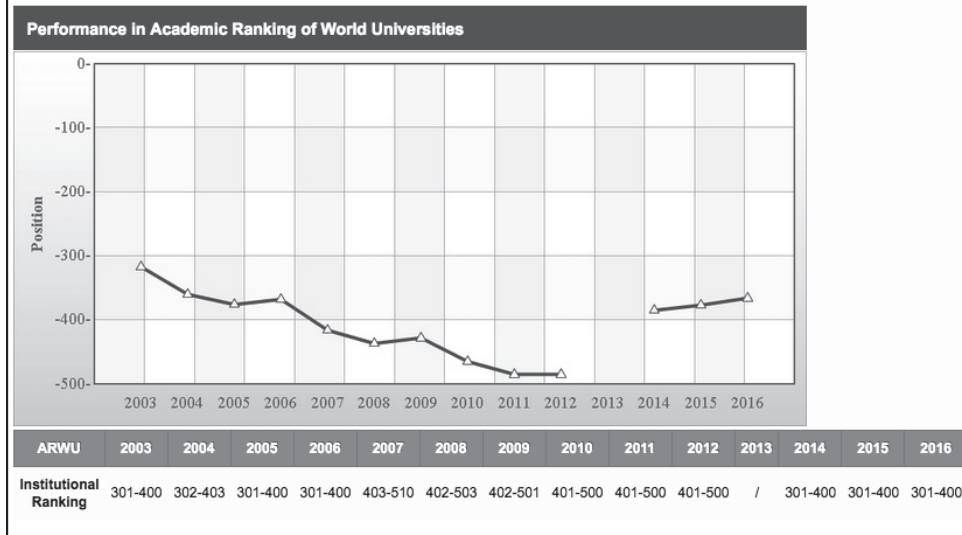
大学を見る新しい「鏡」

1. 千葉大学 in THE大学ランキング 2016





3. Academic Ranking of World Universities (ARWU) 上海交通大学学術ランキング： 千葉大学



THE・QS・上海交通のMethodology

大阪大学 OSAKA UNIVERSITY OPEN 2021

	THE	QS	上海交通
教育	<ul style="list-style-type: none"> ・教育の評判調査(15%) ・学生/教員比率(4.5%) ・博士号授与者数/学士号授与者数(2.25%) ・博士号授与者数/教員数(6%) ・大学の収入/教員数(2.25%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生/教員比率(20%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノーベル賞・フィールズ賞を受賞した卒業生数(10%)
研究	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の評判調査(18%) ・研究費収入/教員・研究スタッフ数(6%) ・論文数/教員・研究スタッフ数(6%) ・一論文あたりの被引用数(30%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員一人あたりの被引用数(20%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノーベル賞・フィールズ賞を受賞した教員数(20%) ・高被引用論文著者数(20%) ・Nature, Scienceに掲載された論文数(20%) ・論文数(20%)
国際化	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人教員比率(2.5%) ・外国人学生比率(2.5%) ・国際共著論文比率(2.5%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人教員比率(5%) ・外国人学生比率(5%) 	
知識移転	<ul style="list-style-type: none"> ・産業界からの研究費収入(2.5%) 		
評判調査	<ul style="list-style-type: none"> ・教育の評判調査(15%) ・研究の評判調査(18%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究者による評判調査(40%) ・雇用主による評判調査(10%) 	

THE, QSはもとは同じランキング「レピュテーション」や「国際」に重み

研究のみ評価

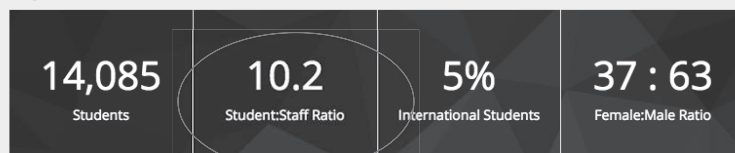
もう少し詳しく見ると…



- ランキングHPに掲載の千葉大学プロフィール (THE)
- 分野別ランキング：看護学 (QS)

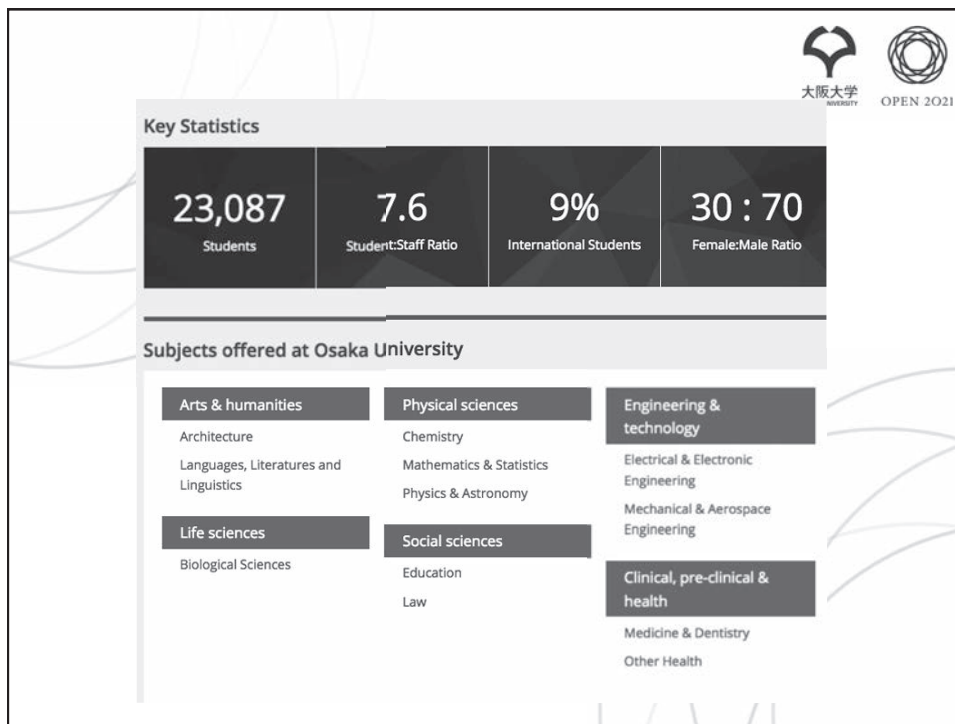
THE ランキング：千葉大学のプロフィール

Key Statistics



Subjects offered at Chiba University

Arts & humanities Art, Performing Arts & Design Languages, Literatures and Linguistics	Physical sciences Chemistry Mathematics & Statistics Physics & Astronomy	Engineering & technology Electrical & Electronic Engineering General Engineering Mechanical & Aerospace Engineering
Life sciences Biological Sciences	Social sciences Economics & Econometrics Education Law Politics & International Studies (incl Development Studies)	Clinical, pre-clinical & health Medicine & Dentistry Other Health
























大阪大学 OPEN 2021

分野別ランキング(QS): Nursing



- <https://www.topuniversities.com/university-rankings/university-subject-rankings/2016/nursing>
- 世界大学ランキングのなかに、「大学総体」としての順位だけでなく、「分野別」のランキングも。近年、分野数は増加傾向にある。
 - 規模もミッションも文化も異なる大学を総体で比べるのは、そもそも無理。
 - 学生の進路の指針になりやすい(ユーザー・フレンドリー)
 - ランキングの主体である企業にとっては「商品」が増える。より多くの顧客獲得につながる。

**QS World University Rankings
by Subject 2016 - Nursing**

1	 University of Pennsylvania	
2	 Johns Hopkins University	
3	 University of Toronto	
4	 University of Alberta	
5	 Karolinska Institutet	
6	 King's College London	
7	 University of Michigan	
8	 The University of Manchester	
9	 University of North Carolina, Chapel Hill	
10	 University of California, San Francisco	

**分野別ランキング(QS):
Nursing**

- 100位にエントリーするアジアの大学
 - 18位 国立シンガポール大学
 - 22位 香港中文大学
 - 42位 香港理工大
 - 43位 国立台湾大
 - 51-100位: 北京、東京、香港、ソウル・延世(韓)、陽明・台北医(台)
- * 積極的な台湾や韓国
- 評価方法 (レピュテーションと論文)
 - (1) Academic reputation
 - (2) Employer reputation
 - (3) Research citations per paper
(Scopus, 5-year, minimum paper number set)
 - (4) H-index

まとめ 世界大学ランキングとは



- 主なランキングだけでも15以上
- 多様化・細分化
- ランク入りは、世界の大学の1-3%、多くて5%
- わかりやすいが、多様性は無視
- 代替指標(proxy)で採点
- 大規模な研究総合大学がモデル

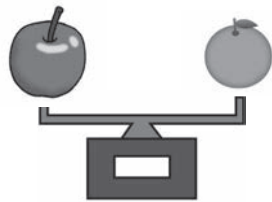


Image from the EUA Report on Rankings 2011

採点方法：ランキングにより様々



- 研究力:論文・引用数、研究資金、特許数等
- レピュテーション(研究・教育)
- 外国人教員・学生比率、国際共著論文比率
- 就職率、卒業率、学生の満足度等を含む
「マルチランク」も登場

指標とウェイト、論文データベースの種類、評価期間が
変わると順位は上下動
(30位以下は乱高下)

教育はどう採点されるのか ?



- 教員・学生比率
- 博士号授与数/学士号授与数、教員あたり博士号授与数
- 研究者や雇用者(employer・企業)からの評判

- 教育の効果は？
- 留学生が多いほどよい大学？

ランキングでは教育の質はわからない

17

無視できない問題



- 英語国偏重
- 同化圧力
- 少数への資金集中: 格差の再生産
- 「外部評価」としての誤用
- 中身よりブランド
- 不透明な数値調整や補正
- データの質や収集方法
- 学術研究への深刻な影響
 - 自国語による研究・教育の軽視
 - ビブリオメトリクス指標の濫用
 - 本より雑誌論文評価→ジャーナル価格高騰



たかがランキング...されど...



- 国際的知名度の向上
- トップ校には世界から優秀な人材が集まる
- 大学間外交・共同研究・学生交流を後押し
- 大学の現在・過去・未来の構成員に恩恵

ランキング上位大学の「特権」
「排除」に使われる例も

19

逃げていても、無くならない！



- 世界ランキングの順位上昇は、非英語・非西欧の大学の中長期の目標には適していない。
- しかし、ランキングの問題を認識した上で、ランキングの興隆・人気の背後にある時代の流れや要請に向き合う必要。
- グローバル化と競争・協調の世界的潮流に背を向ける大学は、おそらく周縁化するであろう。
- ころころ変わる手法や元データ: 主体性のない迎合は、サステナブルでない。

20

世界の動き グローバルな競争の現実：「学術軍拡」？



- 中国「211/985 行程」「C9」
- 韓国「ワールドクラス大学プロジェクト」と全国的な大学国際化
- 台湾「5年間500億ドル」世界トップ大学構想
- シンガポール「Global Schoolhouse」、世界のトップ大学誘致と外国人教員・留学生受入の拡大
- ロシア「5/100計画」トップ100位に5大学
- 「デンマークの夢」(欧州トップ10入)

日本の「スーパーグローバル大学創成支援事業」

- 国際化と大学改革
- 国際競争力の強化

21

世界競争とアジアの大学・学術の 存在感の増大



- 論文数(英語論文)の急増 (cf. Ishikawa & Sun, 2016)
- 国際共同研究・学位プロジェクトの積極的推進
- 大学ランキング上位進出
 - “Audit culture” の浸透とランキングむきの体力強化(石川2016)
 - 人文社会系でも、雑誌論文(WoS, IF etc.で査定)への報奨制度、給与・昇進の査定

抗議の声も上がる一方、めざましいアウトプットの向上と
国際発信力の強化を達成

第2ラウンドは量から質へ:本質的で主体的な学術の強化を
目指す世界の大学

22

コンペティションは次の段階へ 中国A大学



- 6年ごとの国際評価制度の導入
- WoS論文「数」による評価と報奨金制度の撤廃
- 世界標準のピア・レビュー
- 部局ごとに発展の方向性、学術レベル、人材育成、国際化の項目を診断
- ギャップの同定→診断→発展

研究者の内発的な動機づけを重視した
研究とイノベーション推進

23

世界に見える自己像？



世界での立ち位置

日本の、私たちの強み：
教育・研究の特徴

国内序列 →
「グローバル」な評価と
レピュテーションへ



個人も大学も
考える力
構想力
説明力
で可視化

千葉大学
“Branding”の
取組！

学生の描く未来は？

自信喪失気味?の日本の大学…

- グローバル対応の「遅れ」?
 焦燥感に由来する国際化の不毛(荻谷2016)
- ノーベル賞から日本のサイエンスを考える
 - 興味のあるテーマの追求
 - 日本語サイエンス、ローカルなアプローチ
 - 層の厚さ
 - 全体的な教育レベルの高さ: 機会とアクセス
- 自己イメージの多様性と改革の優先順位の選択

25

グローバルな評価・競争時代の人材育成を考える

- 変革期を生きる、明日のnursing scientistsへの期待
- 外から見る看護学と看護学生
 - 世界での通用性、境界域の強み、明確な学習目標とキャリアプラン
 - グローバルな気づき(アウェアネス)は?
- 評価軸のグローバル化とサイエンス・研究職の変化
 - 指導教員や親世代の成功体験の危うさ
- 正解のない時代を生きる

門外漢から見た看護学



- 世界での通用性
- 境界域の強み cross-boundary
 - 「ハード」vs.「ソフト」
 - 「グローバル」vs.「ローカル」
- グローバルは既定路線
 - “vs.” → “and”
 - 外国人のステークホルダー(caretakers, caregivers)の増大
 - ハードサイエンス(工学、データサイエンス等)との連携強化
 - 先端技術との親和性: IoT, robotics等
- 既存の知や手法を超え、変える可能性

27

門外漢から見た看護学(生)



- 学習目的とキャリア・プランが明確
- キャリア戦略は？
- グローバルなアウェアネスは？
 - 世界が見えているか？
 - 看護学で世界をリードするとは？
 - 世界の同世代、同じ看護学を学ぶ学生たちが、何を、どのように学び、自らを高めているのか。

もしかして。。。

- 目指すは「先生のクローン」？
 - 「大学教員は自分のクローンをつくりたがる傾向があり、その態度で学生の『成功』のイメージを規定してしまう。」

Burton Richter 元アメリカ物理学会長1995年
(Fiske, 2014:3)

参考までに：
理工系大学院生むけのキャリア・セミナーから
(石川 2015)



「次世代のサイエンティストには、キャリア戦略が必要」

1. 高等教育のユニバーサル化と学歴インフレ
2. 企業のグローバル採用の本格化:職の海外流出
3. サイエンスのグローバル化と専門職国際移動の拡大

指導教員や親世代の成功体験の危うさ

米国アカデミック・ジョブ・マーケットの変化
P. Fiske, "Put Your PhD to Work!" (2010)



OLD

- 大学大学院で学ぶ
- 安定志向
- 給与
- インフラ

- 年功序列
- ギルド(同職・職能集団)
- リスク回避
- 受身(が安全)

NEW

- 一生(life long)学ぶ
- リスクを取る
- ストックオプション
- 知財

- 経験
- 独立
- リスク・マネジメント
- 起業家精神(が安全)

日本の大学への批判：依然として古いモデルを踏襲
グローバルな人材を育てていない

正解のない時代を生きる

Knowledge, Skill, Mindset の3セット

- 高い(グローバル・レベルの)専門性
- 英語力: デフォルトと心得よ
- 異文化・多文化理解: 他人(国)の釜の飯を食う
- Sympathy(共感力), 決断と推進、挑戦、当たり前を疑う…
そして、開き直る強さ (BRAVE HEART♡)

石川真由美 編 (2016).
『世界大学ランキングと知の序列化：
大学評価と国際競争を問う』京都大学学術出版会.

苅谷剛彦 (2016).「高等教育のグローバル競争とキャッチ
アップ終焉意識」石川編上掲書pp. 101-129.

藤井翔太 (2015. 10.30).「ランキングからベンチマーキング
へ: InCitesを活用した海外大学とのベンチマーキング事例
の紹介」第3回InCite ユーザー会.

Fiske, Peter (2014, March 2). Putting Your Degree to Work:
Practical Career Strategies for Scientists, APS.

Ishikawa, M. & Chengzhi Sun (2016). The Paradox of
Autonomy: Japan's Vernacular Scholarship and the Policy
Pursuit of "Super Global," *Higher Education Policy*, 28: pp.
451-472.

Oleksiyenko, A. (2014). On the Shoulders of Giants? Global
Science, Resource Asymmetries, and Repositioning of
Research Universities in China and Russia. *Comparative
Education Review*, 58(3): pp. 482-508.

Rauhvargers, A.(2011). *Global university rankings and their
impact*, the European University Association: *Brussels,
Belgium*.

参考文献



謝辞: 本資料において、とくに注記のないイラスト
は、"Illust AC"の提供による素材を使っています。

3. 平成28年度 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業

附属看護実践研究指導センターは、看護学教育研究共同利用拠点として、文部科学省「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業」(平成 27～29 年度)に応募し採択された。採択された事業のテーマは、「看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究—学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発—」である。

本事業は、各看護系大学が、「学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標（以下、到達目標 2011）」（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2011）を活用しながら着実に教育の質改善を継続するために有効な、多様性を前提とした評価方法を開発することを目的としている。

平成 28 年度は、平成 27 年度の事業成果を基礎に、下記の 4 本の調査研究（研究 1、2-1、2-2、2-3）に着手するとともに看護学教育ワークショップを開催し、その成果を全国の看護系大学と共有した。また、多面的なデータ収集と分析を可能にする調査分析システムを実装化した。

- ・ 研究 1 全国の看護系大学における到達目標 2011 の活用実態と背景要因の解明（全国調査）
- ・ 研究 2-1 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発（後ろ向き事例研究）
- ・ 研究 2-2 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発。卒業時到達目標評価を含む自大学の看護学教育の継続的質改善に取り組む大学への事例研究（前向き事例研究）
- ・ 研究 2-3 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発。看護系大学における卒業時到達目標評価を含む教育の質改善への支援ニーズ（支援ニーズ web 調査）

1) 「全国の看護系大学における到達目標 2011 の活用実態と背景要因の解明」(研究 1)

<研究目的>

看護系大学における「到達目標 2011」の活用状況およびその背景要因を明らかにし、到達目標 2011 をより有効に活用し教育の質を保証するための課題を抽出する。

<研究方法>

調査は、平成 27 年 4 月 1 日現在で文部科学省が発表している 248 大学の①看護系の学部長・学科長・専攻長等の管理責任者 1 名、②1～4 名の科目責任者を対象に個別投函郵送調査で行った。調査票は、平成 27 年度に実施した 7 大学のインタビュー調査とその後の専門家会議を経て作成し、Ⅰ. 回答者や大学の基本属性に関する質問、Ⅱ. 「到達目標 2011」の活用実態、Ⅲ. 貴大学における卒業時到達目標の評価方法と課題に関する質問で構成されている。データ収集期間は、平成 27 年 7 月 10 日～8 月 10 日である。分析は、各項目の単純集計、「到達目標 2011」の認知度・活用に関連する要因探索のための 2 変量解析（ χ 二乗検定）、「今後、貴大学で強化が必要なこと」全 20 問に対し探索的因子分析を行った。探索的因子分析には SPSS (Statistical package for Social Science) Ver.24 を使用した。また、卒業時到達度評価のための取り組み、今後大学や領域で強化が必要な教育内容等についての自由記載については、多様な観点を示すことができるレベルで質的分析を行った。対象者や所属大学の匿名性の担保、個別郵送投函による任意性の確保、データの厳密管理等の配慮を行い、千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号 28-6）

<研究結果および考察>

248 大学の管理責任者 1 名、科目責任者 1~4 名（最大 992 名）の対象者のうち、管理責任者 78 名（31.5%）、科目責任者 260 名（25.2%）から、回答があった。「到達目標 2011」は、回答者全体の 73.7%が活用しており、カリキュラムの検討や教育内容の網羅性の確認などに多く活用されていた。活用していないという回答であっても、その理由を見ると、大学独自のものととの比較確認、内容を点検する際に参照している等、実際には何らかの活用をしていたものが含まれていた。

また、「到達目標 2011」を『活用している』回答者は、卒業時到達目標評価を『実施している』と回答している者が多く、看護学教育の質確保のための取り組みを『できている』と回答している率が高く、どちらも有意差がみられた。つまり、「到達目標 2011」は、看護学教育に携わる教員に対して、必要な教育内容を知らしめ、卒業時到達目標評価の促進、看護学教育の質確保の向上に貢献していたことが示された。

「到達目標 2011」の活用方法についての自由記載からは、各大学での工夫を確認することができた。例えば、「学部全体で共有し、教育の自己評価に活用」、「教育内容と AP・CP・DP の整合性等を全体的な確認に活用」などは、全体で教育の点検評価をする際に、「到達目標 2011」を活用していることを示していた。また、オープンキャンパスや父母会で大学での学びのイメージを説明するために活用され、学生と教員の相互評価の資料とする活用例も示された。以上の工夫は、教員同士、教員・学生間、大学・関係者間の教育に関するコミュニケーションツールとして「到達目標 2011」が活用されていることを示していた。

一方、学生の自己評価や、随時の評価への「到達目標 2011」の活用率は低く、卒業時到達目標に関する項目では、多くの教員が、「具体的な表現でないと学生自身が判断に迷う」と回答していた。

「学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」である「到達目標 2011」は、教員の教育内容の網羅性の認識を高め、卒業時到達目標評価を促進し、看護学教育の質保証への一定の貢献をもたらしたといえる。一方で、学生自身の活用と、社会への質保証の説明責任の観点からは、妥当な到達目標の設定や、その表現がまだ十分ではないことが示唆された。

さらに、「到達目標 2011」への考えに関する自由記載の分析結果から、【社会情勢の変化に対応できるものになっているか見直しが必要】、【社会情勢の変化や対象の変化に合わせて項目の見直しが必要】、【看護の対象の変化に合わせて随時カリキュラムの見直しが必要】、【領域や分野の特性に見合った教育内容の見直しが必要】という意見が集約された。一方、【学生や教員の質の変化により、到達目標が現実とずれているため、到達が困難】、【目標達成と臨地実習における実施できる看護展開から到達の限界】の意見があり、到達レベルの検討と到達を促進するための工夫の必要性が示唆された。また、【大学における看護学教育のコアとは何かの検討が必要】、【実践能力の発展に応じられる目標になっているかの確認が必要】、【コアと大学の独自性を反映させたカリキュラムの関連性を考える必要がある】、【活用する際、領域の特性に合わせて独自のツール等を作成する必要がある】といった意見もあった。これらを【到達目標の具体性が見えない】、【育成すべき人材育成像が描きにくい】という意見と合わせて考えると、「到達目標 2011」の問題というよりも、個々の大学における到達目標や育成すべき人材育成像の検討に課題があると推察される。

つまり、コアとなる教育内容をふまえた大学独自・領域独自の教育内容の検討の促進をすすめるためには、「到達目標 2011」のようなコアを示す資料に、コアと大学の独自性を反映させた教育の関係性がイメージできる説明や、大学内外において、教育に関する検討時のコミュニケーションツールとしての活用可能性を提示することが重要と考える。

加えて、「到達目標 2011」への自由意見では、【個々の教育方法・評価への示唆や活用するためのガイド等が必要】、【活用する際の教員間の連携・体制づくり、共通理解の基礎となるFDが必要】があげられていた。また、開設期間からの年数が短い大学は、「到達目標 2011」の活用が低かった。活用しない理由として、教員の周知・理解不足もあるため、コアを有効に活用していくための大学への周知・支援ガイドの必要性が示唆された。

＜成果の公表＞

本研究については、文部科学省医学教育課看護教育専門官より、大学における看護系医療人養成の在り方に関する検討会の準備に向けて迅速な調査と結果報告の要請があったため、8月末に一次集計結果を専門官に報告している。また、10月に開催した看護学教育ワークショップにおいて、118大学の参加者に報告している。さらに、11月に開催された「大学における看護系医療人養成の在り方に関する検討会」会議でも報告した。その後、詳細分析を行い、報告書をまとめ（平成28年度報告書）、平成28年度末開講している看護系254大学に送付した。

2) 「学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発（後ろ向き事例研究）」(研究2-1)

前述した通り、研究1の結果を、看護学教育ワークショップ（WS）において報告し、各大学における卒業時到達目標評価に活用する上での課題や実際のアクションプランの作成を試み、情報共有を行った（詳細は、別項目に記載）。このWSから、社会や看護学教育の動向が個々の教員には必ずしも届かず、「到達目標 2011」を知る機会や教育への具体的な活用方法がわからないなど、組織的な教育の質改善に取り組むことが困難な大学がある一方、研究活動に主軸を置く必要があり、一定以上の教育の質の維持以上の課題には取り組みにくい大学があり、多種多様なニーズに応じる提言を示す必要性が明らかになった。そこで、まず、実際に先駆的に「到達目標 2011」を活用している7大学の取り組みについて後ろ向き事例研究に着手した。

この7大学は、平成27年度に、研究1における調査票作成のために行ったインタビュー対象大学である。平成27年度調査時のこの7大学の選定にあたっては、先駆的に「到達目標 2011」を活用している大学を含み、設置主体、地域、開学年数などの特徴の異なる大学を対象としていた。このインタビューデータには、「到達目標 2011」活用の多様性を示唆する豊富なデータが含まれていた。そこで、データの二次利用の同意を得て、「到達目標 2011」の活用を含む教育の質改善への取り組みの実態および特徴と背景要因について、分析対象大学ごとに記述し、事例を比較分析することで、看護学教育の質改善に関わる背景要因を見出すこととした。平成28年度3月時点では、分析対象大学ごとの質的データ分析結果について、各大学に内容チェックを依頼中である。

3) 「学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発。卒業時到達目標評価を含む自大学の看護学教育の継続的質改善に取り組む大学への事例研究（前向き事例研究）」(研究2-2)

また、看護学教育ワークショップでは、「卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすか～大学改革時代における看護学教育の継続的質改善への挑戦～」をテーマとしていたため、全日程参加者の中には、今後、組織的に看護学教育の質改善に取り組もうとする大学があった。また、その取り組みに、看護学教育研究共同利用拠点である千葉大学看護学研究科附属看護実践センター（当センター）と、質改善に向けた協働のニーズがある場合もあった。そこで、WS参加者を窓口として、当センターとの協働に

よる取り組みをも分析し、多様な特性をもつ看護系大学における卒業時到達目標の活用を含む教育の質改善の様相、要因、要件等を示す事例提示を行う前向き事例研究に着手した。6 から 7 大学を予定しており、平成 28 年度 3 月時点では、2 大学から、質改善に向けた協働の事前インタビューとして、FD や質改善の取り組みに関するデータ収集を終えている。ただし、WS 参加者を窓口とすることでは、アクションプランを組織的な取り組みにつなげていくことの困難などもあり、研究協力を得ることが難しい状況がわかってきている。現在、さらに数校の大学と調整中であり、平成 29 年度には、対象大学とセンター教員との間で行った教育の質改善に関する相談・支援内容に関するデータを加え、報告する予定である。

4) 「学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発. 看護系大学における卒業時到達目標評価を含む教育の質改善への支援ニーズ(支援ニーズ web 調査)」(研究 2-3)

本研究は、前述の WS 参加者に対して行う参加後フォローアップ調査の二次利用で行うものである。この事後フォローアップ調査は、拠点としての当センターが、WS による情報共有とネットワーク化の促進を看護学教育の質改善により有効にしていくための調査であり、参加者が WS 中に立案したアクションプランへの取り組み状況や支援ニーズの調査を含んでいる。そこで、このデータを二次利用し、到達目標 2011 の活用を含む WS 後の各看護系大学の教育の質改善に向けた取り組み状況と外部支援ニーズを明らかにし、本事業成果に求められている提言を検討する資料としていくこととした。この調査は、平成 27 年度に試行版作成した調査分析システムを用いて行う。この調査分析システムは、平成 27 年度試行版時点では、将来的に、卒業生継続評価データベースとして実用することを目指し、まず、研修事業の評価システムを試作し、援用して構築した。そこで、平成 28 年度は、この試行版を、「到達目標 2011」の活用提言に直結する事業である看護学教育ワークショップの調査・分析システムとして実装化し、修了後の事後フォローアップ調査で運用を開始し、研究 2-3 は、これを二次利用するものと位置付けている。

平成 29 年度は、これらの研究 1、研究 2-1、2-2、2-3 の結果を踏まえ、「到達目標 2011」の活用を含む看護学教育の質改善取り組みへの提言(案)を作成し、より多くの看護系大学と協議して、本事業の最終成果を提出する予定である。

5) 実施体制

センター長	吉本 照子
教授	野地 有子
教授	和住 淑子 (研究 2-1 代表者)
准教授	黒田 久美子 (研究 1, 研究 2-2, 2-3 代表者)
准教授	錢 淑君
特任准教授	吉田 澄恵

6) 平成28年度の実施日程

項目	実施日程												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
全国の看護系大学における「到達目標2011」の活用実態と背景要因の解明（研究1）													
	調査票完成		倫理審査受審	データ収集	一次分析	専門官へ報告	WSにて報告	在り方検討会報告			詳細分析		報告書作成
看護学教育ワークショップ		開催準備					開催				事後フォロー		事後フォロー調査
「到達目標2011」を活用している7大学の取り組みの後ろ向き事例研究（研究2-1）									計画書作成		倫理審査		分析
											データ二次利用同意確認		
卒業時到達目標評価を含む自大学の看護学教育の継続的質改善に取り組む大学への事例研究（研究2-2）									計画書作成		倫理審査		データ収集
看護系大学における卒業時到達目標評価を含む教育の質改善への支援ニーズ（研究2-3）									計画書作成				倫理審査 データ収集
調査分析システムの実装													
			試用・調整									運用	

4. プロジェクト研究

プロジェクト研究は、個人又は複数の共同研究員と千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員が研究プロジェクトを形成し、看護固有の機能を追求する看護学の実践的分野に関する調査研究を行うものである。研究期間は1年とし、必要に応じて継続している。平成28年度は、下記のテーマで実施された。

▶ プロジェクト1

「新人看護師養育担当者育成プログラムの精錬」

I. プロジェクト研究員

共同研究員 三谷 理恵 (神戸大学大学院保健学研究科・助教)
西山 ゆかり (四條畷学園大学・准教授)
室屋 和子 (佐賀大学医学部看護学科・准教授)
杉原 多可子 (公益社団法人大阪府看護協会教育研究部・部長)
鈴木 康美 (埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科・教授)
田村 清美 (東邦大学医療センター大森病院・看護部長)
和住 淑子 (看護実践研究指導センター・教授)
黒田 久美子 (看護実践研究指導センター・准教授)

II. 研究の概要

平成22年度4月から新人看護職員の卒後臨床研修が努力義務化された。平成21年12月に厚生労働省より出された「新人看護職員研修ガイドライン」では、「教育担当者に求められる能力」や「育成のための研修プログラム例」については明示されてはいるが、それらの能力を組織としてどのように育んでいくのかについては言及されていない。

このような背景を踏まえ、本プロジェクトでは、①「新人看護師教育担当者能力自己評価票」、②自施設完成型新人看護師教育担当者育成プログラムを開発してきた。さらに、平成26年度には、新人看護師教育担当者育成プログラムを企画運営する教育責任者向け研修プログラムを開発した。平成28年度は、これらの成果を踏まえ、「新人看護師教育担当者能力自己評価票」の実用可能性の検討、教育責任者向け研修プログラムの修正、評価を行った。

III. 研究状況

1. 「新人看護師教育担当者能力自己評価票」の実用可能性の検討

平成27年度に、以下の研究計画を立案し、千葉県、大阪府の2カ所において、インタビュー調査を実施した。平成28年度は、収集したインタビューデータの分析を行った。

1) 研究目的

本研究の目的は、「新人看護師教育担当者能力自己評価票」の実用可能性の検討として、以下を明らかにする。

- (1) 「新人看護師教育担当者能力自己評価票」は、新人看護師教育責任者が新人看護師教育プログラムの企画の際、自組織の課題の把握に有用であるか
- (2) 新人看護師教育担当者は、教育プログラム実施前後に「新人看護師教育担当者能力自己評価票」を用いて自己の能力評価をどのように実施し、活用できたか
- (3) 新人看護師教育責任者は、教育プログラム企画、運営時に、「新人看護師教育担当者能力自己評価票」を用いて、教育プログラムの評価をどのように実施し、活用できたか

2) 研究方法

(1) 対象

平成 27 年度、千葉県、大阪府の看護協会が主催する新人看護職員研修責任者・教育指導者研修会の参加者のうち、研究協力に同意した研修責任者の任にある看護職 10～12 名程度。

(2) データ収集方法

収集するデータは、以下である。

① 対象者への 2 回の半構造化面接、及び個人の基礎情報（職位、経験年数等）

1 回目：2016 年 1 月～3 月（2017 年度の新人看護師教育プログラム完成時）

2 回目：2017 年 10 月～3 月（2017 年度の新人看護師教育プログラム実施後、中間評価～年度末評価時）

半構造化面接では、インタビューガイドを用いて、「新人看護師教育担当者能力自己評価票」の有用性に関する教育責任者の認識、行動を問う。

② 新人看護職員研修責任者・担当者研修会時の演習で企画した新人看護師教育プログラム内容が記載されているワークシート、レポート。2017 年度の新人看護師教育プログラムに関する資料。

尚、各施設の教育担当者が記載した「新人看護師教育支援担当者能力自己評価票」自体はデータとせず、その自己評価状票を活用した新人看護師教育責任者の思考、認識、行動を通してその活用状況を確認する。

(3) 分析方法

逐後記録から、研究目的ごとに関連のある内容の部分を抽出し、意味内容をそこねないように要約し、切片化したものを内容分析する。

2. 教育責任者向け研修プログラムの実施、評価

平成 28 年度は、昨年度の実施後評価を踏まえ、一昨年開発した、新人看護師教育担当者育成プログラムを企画運営する教育責任者向け研修プログラムを一部修正し、要請のあった都道府県看護協会において実施した。修正した研修プログラムを次ページに示す。

また、開発した研修プログラムを、第 20 回日本看護管理学会学術集会において発表した。

黒田久美子，和住淑子，西山由加里，鈴木康美，室屋和子，三谷理恵，杉原多可子：新人看護師教育責任者支援プログラムの開発-自施設の評価をふまえた研修企画能力向上への支援
一．第 20 回日本看護管理学会学術集会抄録集，347，2016.

なお、本プロジェクトは、「新人看護師教育担当者能力自己評価票」、「自施設完成型新人看護師教育担当者育成プログラム」、「新人看護師教育責任者支援プログラム」の開発及び実施評価、という一定の成果を上げることができたため、今年度で終了することとした。

新人看護職員研修責任者研修

目 標：研修責任者として役割を理解し、新人看護職員研修企画・運営・実施・評価に必要な知識を学び、自施設の系統的な研修プログラムの策定及び企画の能力をつける。

対象者：施設の新人看護職員研修の研修責任者の役割を担う者、またはその予定のある者

月日	時間	研修内容
1 日目	9:30～10:45	講義 1 新人看護職員研修の企画の基本的考え方 ・看護組織と人材育成(和住)・・・45分 演習 1: 以下の内容から自組織の現状分析(個人ワーク)・・・30分 ・自施設や看護部の理念・目的 ・自施設の看護部の組織・体制・看護職員数(職員数の構成) ・入院患者や入院患者の特徴(疾患、年齢構成、転帰) ・自施設の地域性・ニーズ、連携する保健医療福祉機関 など 講義 2 企画に必要な知識 ・成人学習論(鈴木)・・・45分 ・コンサルテーション(黒田)・・・20分 ・教育評価(黒田)・・・30分
	休憩 10分 10:55～12:30 13:30～14:15 休憩 10分+移動 5分 14:30～16:30	講義 3 研修計画立案のプロセス(西山)・・・45分 演習 2: 以下の内容から自組織の現状分析 個人ワーク ・・・20分 ・自施設の教育に関する研修計画・教育評価 グループワーク ・・・80分 ・各施設の自組織の現状分析の共有 ・現状分析から見てきたことをグループ内で発表・討議 個人ワーク ・・・20分s ・自施設の研修の現状を見直し、気づいたこと(自施設の研修資料持参) まとめと翌日の説明
2 日目	9:30～12:00 休憩 10分	演習 1 グループワーク ・・・120分 ・前日の演習 2 を踏まえてグループ内で共有 ・グループ内の 1 施設を選出し、教育計画の立案
	13:00～14:50 休憩 10分 15:00～16:10	演習 1 の続き ・・・110分 ・教育計画の具体的立案+発表ポスター作成 (目的、目標、方法など、自施設の現状から具体的研修計画の立案) 演習 2 研修計画の発表・まとめ ・ポスターツアー(G で 4 回発表) ・他 G からのアドバイス、研修企画を参考にして、企画案の精錬 ・「自施設独自の研修立案」宣言

▶ プロジェクト2

「看護師長が取り組む組織変革プロジェクトを支援する研修プログラムの精練に関する研究」

I. プロジェクト研究員

共同研究員 山田 典子（東京大学医学部附属病院・看護部長）
石川 ひとみ（秋田大学医学部附属病院・看護師長）
菊田 直美（千葉大学医学部附属病院看護部・看護師長）
比田井 理恵（千葉県救急医療センター看護局・副看護師長・急性・重症患者看護専門看護師）
河部 房子（千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科・教授）
若杉 歩（千葉大学大学院看護学研究科・博士後期課程）
和住 淑子（看護実践研究指導センター・教授）
黒田 久美子（看護実践研究指導センター・准教授）

II. 研究の概要

本研究プロジェクトは、平成25、26年度、看護管理者研修（アドバンスコース）プログラム開発のためのアクションリサーチ型共同研究を発展させたものである。平成25、26年度は、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターの教員との共同研究で、課題解決プロジェクトを実施し、そのプロセスにおいて、課題解決プロジェクトにおける困難や必要な支援を明らかにし、研修プログラムを開発することができた。本年度は、昨年度に引き続き、この研修プログラムをさらに精練する目的で、アクションリサーチ型共同研究を実施し、プログラムの修正を行った。

III. 研究状況

1. 共同研究員の課題解決プロジェクトのテーマとプロジェクト実施状況

【A】

テーマ：救急医療施設の特異性を踏まえた臨床実践能力の段階的習得に向けたクリニカルラダーの再構築

経過：A施設は救急医療に特化した施設であるが、これまでのラダーは、救急看護に特化した内容が少なく、救急医療のガイドライン等を参考に、呼吸、循環などの項目立てとなっていた。

平成25、26年度のプロジェクト研究に実施した現状分析から、救急看護の実際や、どのような患者にどのような看護の必要性があるのかが見えづらかったため、センター教員による支援が開始され、施設の役割や看護師の経験等の言語化が促され、現状分析の方法論が提案され、A施設で必要な看護が言語化され、クリニカルラダーの柱建てが明確になった。

平成28年度は、平成27年度に引き続き、施設内でクリニカルラダー構築に向け、到達目標の表現方法等について、センター教員のアドバイスを受けた。

【B】

テーマ：複数診療科の入院がある病棟での看護の改善－グループ活動による成果－

経過：B共同研究者の担当する病棟は混合病棟である。同じ疾患や治療、検査を繰り返し経験する機会が少ないせいか、自部署のスタッフが、専門病棟の医師や看護師から知識不足やアセスメントの不十分さを指摘されると、「専門病棟と同じようにやるのは無理」というように、

あきらめや逃避の気持ちから、自主的に看護を考えることを避けてしまう傾向にあることが気になっていた。そこで、グループ活動による看護業務の改善活動を推進するプロジェクト計画を立案し、実施した。

平成 27 年度は、実施したプロジェクトの成果を検証するため、参加したスタッフにインタビュー調査を実施し、その結果を分析した。平成 28 年度は、本プロジェクトの成果について、学会発表に向けた準備を行った。

【C】

テーマ：タイムコンシャスな組織づくりに向けた看護師の意識変容への看護管理者の支援

経過：C 共同研究員は、スタッフの時間管理への意識を高める、という課題で、組織変革プロジェクトを実施、評価し、センター教員の支援を受けて、平成 26 年度に学会発表した。

平成 28 年度は、学会発表した内容を研究論文にまとめ、学術誌に投稿した。

【D】

テーマ：増床・組織再編・病棟移転を若手リーダー育成のチャンスとするための看護管理者の支援内容

経過：D 共同研究員は、自身が師長を担う病院の ICU において、自身がプロジェクトリーダーとなり、若手リーダーの育成を目的に、約 10 ヶ月間にわたり、増床・組織再編・病棟移転プロジェクトを実施した。

平成 28 年度は、プロジェクト期間中に起こったスタッフの変化および師長の認識と行動を分析し、①スタッフは患者中心の看護を実現する方向に変化したか、③師長は目標に沿ってプロジェクトを遂行できたか、という観点から成果を検証し、第 20 回日本看護管理学会学術集会において発表した。

2. 研修プログラムの精練に向けた活動

以上の、共同研究員のプロジェクト実施状況と必要とされた教員の支援内容を踏まえ、すでに開発した「看護師長が取り組む組織変革プロジェクトを支援する研修プログラム」をさらに精練させ、完成させた。完成させたプログラムは、次ページに示した。

なお、「看護師長が取り組む組織変革プロジェクトを支援する研修プログラム」を完成させることができたため、本プロジェクトは、今年度で終了することとした。

表 看護師長が取り組む組織変革プロジェクトを支援する研修プログラム

プロジェクトの プロセス	達成目標	活動内容 センター教員の支援	スケジュール
課題の明確化	<ul style="list-style-type: none"> ○解決したい課題の本質を見極める ○自身の中にある前提、思い込みを外し、客観的に相対化して組織の現状分析ができる ○看護管理者としての自分も含めてプロジェクト研究の対象としてとらえられる ○看護管理者として十分なリフレクションができる 	<ul style="list-style-type: none"> グループ別ミーティング リフレクション・フレームワークの活用 複数ミーティング 	<ul style="list-style-type: none"> 1年目 6月頃まで
計画立案	<ul style="list-style-type: none"> ○業務と研究の関係性を整理し、計画立案ができる ○プロジェクトによる変化を捉えることが可能な方法論を選択する ○わかりやすい研究計画を立案する ○支援を受けながら、倫理審査を受けることができる 	<ul style="list-style-type: none"> 複数ミーティング リフレクション・フレームワークの活用 倫理審査のサポート 	<ul style="list-style-type: none"> 8月～9月まで
実施・評価	<ul style="list-style-type: none"> ○プロジェクトによって生じた変化について十分にリフレクションする ○自身のかかわりを含む変化をわかりやすく記録する方法を検討する ○プロジェクトの目的とのつながりを踏まえ、起こった変化を評価する視点、方法を定める 	<ul style="list-style-type: none"> 個別支援 センター教員によるデータ収集を含む リフレクション・フレームワークの活用 	<ul style="list-style-type: none"> ～2年目5月
公表	<ul style="list-style-type: none"> ○実施したプロジェクトを公表する意義はどこにあるのかを検討する ○指定された文字数、時間制限の中で、プロジェクトの全貌・意義をわかりやすく伝える ○公表による意見や関心を踏まえて考察を深める 	<ul style="list-style-type: none"> 個別支援 複数ミーティング 	<ul style="list-style-type: none"> 2年目5月～3月 施設内発表 学会発表など 論文投稿

▶ プロジェクト3

「教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える看護学教員向けの FD コンサルテーションの開発と評価」

1. プロジェクト研究員

共同研究員	飯岡 由紀子	(東京女子医科大学・教授)
	山本 真実	(岐阜県立看護大学・講師)
	高島 尚美	(関東学院大学看護学部・教授)
	和住 淑子	(看護実践研究指導センター・教授)
	黒田 久美子	(看護実践研究指導センター・准教授)

2. 研究概要および研究経過

1) 「看護学教育におけるFDマザーマップ」とは

大学教育への移行が急速に進展する我が国の看護学教育の分野では、毎年約10校のペースで大学の新設が続き、常に大学教員の需要が供給を上回る状況となっている。看護系大学教員には、変化する看護職の役割に見合った実務能力と看護学を学問として教授する教育能力との両立が強く求められるが、このような能力を備えた教員の確保に困難を抱えている大学が多い。さらに、教育現場と臨床現場を行き来してキャリアを形成している教員も多く、組織的・体系的な教員としての能力開発には課題が多い。しかし、看護系大学教員の能力開発の方向性を示し、体系的なFD企画を導く指針はななかった。

そのような中、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターは、平成23～27年度にかけて、「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進」プロジェクトに取り組み、「看護学教育におけるFDマザーマップ」を完成させた。

「看護学教育におけるFDマザーマップ」は、看護学教育の特質を踏まえた看護系大学教員に求められる能力が、**〔基盤マップ〕〔教育マップ〕〔研究マップ〕〔社会貢献マップ〕〔運営マップ〕**の5つのマップに体系的に配置され、教員の能力レベルは、「レベルⅠ：知る」「レベルⅡ：自立してできる」「レベルⅢ：支援・指導、拡大できる」という3段階に区分されている。(http://fd.np-portal.com/)

2) FDコンテンツの開発

「看護学教育におけるFDマザーマップ」を実際に活用した大学からは「必要とされる能力が体系的にまとまっていてよい」「自大学のFDを見直す良い機会になる」等の評価を得た一方で、「実際にFDマザーマップをどのように活用すればよいのか」「具体的にはどのようなFD企画を立案すればよいのか」といった戸惑いの声も聞かれた。FDマザーマップの開発と同時に作成した「看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイド」ではFDマザーマップの活用例を紹介してきたが、看護学教育の現場では、より具体的、実践的なFDツールが求められており、FDコンテンツ開発の必要があることがわかった。

開発するFDコンテンツは、FDマザーマップそのものを紹介する「FDマザーマップ紹介コンテンツ」、FDマザーマップを活用してFDを企画する教員を対象とした「FD企画者向けコンテンツ」、そして、FDマザーマップの各区分や能力レベルに対応したFD企画を提案する「FDマザーマップ対応型FDコンテンツ」の3種類とした。

3) 本FDマザーマップ対応型FDコンテンツの開発について

本プロジェクトにおいて開発するFDコンテンツは、前述の3種類のFDコンテンツのうち、「FDマザーマップ対応型FDコンテンツ」に該当する。

本プロジェクトでは、看護系大学教員として、日々の学生との関わりの中で、どのように対応したらよいか、困る場面に着目して開発した。一般に、このような状況に直面した場合、その対応は、教員個人に任されているが、教員間で対応が食い違ったり、後から組織的な問題に発展したりすることもある。つまり、対応に困る状況に対する個々の教員の反応は、その教員個人のもつ教育観の現われであり、また、それだけではなく、組織のあり方にも影響を受けているといえる。

そこで、本FDコンテンツは、日々の学生との関わりの中で、教員が対応に困る典型的な場面を10事例とりあげ、教員として、組織として、どのような対応が考えられるか、その根拠は何か、等を教員間で自由に話し合えることを目的に開発した。

4) 開発したFDコンテンツ

平成28年度は、上記目的に沿って開発したFDコンテンツを、報告書としてまとめ、全国の看護系大学及び関係機関に配布した。

〔報告書〕看護学教育研究共同利用拠点，千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター，「教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える看護学教員向けFDコンテンツ開発と評価」プロジェクト研究共同研究員，和住淑子，黒田久美子，高島直美，飯岡由紀子，山本真実：「看護学教育におけるFDマザーマップ」対応型，FDコンテンツ開発報告書，教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える－学生への対応に困った10事例を通して－，1～48，2017年3月

2. 今後の課題

看護系大学教員として日々直面する現状の問題から必要なFDコンテンツを開発する過程で、あらためて看護系大学教員として備えるべき能力を明らかにすることができ、FDマザーマップを活用することで、それらの能力を体系的に整理することができた。これは、「教員としての日々の活動とその活動の中から生まれる問題意識を大切にする」、「FDマザーマップを活用して問題を整理する」、「問題解決に資するFDコンテンツを開発する」のいずれから着手しても、看護系大学のFD活動を推進できる可能性がある、ということを示唆している。今後は、開発したFDコンテンツの評価研究に取り組む計画である。

➤ プロジェクト4

「看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究」

1. プロジェクト研究員

共同研究員	大友 英子	(東京大学病院・国際診療部部長)
	西山 正恵	(千葉県立保健医療大学・講師)
	池袋 昌子	(筑波大学病院・副看護部長)
	坂元 眞奈美	(鹿児島大学病院・副看護部長)
	相原 綾子	(日本赤十字看護大学・助手)
	望月 由紀	(千葉大学大学院看護学研究科・特任准教授)
	炭谷 大輔	(千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員)
	飯岡 由紀子	(東京女子医科大学・教授)
	近藤 麻理	(東邦大学 看護学部・教授)
	小寺 さやか	(神戸大学大学院保健学研究科・国際保健学領域・准教授)
	溝部 昌子	(国際医療福祉大学福岡看護学部・准教授)
	野地 有子	(看護実践研究指導センター 教授)

2. 研究の概要

本プロジェクト研究は、平成 25 年度より開始された継続プロジェクトである。国際的な医療環境の変化を受け、病院の国際化はアジア諸国では急速に進展がみられるが、日本は立ち遅れている。外国人患者や看護師を受け入れている病院も多いが、言語、生活習慣、価値観、社会背景の違いに対する戸惑いが多く、よい看護を提供しても誤解が生じ医療事故も危惧され、病院における看護職の文化的能力の教育と環境整備が急務である。2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、医療通訳の整備なども進められてきているが、医療通訳の使い方なども含めた、看護職の文化的能力の向上が求められてきている。

そこで、本研究プロジェクトでは、現状を把握し、看護職の文化的能力の評価を中心にすすめる。平成 25 年 11 月より、科学研究費補助金(基盤研究(A)代表 野地有子)を受け実施している。

3. 本年度の成果

1) 看護職調査による量的アプローチによる検討結果

前年度に、病院調査参加病院のうち参加希望のあった病院を対象に、看護職のカルチュラル・コンピテンスに関する調査を実施し、量的アプローチによる検討を行った。195 病院の中から、看護職のカルチュラル・コンピテンス調査に参加する病院を募ったところ 19 病院からの参加を得た。調査票は、Caffrey Cultural Competence Health Services28 項目の日本語版(J-CCCHS)を作成した。9,140 名に配布し、7,494 名(91.3%女性、平均年齢

32.6 歳) の有効回答を得た。統計的に信頼性と妥当性が検証された。CCCHS は 5 段階のリッカートスケールで、加算により得点が高い方が、カルチュラル・コンピテンスが高いとアセスメントされる。本研究参加者の 28 項目の平均は、1.85 (SD0.52) であり、米国の先行研究と比較して低いことが示された。

2) 看護職調査による質的アプローチによる検討結果

先の調査票に回答した 7,494 名の看護職のうち、外国人患者を受け持ったことのある者は 5,430 名 (72.5%) であり、困ったことの自由記載件数は、4,738 件 (63.2%) みられた。テキストマイニング分析により、74 カテゴリーが生成され、看護職の能力開発の必要な領域として 4 領域があげられた。さらに、臨床家、看護管理者、看護学教育者、IT 専門家、哲学研究者など学際的なプロジェクトチーム構成員の特徴を活かして、4,738 件の困ったことの記載から、キーワード (91)、アセスメント項目 (20) の創出を行った。アプリにおける教育モジュールの開発につなげる構造化を行った。

3) 研究成果活用のためのアプリ開発

看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究を進めるためのアプリの開発を継続した。昨年度、全体構造の検討を踏まえ、外国人患者に対する看護ケアに関する事例集を作成したところであり、さらに本スケールを活用して、臨床応用に資するアプリの開発に着手した。社会実装に向けた研究を継続し、我が国の看護職のカルチュラル・コンピテンスが病院などの組織の核となることを目指す基盤的研究成果を得た。

4. 次年度の計画

これまで蓄積されたデータおよび知見の総括を行い、臨床および教育における活用と環境整備のための政策提言等を行い、看護国際化のガイドラインづくりを行う予定である。

➤ プロジェクト5

「公的病院における ELNEC 教育プログラムの開発」

(ELNEC: End of Life Nursing Education Consortium)

1. プロジェクト研究員

共同研究員 Roger Strong (サンディエゴ退役軍人病院 看護管理者)

近藤 麻理 (東邦大学 看護学部・教授)

相原 綾子 (日本赤十字看護大学・助手)

小寺 さやか (神戸大学大学院保健学研究科・国際保健学領域・准教授)

野地 有子 (看護実践研究指導センター 教授)

2. 研究の概要

本プロジェクトは、エンド・オブ・ライフ看護学への関心の高まりを背景に、センターの大学病院看護管理者への研修プログラムの特徴を活かして、公的病院における本テーマに関する教育プログラムの検討を行うために開始したプロジェクトであり、昨年度に引き続き継続している。米国の ELNEC 開発のメンバーである、Dr. Roger Strong を共同研究員に迎え、米国本部より ELNEC 指導者の認定を受けた共同研究員からなるプロジェクト研究員の構成であることから、ELNEC 教育プログラムを中核に置いた。

3. 本年度の成果

1) Dr. Roger Strong (RN, PhD, ACHPN, FPCN) 氏からの情報提供

本プロジェクトの共同研究員である Strong 博士は、30年にわたる緩和ケアでの臨床実践と研究および ELNEC を通して米国内はじめ国際的にエンド・オブ・ライフケアの教育に尽力されている。豊富な経験と知見を踏まえ、本プロジェクトに ELNEC の教材の最新版の提供ならびに、助言がなされた。教材の使用許可は得ている。

公的病院でエンド・オブ・ライフケアを提供するために、本年度は ELNEC の9つのモジュールの中から「文化とスピリチュアルな配慮」について検討した (図1、図2)。

2) エンド・オブ・ライフにおける文化のアセスメント

エンド・オブ・ライフにおける文化のアセスメントは、次の8項目であった。

- ① コミュニケーションの様式
- ② 意思決定
- ③ 死に関連する儀式
- ④ 宗教や信念
- ⑤ ジェンダーや年齢
- ⑥ パワー

- ⑦ 歴史的あるいは政治的要因
- ⑧ 地域資源

3) 通訳について

通訳の使いかたについては、次の4項目であった。

- ① 家族員を通訳として依頼しない
- ② 訓練された通訳を使うか、保健医療の訓練を受けた電話通訳サービスを活用したボランティアを使う
- ③ 患者や家族に向かって話す（通訳に向かって話さない）
- ④ 家族や患者に、理解したことを繰り返して話すように依頼する

4) 文化に配慮したケア

文化に配慮したケアには、次の5項目があげられた。

- ① 知識をもつ
- ② 固定観念（先入観）を持たずに、注意深くアセスメントする
- ③ 多様な信念や実践に敬意を持つ
- ④ 一人ひとりの価値観を理解し尊重する
- ⑤ 交渉する

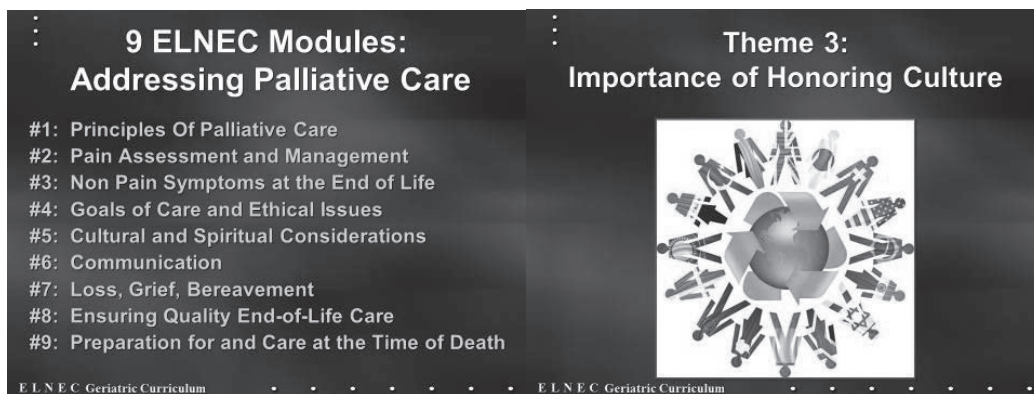


図1. ELNEC の9つのモジュール

図2. 文化を大切にすることの重要性

Cultural Assessment at the End of Life	Cultural Assessment at the End of Life (cont.)
<ul style="list-style-type: none"> ▪ Communication styles ▪ Decision-making ▪ Death rituals ▪ Religious beliefs ▪ Gender age  <p data-bbox="614 622 798 658">Lipson & Dibble, 2005; Mazanec & Panke, 2010</p> <p data-bbox="233 663 443 676">ELNEC Geriatric Curriculum</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▪ Power ▪ Historical or political factors ▪ Community resources  <p data-bbox="810 663 1011 676">ELNEC Geriatric Curriculum</p>

図3. エンド・オブ・ライフにおける文化のアセスメント

Use of Interpreters	Culturally Sensitive Care: General Approaches
<ul style="list-style-type: none"> ▪ Avoid using family members ▪ Use trained cross-cultural interpreters or volunteers with health care training Telephone translation services ▪ Speak to patient/family (not interpreter) ▪ Ask family/patient to repeat what is understood <p data-bbox="233 1196 443 1209">ELNEC Geriatric Curriculum</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▪ Knowledge ▪ Careful assessment without stereotyping ▪ Respect for diverse beliefs and practices ▪ Understanding and honoring one's own values ▪ Negotiation <p data-bbox="810 1196 1011 1209">ELNEC Geriatric Curriculum</p>

図4. 通訳について

図5. 文化に配慮したケア

5) ELNEC の事例

「文化とスピリチュアルな配慮」のモジュールに収録されている8つの事例をすべて翻訳し検討し、教育プログラムの参考とした。

4. 次年度の計画

地域包括ケアの推進とも連動して、公的病院における ELNEC 教育プログラムの開発について ELNEC モジュールの検討を日本の文化的背景を踏まえて、文化対応能力との関係から継続して進める。

➤ プロジェクト6

「FD コンテンツ開発(国際)

－10年後を見据えたグローバル人材育成と国際交流推進－

1. プロジェクト研究員

共同研究員	西山 正恵	(千葉県保健医療大学・講師)
	近藤 麻理	(東邦大学 看護学部・教授)
	飯岡 由紀子	(東京女子医科大学・教授)
	相原 綾子	(日本赤十字看護大学・助手)
	小寺 さやか	(神戸大学大学院保健学研究科 国際保健学領域・准教授)
	溝部 昌子	(国際医療福祉大学 福岡看護学部・准教授)
	野地 有子	(看護実践研究指導センター 教授)

2. 研究の概要

本センターで開発した、看護学教育のためのFD マザーマップの活用推進のためのコンテンツ開発を目的とした。本プロジェクトチームは、国際交流推進のためのコンテンツに取り組んだ。FD マザーマップの位置づけは、教育マップ2-6「学生支援」の中の「国際交流の推進」を中核とした。

3. 本年度の成果

本年度の成果を、日本看護科学学会第36回学術集会（平成28年12月10日～11日 於東京国際フォーラム）で下記の3つの方法で報告した。

-
- 口演： 看護系大学における国際交流と大学間・学部間協定に関する調査研究
-MOUの評価の視点から-
 - 交流集会：看護系大学におけるグローバル人材育成と国際交流の推進を考える
-国際交流委員にあたってしまったら！-
 - 示説： 看護系大学における国際交流推進のためのFD コンテンツの効果と課題
-受講後のアンケートより-
-

1) 口演：看護系大学における国際交流と大学間・学部間協定に関する調査研究-MOUの評価の視点から-

(結果の抜粋)

○アンケート集計結果（回収 21）

参加者の所属は、看護系大学が 19 名と最も多かった。参加者の年齢は、40 代 9 名 50 代 8 名で 8 割以上を占めた。国際交流の経験は 18 名があるとし、国際交流委員の経験も 14 名があるとした。この交流集会に参加して国際交流委員をやってみたいかの問いに対して、大いに思う 8 名少し思う 9 名で意欲的な意見が聞かれた。また国際交流に関する FD を受けてみたいという回答も 18 件に上った。また、交流会の感想では、情報交換が有益だった、楽しかったという記載が多くあったのが特徴的であった。配布したコンテンツ報告書を活用したいという意見もあった。以下、自由記載の抜粋を示す。

国際交流を推進するために重要だと思うこと

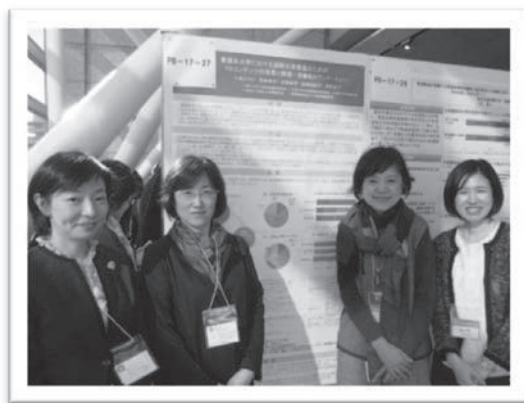
上司の理解。予算。英語力。同僚の理解。
 組織の中の方々に理解を得ること。相手国の組織と十分な情報交換を行うこと。学生の安全確保。支援システム（人的、事務など）。お金。教員のモチベーション。
 国際交流に対する関心を高める、維持する、継続する。学生や教員の蓄積を大切にする。
 準備、および実施後の成果の共有や振り返り（報告会を含め）。
 大学内での連携、学部内での協力や同意（教員間）が重要であることが改めてわかりました。
 カリキュラム上の位置づけも大事だと気づきました。
 他国の価値観を理解する。
 国際看護学の科目立て（必修化？）して、学生が国際看護について効果的に学べる環境、機運高める必要がある。
 人的資源…国際交流の意義等共通理解にむけた担当者（担当候補者）とのコミュニケーションか、と思いました。

国際交流の推進を妨げていると思うこと

英語力。理解が得られない。お金がない。
 推進役となる教員の不足。教員のモチベーションの低さ。
 費用。病院の協力。他教員の協力をどう得るか。宿泊所。
 教員が多忙。教員が過剰業務+国際交流している。
 教員の語学力、モチベーション。
 他の教職員（事務も含む）の意識の低さ。
 語る力。母国語を含むサポートの整備。
 教員によって意識、認識が様々…。学生の経済的負担。語学力（教員）。

国際交流委員をやってみたいと思いますか	8	9	2
国際交流に関するFDを受けてみたいと思いますか	15	6	0

■ 大いにそう思う ■ 少し思う ■ 思わない



3) 示説：看護系大学における国際交流推進のためのFDコンテンツの効果と課題

看護系大学における国際交流推進のための FDコンテンツの効果と課題－受講後のアンケートより－

小寺さやか¹ 野地有子² 近藤麻理³ 飯岡由紀子⁴ 溝部昌子⁵

1 神戸大学大学院保健学研究科 2 千葉大学大学院看護学研究科 3 東邦大学看護学部
4 東京女子医科大学看護学部 5 国際医療福祉大学福岡看護学部

目 的

高等教育分野において国際化やグローバル化が急速に進む中、看護系大学においてもグローバル教育の一環として、国際交流への取り組みが進んでいる。しかし、国際交流を担う教員の力量や経験には差がありFDが進んでいないのが現状である。本研究では、看護系大学において国際交流を推進するためのFDコンテンツの開発を試み、その効果と課題を検討することを目的とする。なお、本研究は千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターによる「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト」の一部として実施した。

方 法

【対象】2015年11月に国際交流を推進するためのFD『あなたが国際交流委員にあたってしまつたら！』を受講した看護系大学教員61名。FDの概要・国際交流委員の具体的な役割の提示と国際交流で活用できる情報の提供等を講義形式(15分)により行った。
【データ収集方法】講義終了後に無記名によるアンケート調査を実施。調査項目：国際交流委員の経験、国際交流委員に対する認識の変化と志向、コンテンツに対する要望等であった。
【分析方法】記述統計にて単純及クロス集計を行った。
【倫理的配慮】プロジェクトは千葉大学大学院看護学研究科倫理委員会の承認を得て行われており、本調査の実施に当たっては対象者に口頭により調査の趣旨と匿名性の保持、協力の任意性等について説明を行った上で実施した。

結 果

計39名の受講者から回答を得た(回収率63.9%)。回答者のうち、現在国際交流委員である者は3名(7.7%)、過去に委員の経験がある者は6名(15.4%)、委員の経験がない者は30名(76.9%)であった。

＜FDマザーマップの該当項目＞




図1 受講後の認識の変化




図2 国際交流委員への志向




図3 国際交流委員の経験と受講後の変化

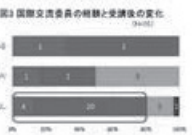
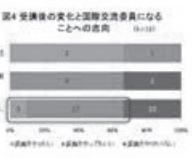


図4 受講後の変化と国際交流委員になることへの志向



FD『あなたが国際交流委員にあたってしまつたら！』のコンテンツ概要

目的：『看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイドVer.2』教育8(学生支援)3に掲載された「国際交流の推進」の教員能力向上を目指して、本FDでは国際交流委員の役割の理解と国際交流に対する不安の軽減を図ることを目的とした。

コンテンツ内容：

- 10年後を想像したグローバル人材育成と国際交流の推進
- 国際交流委員にあつてしまつたら！
英語は？ 引率が必要？
留学生の受け入れが大変そう？
- FDプログラムの概観
- 専任教員のための成果物(情報、様式等)の紹介
-文化の理解、異文化人々の生活の理解、タブー
-安全行動、危機情報
-あいづや英語の準備
-研究や交流のできる人と出会う
-大学からのメッセージアップ
-帰ってきたら
-教員の成長支援
- 国際交流委員会の仕事

考 察

- 受講後に約8割が国際交流委員に対する認識の変化があったと回答し、その多くが肯定的な変化であった。また、受講後に国際交流委員を志向する者も約7割を占めていたことから、本FDコンテンツは目的に沿った内容であったと考えられる。
- 国際交流委員の非経験者で受講後の認識の変化や委員への志向が高かったことから、特に非経験者の役割理解やイメージづくりにつながったと考えられる。
- 国際交流を推進するためには、その中核を担う国際交流委員の役割が重要である。短時間であっても委員に対する認識に変化が見られたことから、改めてFDの必要性が示された。一方で、語学に対する自信がないといった意見が多かったことから、今後、教員の語学に対する負担感をさらに軽減できるようなコンテンツを検討していく必要がある。

東京理科大学看護学会学術委員会

4. 次年度の計画

FDマザーマップを活用した「国際交流に関するFDニーズ」の高いことが示されたことより、看護系教員のニーズに基づいた、教員のポジティブな経験に着目したFDコンテンツの開発を進める予定である。ご協力ご参加いただきました皆様に御礼申し上げます。

➤ プロジェクト7

「合理的配慮を要する学生の臨地実習にむけたFDプログラム開発」

1. プロジェクト研究員

共同研究員 小川 純子 (淑徳大学 看護栄養学部・准教授)
飯岡 由紀子 (東京女子医科大学 看護学部・教授)
松岡 千代 (佛教大学 保健医療技術学部・教授)
遠藤 和子 (山形県立保健医療大学 保健医療学部・教授)
吉本 照子 (看護実践研究指導センター・教授)

2. 研究の概要

2016年4月、障害者差別解消法及び改正障害者雇用促進法の施行により、障がいをもつ学生各々の状況に応じて、学修機会を保障するために、看護系大学においても教育上の合理的配慮がもとめられている。特に、看護教育に特徴的な臨地実習では、実習施設の患者・家族、実践者および学生全員の安全・安心を確保し、実習施設の看護の質、および他の学生の教育の質保証等も考慮して合理的配慮を行い、学生全員の実践力の到達目標を達成する必要がある。

臨地実習担当教員がこうした調整役割を遂行し、より効果的に教育機能を発揮するには、臨地実習における合理的配慮の考え方、あるいは教育方法に関する知見が必要であるが、報告はまだ少ない。今後、教員個人、および実践者も含めた教育組織の教育能力の開発(FD)を行い、新たな教育方法の開発や専門的な支援体制を構築する必要がある。

こうした看護系大学に共通し、個別の大学では対応が困難な課題として、平成27年度から、4大学の教員とセンター教員が協力し、FDマザーマップ対応型教材開発の一環として取り組み、FDプログラムを作成し¹⁾、2大学における試行と評価により精錬してきた。

3. 研究状況

本年度は、臨地実習における合理的配慮の課題に、看護系大学が協力して取り組めるように、日本看護学教育学会第26回学術集会にて交流セッションを実施し²⁾、FDプログラムの開発過程をもとに「合理的配慮」に関する考え方の提案を行い、FDマザーマップレベルⅠのFDプログラムおよび試行と評価を紹介した。ついで、参加者とFDの取り組みについて意見交換し、学び合う機会とした(参加者53人)。また看護系大学の多様な教育状況における活用に向けて、臨地実習における合理的配慮の状況に関する質的調査を実施した。さらに、FDマザーマップレベルⅡのFDプログラムを1大学にて試行し、評価を行った。

- 1) FD成果報告会, News Letter, 看護学教育研究共同利用拠点千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター, 5,p3,2015
- 2) 日本看護学教育学会 第26回学術集会 交流セッション, 合理的配慮を要する学生の臨地実習の質保証に向けたFDプログラム開発, 日本看護学教育学会 第26回学術集会プログラム・講演集, 127,2016

5. 研修事業

1) 国公立大学病院副看護部長研修

国公立大学病院副看護部長研修は、平成 18 年度から現在に至るまで、当センターの独自事業として実施している。研修開催に至った経緯は、国立大学病院看護部長会議からの強い求めに応じたことに端を発する。大学病院の看護部長をサポートする副看護部長に対し、上級看護管理者としてマネジメント能力向上を図るための研修の必要性が求められた。「国公立大学病院副看護部長の看護管理研修に関わる実践的教育プログラム開発」に関する調査研究の成果を踏まえ、具体的な大学病院の副看護部長研修の実践的教育プログラムが開発され、毎年開講されている。

1. 研修目的および目標

研修の目的は、我国の医療の現状を踏まえて、大学病院の上級管理者として自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にし、その実現に向けた計画を立案・実施・評価することを通して、上級看護管理者として必要な実践能力を高め、大学病院の看護の充実を図ることである。

研修の目標は、次の 10 項目である。

- (1) 日本の医療を取り巻く現状を理解する。
- (2) 大学病院における組織のあり方を理解する。
- (3) 人間および人間関係を構造的に把握するための知識を得る。
- (4) 自施設の組織変革に向けた課題を構造的に把握するための方法を知る。
- (5) 自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にする。
- (6) 効果的な企画立案技術を身につける。
- (7) 効果的なプレゼンテーション技術を身につける。
- (8) 自施設の組織変革に向けた課題を抽出し、関連情報の分析を通して実践計画を立案できる。
- (9) 他の医療施設における組織運営の実際を知り、自施設の組織変革に役立てることができる。
- (10) 関連部門の理解と協力を得ながら立案した実践計画を展開し、その成果について事実に基づき評価することができる。

2. 研修の形態および内容

研修の対象者は、国公立大学病院副看護部長とし、これまでは副看護部長に就任後経験 2 年以内の者を優先して実施してきた。定員は 20 名である。

研修の特徴は、実践力を高めるために、研修期間を以下の 3 期に分けた分散研修方式をとったことにある。集合研修は下記の日程で実施され、9 ヶ月間にわたる。個別プロジェクトのコンサルテーションを含み、受講料は 9 万円である。

研修 1：平成 28 年 6 月 21 日（火）～6 月 24 日（金） 4 日間

研修 2：平成 28 年 9 月 27 日（火）～9 月 30 日（金） 4 日間

研修 3：平成 29 年 3 月 2 日（木）～3 月 3 日（金） 2 日間

各研修の間の期間には、自施設においてより具体的な計画の立案や、その実施および評価を行い、その間にも、センター教員から継続した指導を得ながら、また他の研修生の大学病院を相互に訪問する他施設訪問により、比較検討しながら、実践力を高められるようシステム化されている。

研修の内容は、研修 1 では、医療政策、医療経済学、組織論・組織分析、教授システム学、医療倫理、

病院経営、ストレスマネジメント、コミュニケーション・人間関係論演習、情報収集と分析に関する理論（方法論Ⅰ）などから構成され、講師は各分野の第一人者および本研究科の教員が担当した。

研修2では、情報収集と分析に関する理論（方法論Ⅱ）、課題抽出・分析演習、企画立案演習等、個人ワークおよびグループワークを組み合わせ、センター教員の指導のもと各自が実践計画の立案を行った。

研修3では、実践報告会を行なった。2日間にわたり、全員が自施設で実施した実践計画に基づく実施結果および評価について学会形式で発表を行い、研修生、教員等との質疑応答により内容を深めた。この発表会での質疑応答を踏まえて、報告書を作成し提出となる。報告書は、研修生の同意を得て「教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援データベース」へ登録される。

(<http://www.np-portal.com/report/years/>)

研修1



開講式



講義：医療経済/西村周三先生



講義：組織論・組織分析 / 花田光世先生

研修2



演習：課題抽出・分析演習

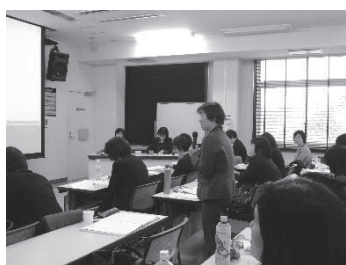


演習：課題抽出・分析演習



演習：企画立案演習

研修3



成果発表の様子



成果発表の様子



修了式 下左近寿美専門官

3. 研修の評価

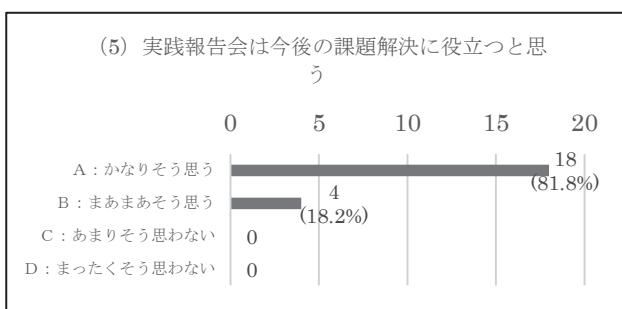
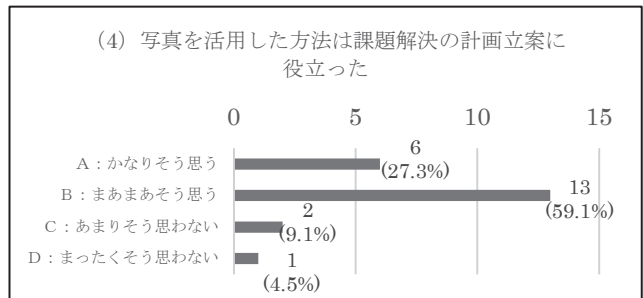
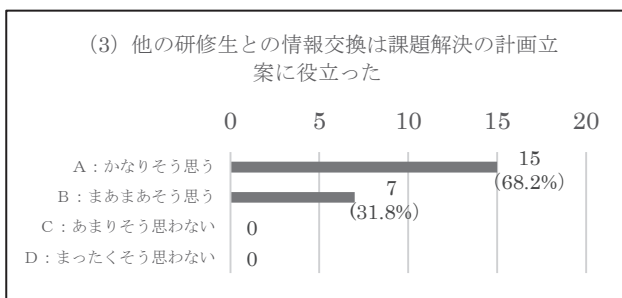
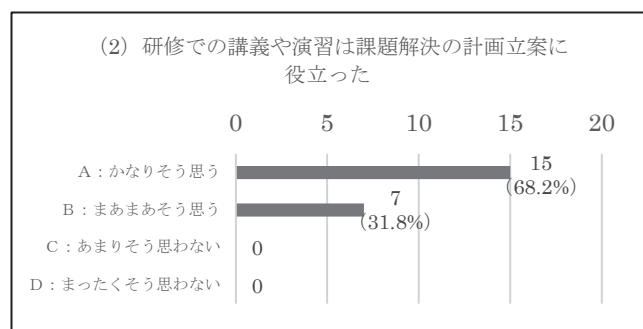
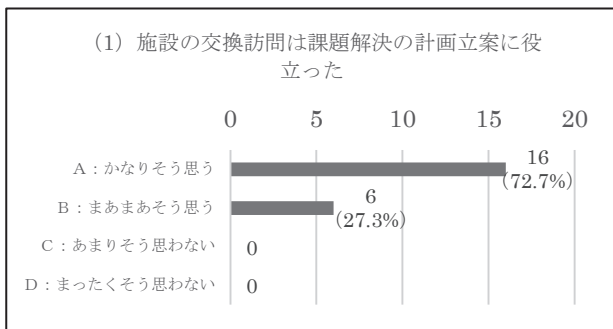
研修の全体評価を、研修3の終了後にアンケートにて実施した。アンケートは、倫理的配慮のうえ、無記名とし回答は自由意思によるものとした。

1) 参加者の背景

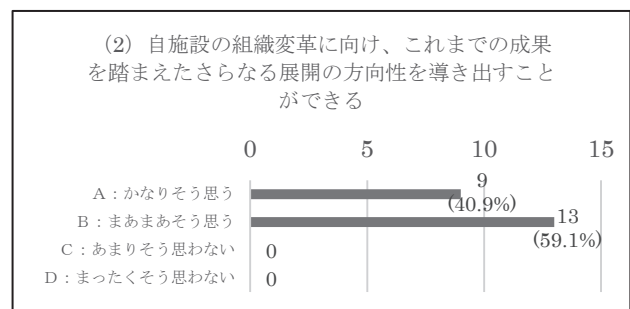
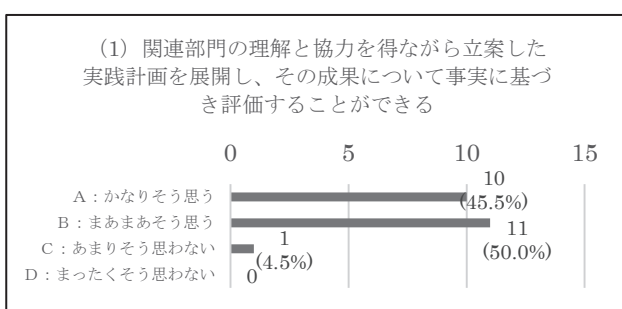
研修受講者は23名のうち、回答のあった受講者は22名であった。所属施設の設置主体は、国立11名、公立3名、私立8名であった。副看護部長経験年数は、平均19.8ヶ月であった。年齢は、40歳代2名、50歳代20名であった。受講動機は、自ら希望が1名、上司にすすめられてが19名、その他1名、複数回答1名であった。

2) 研修内容について

研修内容について5項目で「かなりそう思う」～「全くそう思わない」の4段階により自己評価を行った。



3) 研修目標の達成について



研修内容の評価では、役に立った項目は、「情報交換」「実践報告会」「他施設訪問」「講義演習」等であった。目標達成状況は、「かなりそう思う」と「まあまあそう思う」を合わせると、9割以上を示していた。全国から集まった研修生との情報交換や他施設訪問、および実践報告会の内容については高い評価が示された。

4) 自由回答欄から

1. 計画の立案や実施で受けた支援では、

- 組織のどこにどのように働きかけることが必要なのか看護部長をはじめ他部門の方々にアドバイスしていただき、理解実践できた。
- 教員のアドバイス（意見）はとても後押ししてもらえた。また、ぼんやりした思考を明確にしてもらえるものだった。継続して支援してほしいと思うくらいである。
- 自施設内において同じように以前この研修を受けた副部長が声をかけてくれたり、協力してくれた。院内スタッフも協力してくれた。ただ全病院的に知っているわけではないので、自分で伝えていった場面もあった。

2. 研修2～研修3を通して学んだことでは、

- 研修2終了から研修3の間に行う実践については長いようで短期間であり十分な結果が得られなかったが変革への手応えはあり、充実した時間であった。
- 実践計画立案から実践していくプロセスで副看護部長として看護部以外に協力を求めることが多く、交渉はもちろんプレゼンテーション能力も必要であると感じた。
取り組みにおいてはPDCAサイクルを回し続けるためにモニタリングすることは重要であった。改めて自分の取り組みを報告会で振り返ることができ、次の課題につなげられた。
- 大学病院としての使命を果たすために、院内だけではなく、他施設や地域に向けた戦略が必要だということを実感した。院内においても他部署とのコミュニケーションが重要であり、日頃からのコミュニケーションがよい関係となり、協働できると感じた。他施設訪問も参考にできることが多く、つながりもできたので有意義だったと思う。
- 研修2で自課題を明確にして立案した計画を進めることで自然に研修3にたどりついた印象である。研修2での教員とのディスカッションは大きなステップになった。
- 演習や講義を受け明確化されていない課題に気づかされ言語化すること出来たのは研修2の担当教官の助言やグループメンバーとの意見交換でした。組織の方向性が見えて進むべき道が示されました。教官の言葉が自分自身の中で言語化しきれないばく然とした内容を代弁して頂けることで課題へのとりくみがおもしろくなりました。

3. 副看護部長研修全体については、

- 分散型の研修がある意味リフレッシュできた研修となり良かった。課題はH28年度の自分の目標でもあり研修しながらアドバイスをいただけたたりスキルを身につけることができ助けていただきました。
- 「大学病院」という施設の特徴をそろえての副部長研修でしたので抱えている職場背景がほぼ共通であり、課題や困っていることもとても理解しやすく、相談もしやすかったです。解決策を盛っている方から助言をもらうこともできとても助かりました。
- 報告会というI、IIの成果をつくりあげる産みの苦しみのみならず、考える視点の変化を自分自身感じる事が出来、成長する機会となった。学び多き時間、人財を得、感謝しております。

以上まとめると、国公立大学病院副看護部長研修では、医療看護政策に関する講義を省庁担当者より直接受講できること、看護管理やマネジメントに関する第一人者の講義を受講できること、演習を通して自施設の課題に焦点化した実践計画書を作成し、計画書に基づいて主体的にプロジェクトを実施し、他施設訪問を参考に、研修3の実践報告会で成果発表と情報交換を行うなどの分散型研修プログラムを通して、全国の大学病院の副看護部長を対象とした全国研修のメリットとニーズが高いといえる。

研修中の研修目標達成の自己評価からみた受講副看護部長の課題は、「効果的な企画立案技術を身につける」、「課題抽出と実践計画の立案」、「立案した実践計画の展開および得られた成果について、わかりやすく報告することができる」等であった。組織変革のビジョンを明確にする本研修の特徴をさらに引き出すよう、研修の改善をすすめる。

平成28年度国公立大学病院副看護部長研修時間割

【研修Ⅰ】

	I		II	III	IV	V	
	8:50~10:20		10:30~12:00	12:50~14:20	14:30~16:00	16:10~17:40	
6月21日(火)		10:00~ ※開講式 オリエンテーション		医療政策の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 大学病院支援室専門官 下左近寿美	医療経済 医療経済研究機構 所長 西村周三		懇親会
6月22日(水)	組織論・組織分析 慶應義塾大学名誉教授 SFCフォーラム代表理事 花田光世			医療倫理 千葉大学大学院看護学研 究科 教授 手島恵	看護管理論(1) 神戸大学医学部附属病 院副病院長・看護部長 松浦正子	組織論・組織分析 ／公的病院におけるエ ド・オブ・ライフ 千葉大学大学院看護学研 究院看護実践研究指導センター 教授 野地有子	
6月23日(木)	成人教育と教授システム学 日本BLS協会 代表 青木太郎			病院経営(財務管理) 兵庫県立大学大学院経営研究科 教授 小山秀夫		看護管理論(2) NTT東日本関東病院副 看護部長 木下佳子	
6月24日(金)	コミュニケーション・人間 関係論演習 茨城キリスト教大学 黒澤泰	情報収集・分析に関する理論 (方法論Ⅰ) 情報工房 代表 山浦晴男		医療安全 日本医療機能評価機 構理事 橋本迪生	研修Ⅱに向けた オ リエントリーシ ョン (~17:00予定)		

【研修Ⅱ】

	I		II	III	IV	V	
	8:50~10:20		10:30~12:00	12:50~14:20	14:30~16:00	16:10~17:40	
9月27日(火)		10:20集合 研修Ⅱ オリエンテ ーション	情報収集・分析に関する理論(方法論Ⅱ) 情報工房 代表 山浦晴男		課題抽出・分析演習 情報工房 代表 山浦晴男		
9月28日(水)	課題抽出・分析演習 情報工房 代表 山浦晴男			プレゼンテーション演習 千葉大学大学院看護学研究科附属 看護実践研究指導センター教授 野地有子			
9月29日(木)	組織変革のための 企画立案 千葉大学医学部附属病院 副病院長・看護部長 吉川淳子	プレゼンテーション演習 千葉大学大学院看護学研究科附属 看護実践研究指導センター教授 野地有子		企画立案演習 千葉大学大学院看護学研究科 教員(吉本教授、野地教授、和住教授 、黒田准教授、銭准教授)		医学部附属病院見学 研修 (希望者)	
9月30日(金)	企画立案演習 千葉大学大学院看護 学研究科教員 (吉本教授、野地教授、和住教授、黒田准教授、銭准教授)			組織変革のための 評価 (看護評価学) 藍野大学副学長 菅田勝也	研修Ⅲに向けた オリエンテーシ ョン		

【研修Ⅲ】 平成28年3月1日(火)、2日(水) 実践報告会

2) 看護管理者研修

(1) 研修目的

本研修は、大学病院および大学病院と連携する地域の医療機関、施設に勤務する看護師長相当の看護管理者が、大学病院の特殊性を踏まえつつ看護管理上必要な基礎的知識を修得することを通して、大学病院の看護の充実を図ることを目的とする。

文部科学省委託事業、特別経費による実施を経て、平成 25 年度から独自事業として以下の 2 コース編成で実施している。

① ベーシックコース

看護管理上必要な基本的知識・スキルを学ぶコース

3 日間の講義・演習

② アドバンスコース

看護管理者の組織変革に関する課題解決型プロジェクト研究支援を受けるコース

1 年間で複数回のミーティングと個別面接

(2) ベーシックコース

(1) 期 間：平成 28 年 8 月 29 日（水）～8 月 31 日（金） 3 日間

(2) 内 容：時間割を表 1 に示す。

(3) 受講者：103 名

表 1 平成 28 年 看護管理者研修（ベーシックコース）時間割

	I	II	III	IV	
	9:00～10:30	10:40～12:	13:30～15:	15:10～16:	
8 月 29 日（月）	9:30～ 看護管理者研修 開講式 オリエンテーション	急性期病院をめぐる 医療政策の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 大学病院支援室専門官 下左近寿美	医療経営管理 奈良県立医科大学 教授 今村知明	急性期病院 と地域連携 在宅ケア移行支援研究 所 宇都宮宏子オフィス 宇都宮宏子	
8 月 30 日（火）	看護管理におけ る文献の活用 東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科 准教授 深堀浩樹	看護管理実践のリフレクション (演習) 千葉大学大学院 看護学研究科 准教授 黒田久美子		看護管理におけるデータ活用の方法 (17:30終了予定) 千葉大学医学部附属病院病院長企画室 特命病院教授小林美亜	
8 月 31 日（水）	人材育成と キャリア開発 千葉大学大学院 看護学研究科 教授 和住淑子	特別講義 今、日本の看護 職に求められる こと 日本看護協会会長 坂本すが	看護行政の動向 厚生労働省 医政局看護課 課長補佐 猿渡央子	15:15～ 看護管理者研修 閉講式 (15:45終了予定)	

(4) 実施・評価

○定員を上回る応募状況

定員は 80 名であるが、ベーシックコースが座学中心の 3 日間の集中講義になったため、講義室に入る程度までは受講を受け入れることが可能となり、103 名を受け入れた。

○対象者の拡大について

地域包括ケアの推進にともない、大学病院と他の医療機関・施設の連携の必要性が高まってきているため、昨年度より、本研修の受講者を大学病院と連携する地域の医療機関、施設の看護管理者に拡大した。今年度は、大学病院以外の関連施設からの参加者はなかった。

○受講者の組織の多様性

受講者は、大学病院の本院だけでなく、病床数や役割が異なる複数の分院やセンターからも受講されており、年々その割合が高くなっている印象がある。また、大学病院の本院であっても、地域包括ケアの推進の観点では、その地域の個々の事情を反映した課題があることが演習を通して垣間見えた。画一的でない、個々の組織の事情に基づく課題解決への支援がより必要になっていると考えられる。

現在、看護管理実践のリフレクション演習は、2 時限を使って、リフレクションシートとそれを使ったリフレクションの方法を解説した後、4 人程度の受講生が意見交換するかたちですすめているが、短時間で受講生同士での演習のため、ヒントを得られた受講生もいれば体験する程度にとどまっている受講生もいる。今後は、アドバンスコースへの連動も含め、リフレクション演習の進め方について、更なる検討が必要である。



写真 看護管理実践のリフレクション演習中

○終了時アンケートからの評価 一部抜粋（図1）

- ・ 99名からアンケートを回収した。
- ・ 受講者の年齢構成は、30代5名、40代53名、50代41名であった。
- ・ 全ての項目で、「かなりそうである」、「まあまあそうである」の合計が、8割以上であり、特に「特別講義」、「人材育成とキャリア開発」、「リフレクション演習」の評価が高かつ

た。「看護管理におけるデータ活用の方法」についてはもっと時間をとってほしいという意見もあった。

・視野のひろがり・実践へのヒント

「・自部署だけでなく、組織・社会と広い視野が必要と強く感じました。そして、まず“対象者”ということをしっかり意識していきたいと思います。」等、視野が広がり、実践へのヒントを得て、意欲を向上させていた意見が多かった。

・交流を促進する工夫への期待

「他施設の意見がきけてよかった。新たな仲間が出来てよかった。」という感想がある一方で、全員の自己紹介を希望する意見や、席の工夫を求める意見があった。これは、なるべく多くの受講生と交流したい希望であった。

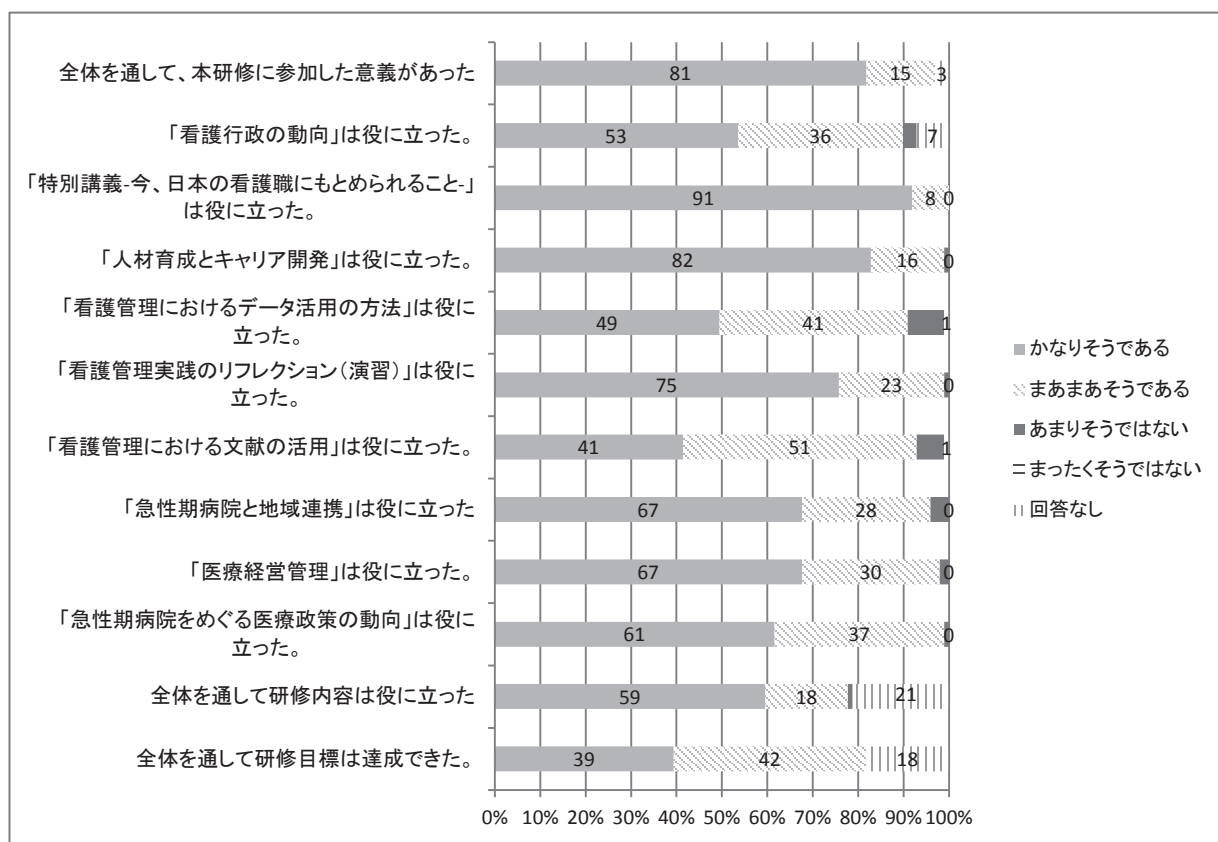


図1 終了時の評価結果

○今後の課題

3日間という短期間で、受講者が多い中、交流を促進し、受講生の組織の多様性をふまえた演習の進め方にさらに工夫が必要である。「看護管理におけるデータ活用の方法」では、受講者のニーズの多様性を踏まえ、より焦点を絞った効果的な展開の工夫が必要である。

(3) アドバンスコース

(1) 期間：平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月末日（原則的に 2 年ずつ実施）

(2) メンバー

光野 清美（社会法人社団木下会鎌ヶ谷総合病院看護部長）
荒井 賞枝（東京慈恵会医科大学附属柏病院がん相談支援センター主任）
大野 朋加（千葉大学医学部附属病院看護師長）
和住 淑子（千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター）
黒田 久美子（千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター）
錢 淑君（千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター）

(3) 課題解決型プロジェクト研究の概要と実施状況

個々の課題解決型プロジェクト研究の概要と進捗状況は以下の通りである。

受講者	プロジェクト研究概要	進捗状況
光野氏	新人看護職員研修プログラムの標準化と新人看護師を教育する中堅看護師の疲弊の緩和	課題の焦点化を行うために、一緒に組織分析を多角的に行った。結果、焦点が定まり、プロジェクト計画を展開した。
荒井氏	がん看護リンクナース活動の活性化	気になっている事例を分析することで、プロジェクトの目標像が明確になった。プロジェクト計画を立案中である。
大野氏	副看護師長、看護師長用マネジメントラダーの改訂	現在のラダーやその運用の課題を明確化した。その結果、ラダー改訂ではないところに本質的な課題があることが明らかになり、次年度に向けてプロジェクト実施計画を修正した。

(4) 成果

アドバンスコースは、プロジェクト支援・成果発信支援を強化するために開発した。3名の支援経過より、課題を明確化する段階に多くの支援が必要であることが明らかになった。より効果的に成果を上げるため、現体制でのアドバンスコースは今年度で終了し、次年度以降は新たな支援体制を構築する計画である。

3)看護学教育指導者研修

(1)研修目的

本研修は、臨地実習施設等において看護学生の看護実践を直接指導する看護学教育指導者である看護職が必要な能力を高め、臨地と基礎教育機関の連携・協働の充実に資することを目的とする。

文部科学省委託事業、特別経費による実施を経て、平成 25 年度から独自事業として以下の 2 コース編成で実施している。

①ベーシックコース

臨地実習を改善するための基本的知識・スキルを学ぶコース

3 日間の講義・演習

②アドバンスコース

臨地実習における課題解決支援・プロジェクト成果発表支援を受けるコース

1 年間で複数回のミーティングと個別面接

(2)ベーシックコース

(1) 期 間：平成 28 年 8 月 24 日（水）～8 月 26 日（金） 3 日間

(2) 内 容：時間割を表 1 に示す。

(3) 受講者：52 名

表 1 平成 28 年 看護教育指導者研修（ベーシックコース）時間割

	I	II	III	IV	
	9：00～10：30	10：40～12：10	13：30～15：00	15：10～16：40	
8 月 24 日（水）	9：30～ 看護学教育指導者 研修 開講式 オリエンテーション	看護高等教育行政 の 動 向 文部科学省 高等教育局医学教育課 看護教育専門官 斉藤しのぶ	看護学教育の 基礎 千葉大学大学院 看護学研究科 教授 和住淑子	看護における 成人教育のあり方 埼玉県立大学 保健医療福祉学部看護学科 教授 鈴木康美	
8 月 25 日（木）	臨地実習指導 の基礎 千葉大学大学院 看護学研究科 准教授 黒田久美子	自組織の現状を踏まえた指導過程のリフレクション (17：00終了予定) 千葉大学大学院看護学研究科 (実行委員・センター教員・臨地実習指導を担当する助教等) 千葉県保健医療大学（河部教授）			
8 月 26 日（金）	臨地実習場面の教材化 (16：45終了予定) 千葉大学大学院看護学研究科 (実行委員・センター教員・臨地実習指導を担当する助教等) 千葉県立保健医療大学（河部教授）			17：00～ 看護学教育指導者 研修 閉講式 (17：30終了予定)	

(4) 実施・評価

○定員を上回る応募状況

定員 40 名であったが応募多数のため、演習のグループ運営を工夫し、52 名の受講受け入れることになった。

○医療機関以外からの参加者へのプログラム適用

今年度も、昨年度に引き続き、訪問看護ステーションからの参加者があった。医療機関の看護職とは異なる視点や学生指導の経験がグループワークを活発にしていた。地域包括ケアの推進に伴って、医療機関以外での臨地実習の増加が予測される。多様な臨地実習施設の指導者も同じプログラムで研修が可能であるとの示唆を得た。

○看護系大学教員の参加

例年、本研修に看護系大学教員からの参加希望があり、本年度は、試みに5名の看護系大学教員を受講者として受け入れ、演習時は、ファシリテーター補助として運営にも参画してもらった。この経験をもとに、次年度は、看護系大学教員向けの新規研修を企画する計画である。



写真 臨地実習場面の教材化演習中

○終了時アンケートからの評価 一部抜粋（図1）

- ・51名からアンケートを回収した。
- ・全ての項目で、「かなりそうである」、「まあまあそうである」の合計が8割以上の高評価であった。
- ・モチベーション向上、全国の看護学教育指導者との交流が高評価
「リフレクション、教材化について全国の病院の事例をきくことができた。日常の看護の場面からたくさんの教材化ができること、指導者としての客観的事実をうけとめて、学生に合わせた看護に発展させること。導き方の難しさと、みなさんのファシリテーターとしての能力、意見をまとめて発表する能力に刺激をうけた。」等
- ・実践の基盤となる根拠知識を得たことによる自信や自己効力感向上
「行政の動向では現在の看護教育の流れや方向性、行政の考える臨地実習のかたちを知

り現場に求められていることが理解できた。ばく大なデータも感動しました。」等

・自身の課題の明確化

「指導過程のリフレクションやグループでロールプレーを行うことで指導者としての関わりを改めて振り返り、今後どうしていかないといけないか自分なりの課題が見つかった。」

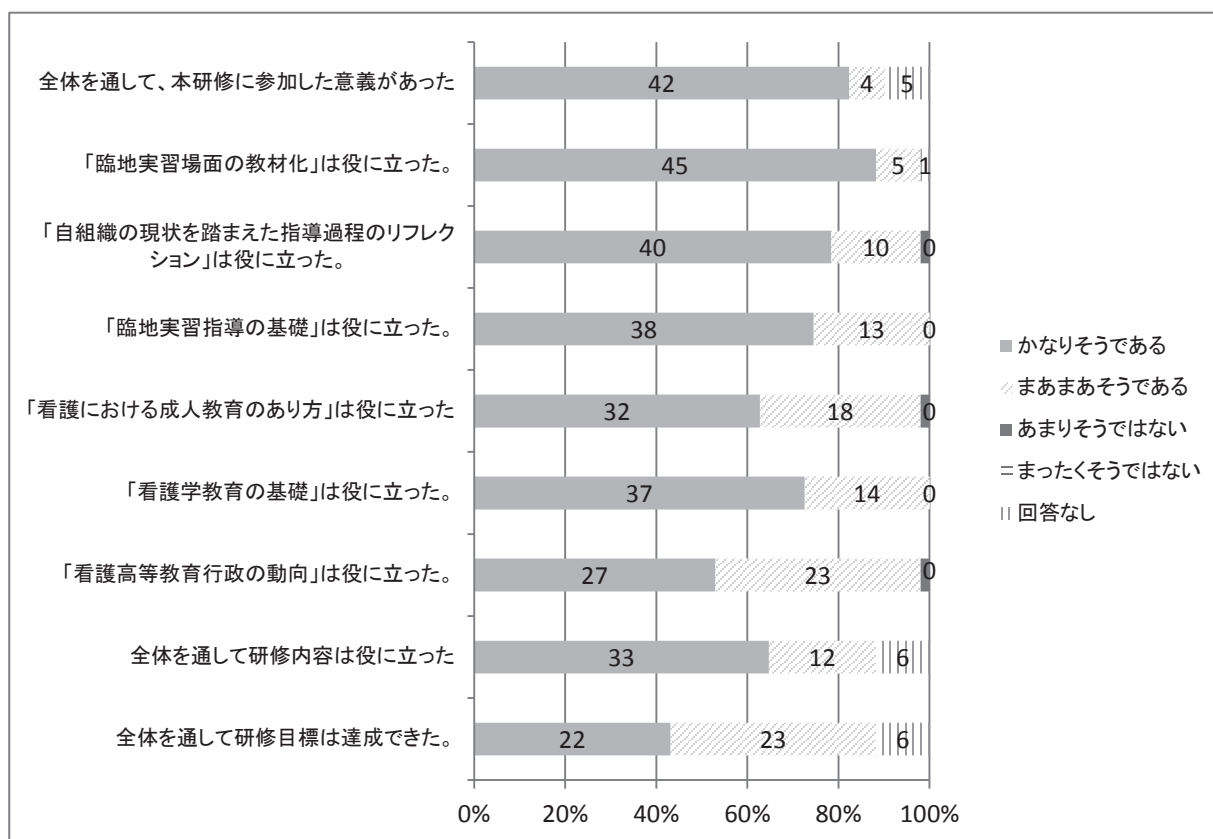


図1 終了時の評価結果

○今後の課題

3日間のベーシックコースは、短期間でも効果的な学習と受講生同士の交流を図ることができる、と確信を深めることができた。一方、各自の課題の明確化まで至らない場合もあることが確認された。個々が満足のいく学びを得るために、短期間の研修の中で個々に応じる時間をどのように設けるかが、今後の課題である。

(3)アドバンスコース

(1) 期間：平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月末日

(2) 研究メンバー

小林 紀明（目白大学）

奥角 真紀（国立病院機構東埼玉病院）

和住 淑子（千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター）

黒田 久美子（千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター）

(3) 研究概要

教員と指導者が使用する指導案の内容に必要な要素を明らかにする研究を継続中である。

本年度は、その結果をふまえて以下を行った。

① 論文作成（原著 1 本、改訂版指導案作成の実践報告 1 本）

② 改訂版指導案の活用と評価研究

(4) 成果

アドバンスコースは、プロジェクト支援・成果発信支援を強化するために開発した。強化のねらいのとおり、臨地の看護学指導者が論文作成をする際の難しさ、特に現象を適切に説明できる言葉の選択、結果をいかした次の研究計画立案を共同研究者と共にすすめていくことができた。平成 29 年度に論文投稿予定である。

ベーシックコースに看護教員の参加希望があること、自組織の組織変革に取り組みたい看護系大学教員からのコンサルテーションニーズがあることを踏まえ、次年度からは、本アドバンスコースを発展的に解消し、新たな看護系大学教員向け研修を企画することとした。

4) 看護学教育ワークショップ

平成 28 年度の看護学教育ワークショップは、看護学教育研究共同利用拠点の中心的な事業として、これまでの 2 泊 3 日から、より参加しやすい 1 泊 2 日に短縮し、「卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすか～大学改革時代における看護学教育の継続的質改善への挑戦～」をテーマに、文部科学省と日本看護系大学協議会（JANPU）の後援を得て開催された。

開催概要は以下の通りである。

1. 期間：平成 28 年 10 月 27 日（木）～10 月 28 日（金）
2. 会場：千葉大学 けやき会館
3. 主催：看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
後援：文部科学省
一般社団法人 日本看護系大学協議会
4. テーマ：卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすか
～大学改革時代における看護学教育の継続的質改善への挑戦～

5. 主なプログラム

目的

大学改革時代における看護学教育の継続的質改善（CQI）への挑戦を検討する第一歩として、卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすかをテーマに情報・意見交換を行い、参加者が、自大学のアクションプランを創り、実現を推進するアイデアを得る。

目標

（1）ワーク“知る”

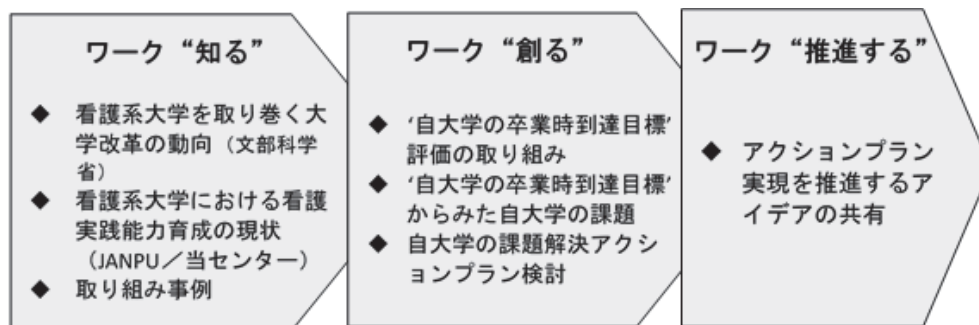
参加者が、全国的な視野で看護系大学の変革の方向性と看護実践能力育成の現状、卒業時到達目標の評価を用いた継続的質改善の取り組み事例を知り、自大学のアクションプランのヒントとなる情報を得る。

（2）ワーク“創る”

参加者が、テーマ別グループ討議を通して、‘自大学の卒業時到達目標’の視点から、自大学の課題を検討し、課題解決のためのアクションプランを創る。

（3）ワーク“推進する”

参加者が、相互のアクションプランを参考に、アクションプラン実現に必要な学内外の調整、リソースについて意見交換し、推進するためのアイデアを得る。



ワーク“創る” グループ編成テーマ

‘自大学の卒業時到達目標’から、以下の A-D いずれかの課題を検討する。

- A. 組織運営、B. 臨地実習、C. 学生支援、D. 地域連携

6. 参加要件

ワーク“知る”の部 参加要件なし

全日程参加者 看護系大学において、看護学教育に責任をもつ立場にある教員あるいはFDの担当者
(原則として、准教授以上)とする。以下の①～③を参加要件とする。

- ① ワークショップの全日程に参加できる
- ② ‘自大学の卒業時到達目標’評価の取り組みについて報告できる
- ③ ワークショップ中に、‘自大学の卒業時到達目標’からみた課題解決アクションプラン(案)を討議できる

7. 参加者

全参加者(ワーク知るの部のみ参加者含む) 115 大学 3 機関 164 名

全日程参加者 70 大学 70 名

8. 実施体制

講演者・報告者(発表順)

斉藤 しのぶ 文部科学省高等教育局医学教育課看護教育専門官

上泉 和子 一般社団法人 看護系大学協議会代表理事
公立大学法人 青森県立保健大学 理事長/学長

黒田 久美子 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター准教授

両羽 美穂子 岐阜県立看護大学 教授

ファシリテータ(グループ番号順)

雄西 智恵美 徳島大学大学院 教授

吉本 照子 千葉大学大学院看護学研究科 教授

谷本 真理子 東京保健医療大学 教授

和住 淑子 千葉大学大学院看護学研究科 教授

中島 洋子 久留米大学 教授

石井 邦子 千葉県保健医療大学 教授

黒田 久美子 千葉大学大学院看護学研究科 准教授

銭 淑君 千葉大学大学院看護学研究科 准教授

吉田 澄恵 千葉大学大学院看護学研究科 特任准教授

野地 有子 千葉大学大学院看護学研究科 教授

千葉大学運営組織

大学院看護学研究科長 宮崎 美砂子 教授

センター教員会議および実行委員会 (◎ センター長・企画責任者 ○ 実行委員長)

◎吉本 照子 教授 ○野地 有子 教授 手島 恵 教授 和住 淑子 教授

黒田 久美子 准教授 銭 淑君 准教授 佐藤 奈保 准教授

杉田 由加里 准教授 黒河内 仙奈 助教

阿部 恭子 特任准教授 吉田 澄恵 特任准教授 井関 千裕 特任助教

9. 実施概要

<ワーク“知る”>

1日目の午前に、まず、文部科学省高等教育局看護教育専門官 齊藤しのぶ氏より、「看護系大学を取り巻く大学改革の動向」と題した講演があった。続いて、全国の看護系大学における看護実践能力の現状調査報告として、JAPNU 代表理事 上泉和子氏より「看護系大学学士課程における臨地実習の現状並びに課題に関する調査研究」の報告、当センター准教授 黒田久美子氏より、「看護系大学における卒業時到達目標評価に関する全国調査」の報告があった。さらに、岐阜県立看護大学 教授 両羽美穂子氏より、「‘自大学における卒業時到達目標’評価の取り組み事例」の報告があった。

<ワーク“創る”>

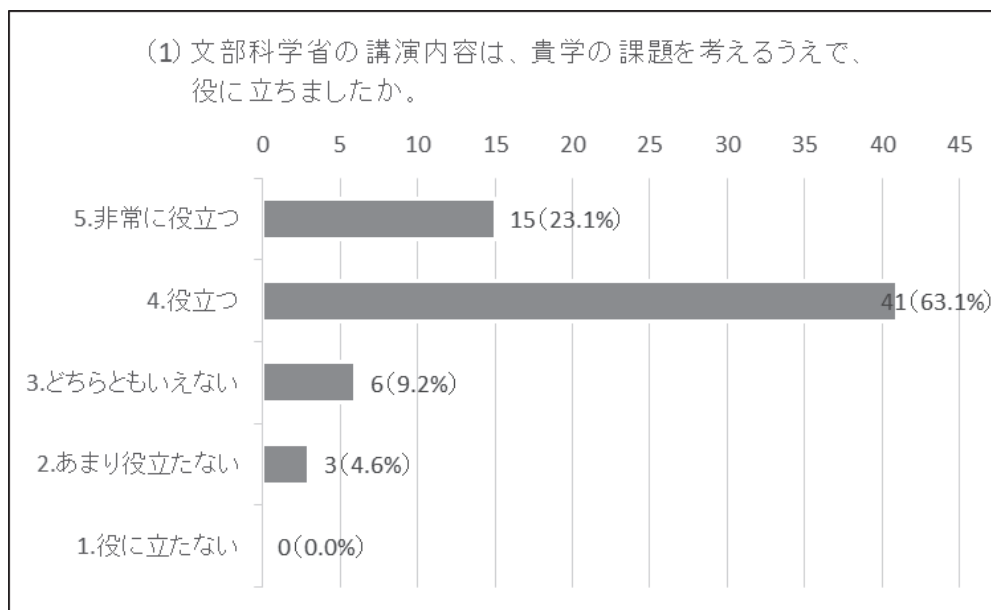
これらを受け、1日目の午後から2日目の午前中にかけて、70名が、10グループに分かれ、‘自大学の卒業時到達目標’評価の取り組みについて紹介しあい、ファシリテータとともに、ワークシートを活用しながら、課題を検討し、アクションプランを検討した。グループのテーマは、A. 組織運営が3グループ、B. 臨地実習が4グループ、C. 学生支援が2グループ、D. 地域連携が1グループであった。

<ワーク“推進する”>

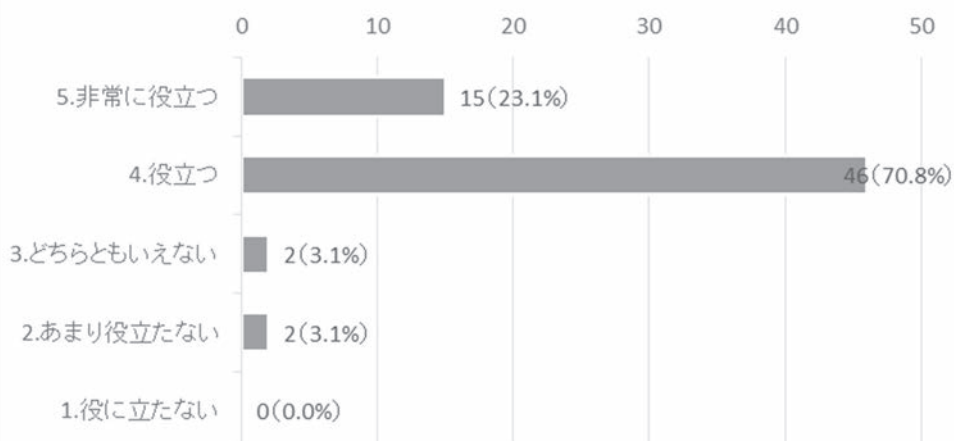
2日目の午後は、ワーク“創る”の成果を全体発表し、アクションプラン実現を推進するアイデアを共有した。

全体を通して、大学改革時代にあって、自大学の教育の質改善のアクションの一步を踏み出すのは、参加した教員一人ひとりであるという役割認識や、そのための看護系大学のネットワークが交流の中で生み出されていった。

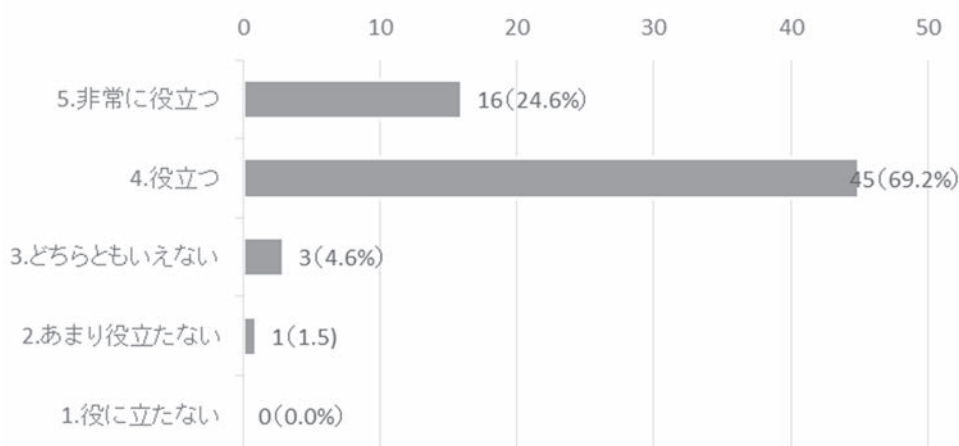
10. ワークショップ終了後の評価（全日程参加者分）



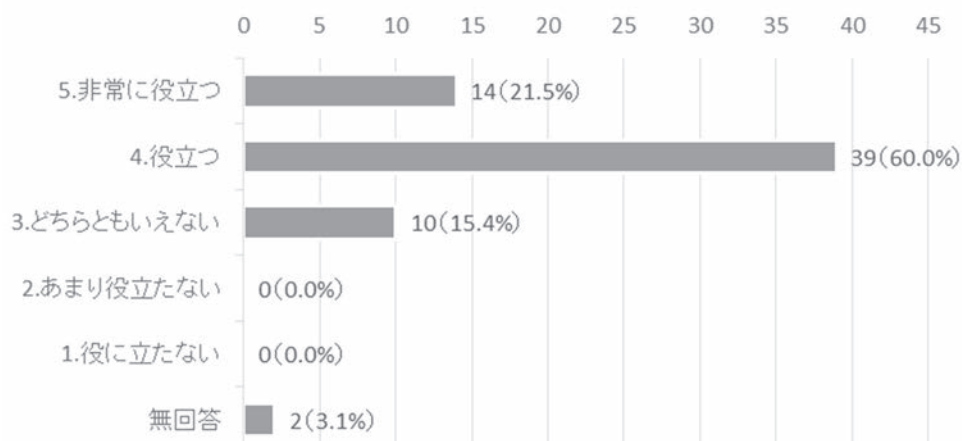
(2) JANPU(日本看護系大学協議会)の調査報告は、貴学の課題を
考えるうえで役立ちましたか。

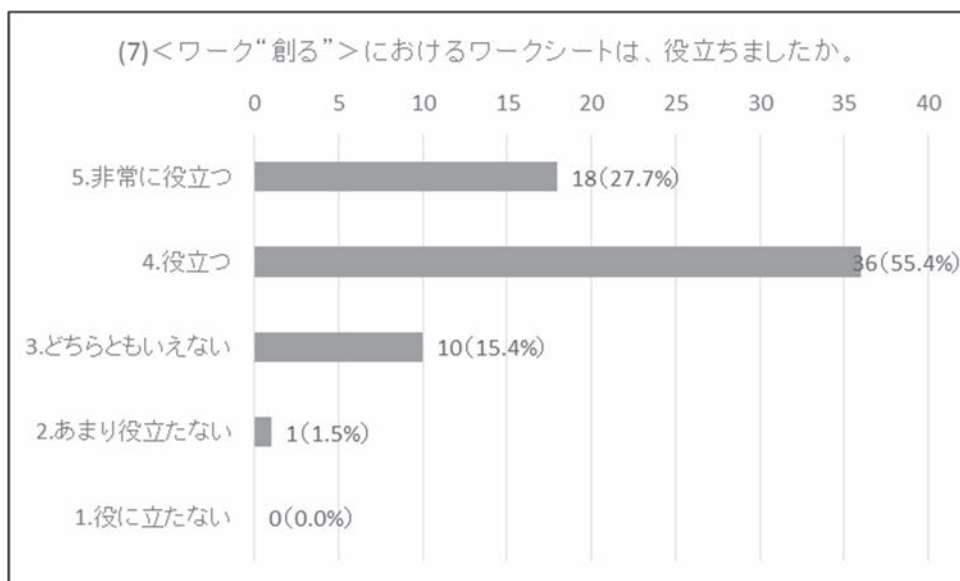
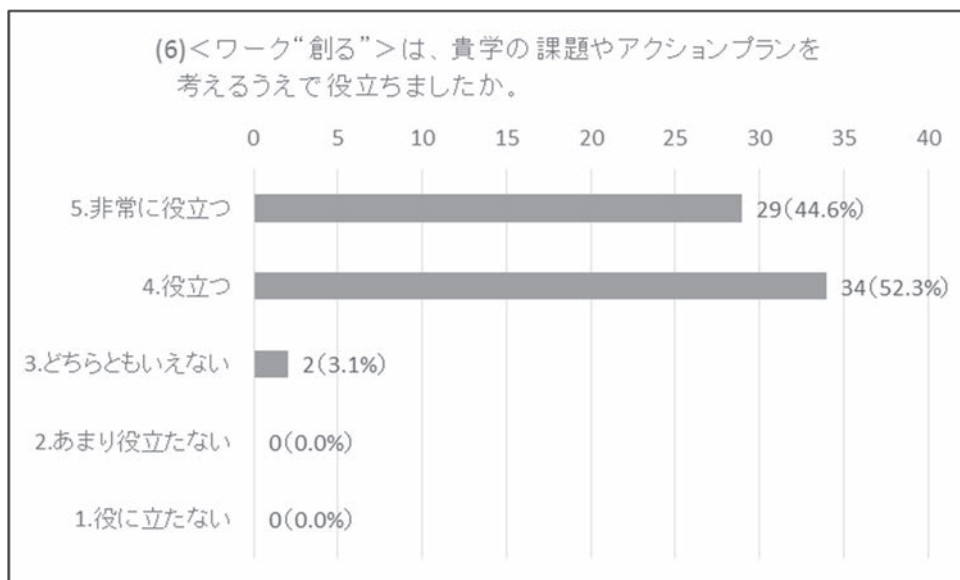
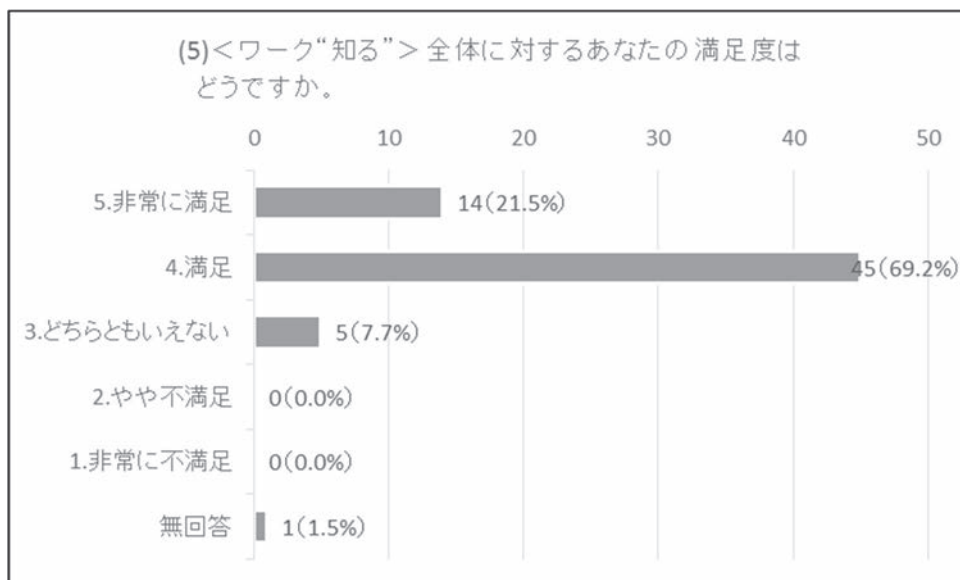


(3) 当センターによる全国調査の報告は、貴学の課題を考える
うえで役立ちましたか。

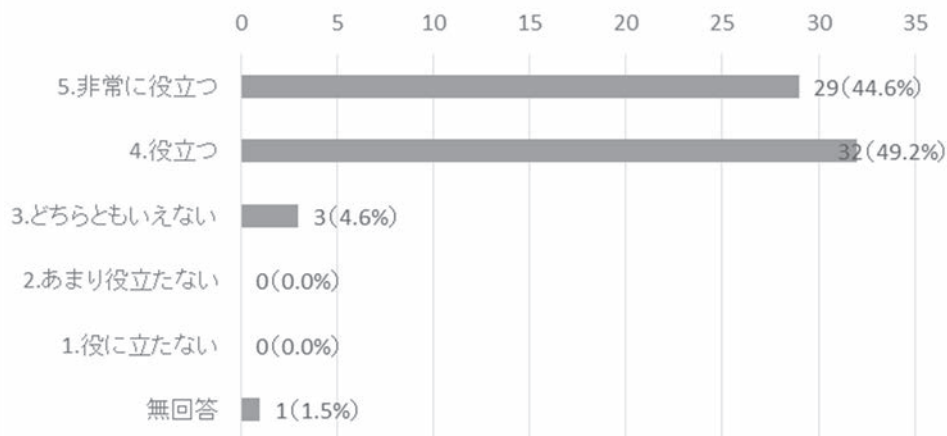


(4) 大学の取り組み事例紹介は、貴学の課題を考えるうえで
役立ちましたか。

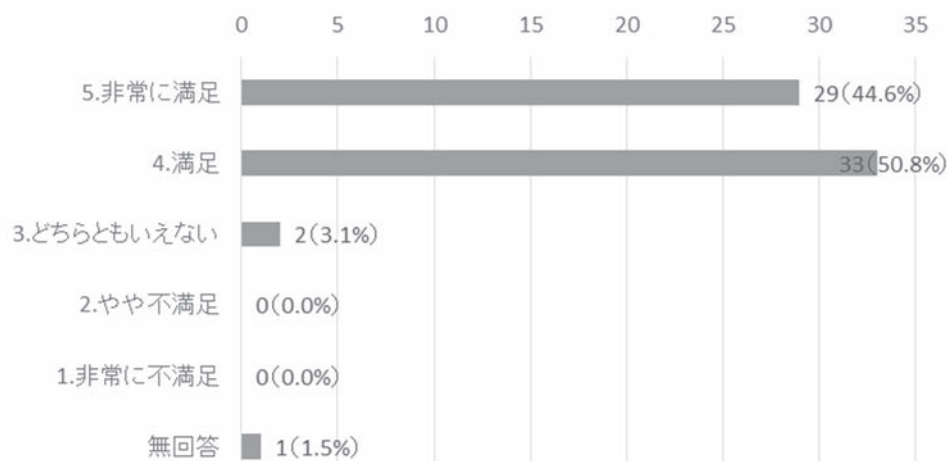




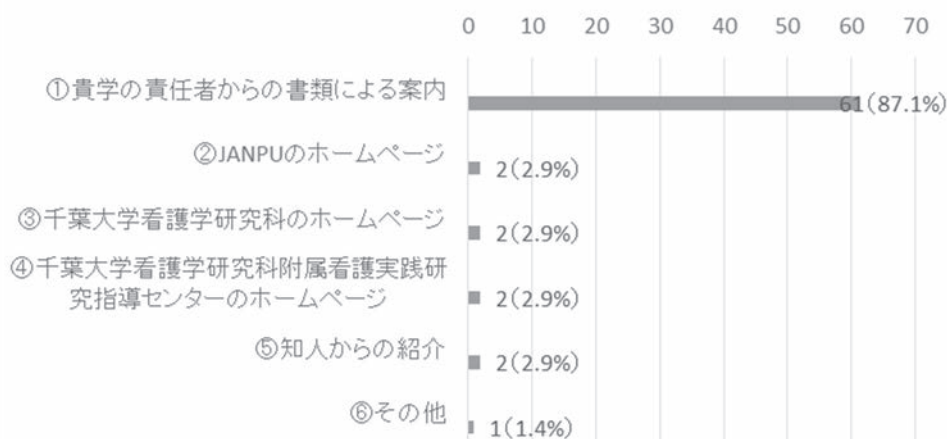
(8) <ワーク“推進する”>は、貴学のアクションプランを考
えううえで役立ちましたか。



(9) ワークショップ全体に対するあなたの満足度はどうですか。



4. 今回の企画は、何で知りましたか？
下記より選んでください(複数回答可)。



● 良かった点の自由記載（抜粋）

- ・ 様々な設置主体・地域の大学がグループメンバーにいたので、色々な観点（視点）から問題を見ていくことができた。
- ・ ファシリテータの先生が、ディスカッションの方針をずれないように、介入していただいていたので円滑にすすめることができた。
- ・ グループワークの進め方、時間の使い方などグループにまかせて頂いたこともよかった。全体発表がさらに視野広く、また重なりあうこともわかった。
- ・ ワークシートが自分の考えを整理するのに有効だった。（GW にうまく活用できなかったのが残念である）
- ・ 事前・事後の課題がなかった事で（1 日終了後の夜はホテルで宿題しましたが）負荷としてはかからず大変ありがたかった。ファシリテータの先生がグループの方向性などについては適切にサジェスチョンしてくださり「この 2 日にできること」へ引き戻してくださったのはとても助かった。
- ・ グループ配置に設置主体、開設年数など考慮して設置がありよかった。
- ・ 様々な状況を知りながら自学へどのように役立てるか整理できる企画でした。
- ・ 4 つの側面から検討できたこと＋共有できたこと（組織運営・臨地実習・学生支援・地域運営）
- ・ テーマが様々あり統合して卒業時到達目標とつなげて検討する力につなげることができた。
- ・ 本学でも悩んでいたタイムリーなテーマであった。
- ・ テーマごとにグループがつくられており、様々な設置主体の教員がメンバーとなっており多様な意見が聞けてよかった。
- ・ 丁寧に企画されていることを感じた。大学の問題を考えていたのでタイミングがとてもよかった。
- ・ DP について文言をきれいにすることばかり考えていたように思いますが、本来あるべき大学の姿を反映することであることを理解できた。
- ・ 2 日程度の方が参加しやすかったのでよかった
- ・ 案内係りの方はじめ、対応が丁寧

● 改善すべき点や意見・感想の自由記載（抜粋）

- ・ 1 日目前半、質問タイム 10 分でもあれば。
- ・ アクションプランまで行くワークの時間をあと 15 分～30 分あると良い
- ・ 活発なグループワークとなり時間が足りなかった
- ・ 発表時間が短い。（2 日間の GW を 5 分で発表するのは無理がある）
- ・ 発表の時間が 7～8 分はほしかったです。
- ・ これ以上の時間をとることは企画側も参加者側も難しいが時間のわりに課題が大きかったと思いました。

● 次年度への要望（抜粋）

- ・ コアカリキュラム作成に向けた、ヒントとなる課題を希望します。
- ・ 引き続き同内容でも良いのではないかと思います。
- ・ 今年のを続きをやってほしい
- ・ 2 日目の時間が不足気味でしたので、1 日目をもう少し充実させてもいいのかと思いました。

5) 認定看護師教育課程(乳がん看護)

日本看護協会は、特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を用いて水準の高い看護実践のできる認定看護師を社会に送り出すことにより、看護現場における看護ケアの広がりや質の向上を図ることを目的に認定看護師制度を発足させた。本制度のもとに、認定看護師教育課程が確立される中で、がん看護領域では、緩和ケア、がん性疼痛看護、がん化学療法看護に続いて、平成15年に乳がん看護分野が認定され、平成17年に千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター内に認定看護師教育課程を設置した。

看護実践研究指導センターの認定看護師教育課程は、特定された認定看護分野において、熟練した看護技術と知識を用いて、水準の高い看護実践のできる認定看護師を社会に送り出すことにより、看護現場における看護ケアの広がりや質の向上を図ることを目的とした教育理念を掲げている。

また、本認定看護師教育課程では、幅広い視野を持ち自立した判断ができ、看護実践を変革向上させていく創造能力を身につけ、かつ以下の3点の特定の認定看護分野の知識・技術を有する者を育成することを目的としている。

- (1) 特定の看護分野において、個人、家族及び集団に対して熟練した看護技術を用いて水準の高い看護を実践する。(実践)
- (2) 特定の看護分野において、看護実践を通して看護職に対し指導を行う。(指導)
- (3) 特定の看護分野において、看護職に対しコンサルテーションを行う。(相談)

<研修受講者>

1. 募集条件

募集条件は、次に定める要件を全て満たしている者である。

- (1) 高等学校若しくはこれに準ずる学校を卒業した者、又は文部科学大臣の定めるところによりこれに準ずる学力があると認められた者。
- (2) 日本国の看護師免許を有する者。
- (3) 看護師としての看護実績を5年以上有し、かつ通算3年以上、乳がん患者の多い病棟あるいは外来等での看護実績を有する者。(入学時点で可)
- (4) 乳がん患者の看護を5例以上担当した実績を有すること。
- (5) 現在、乳がん患者の看護に携わっていることが望ましい。

2. 定員 25名

3. 受講者 24名

<研修の実施>

1. 実施体制

研修生の受け入れ、研修生の身分に関する事、課程修了に関する事、研修生の指導に関する事などの審議のために認定看護師教育課程運営委員会を置いている。運営委員会の構成員はセンター長、専任教員のほか学内及び附属病院の職員を教育機関内委員とし、教育機関外委員として、千葉県看護協会の常任理事で構成している。また、教員会で審議されたことは、上部決定機関としての本学研究科附属看護実践研究指導センター運営委員会で決定される。

本認定看護師教育課程は、日本看護協会が定める認定看護師教育機関審査要項の基準を満たす実施体制を整えている。専任教員は、特任准教授1名、特任助教1名の2名である。主任教員は看護系大学大学院修士課程以上を修了し、その認定分野において高度な看護実践力を有する者、専任教員は本課程修了生である乳がん看護認定看護師と当該分野の専門看護師の資格を有する者である。各専門科目の講師陣は、本学大学院看護学研究科の教員をはじめ、他大学の教員、日本がん看護学会、日本乳癌学会等にて日本の乳がん医療・研究の最前線を担う看護師・医師などを非常勤講師陣として、全60人余りを迎え、日々進化し続けている乳がん医療・看護の最新の知見を実践に反映できるように整備している。

また、実習施設は、日本看護協会認定部の制度委員会の承認を得て決定している。本課程では、首都圏一円の日本乳癌学会認定施設であり、乳腺専門医、かつ当課程修了生の乳がん看護認定看護師が在籍している病院において、指導体制を整え、実習を行っている。平成28年度の実習施設は12施設で、下記のとおりである。

〈平成28年度の実習施設〉

- ・ 国立がん研究センター中央病院
- ・ 国立がん研究センター東病院
- ・ 聖路加国際病院
- ・ 横浜労災病院
- ・ 千葉労災病院
- ・ 栃木県立がんセンター
- ・ がん・感染症センター 都立駒込病院
- ・ 東京歯科大学市川総合病院
- ・ 昭和大学病院
- ・ 聖マリアンナ医科大学病院
- ・ 千葉県がんセンター
- ・ 三井記念病院

＜実施期間＞

平成28年7月1日 ～ 平成28年12月22日

＜実施内容＞

日本看護協会は、認定看護師教育基準カリキュラムを定め、原則として5年ごとに医療の動向等を踏まえ改正を行っている。教育基準カリキュラムの目的は、以下の3点である。

- (1) 乳がんの予防から終末期に至るまでの乳がん患者とその家族の QOL 向上に向けて、熟練した看護技術を用いて質の高い看護実践ができる能力を育成する。
- (2) 乳がんを有する患者の看護において、看護実践を通して他の看護職者に対して指導ができる能力を育成する。
- (3) 乳がんを有する患者の看護において、看護実践を通して他の看護職者に対して相談・支援ができる能力を育成する。

教育基準カリキュラムは、認定看護師に共通して求められる役割と能力のための“共通科目”120時間、乳がん看護の専門分野として求められる基礎知識の“専門基礎科目”120時間、乳がん看護に特化した領域のスキルを身につけるための“専門科目”120時間、演習45時間、実習225時間である（表1：教育内容・授業時間数）。

本認定看護師教育課程の教育内容は、講義と演習を行うことで、知識だけでなく技術の

獲得も重視した内容になっている。また、座学だけではなく、補整下着のメーカーショールームの見学や、医療用かつらメーカーによるかつらと頭皮ケアの方法の講習などもある。さらに、乳がん検診車の見学も行っており、幅広い認定看護師としての知識と経験が習得できるようにしている。

開講から3か月の前半は講義・演習を中心に学習を進め、実習前に科目試験を実施し、実習にむけた知識の確認を行っている。中盤に延べ6週間の臨地実習、実習後には臨地実習で研修生が受け持った事例について事例報告を行うプログラムである。臨地実習終了後は修了判定のための修了試験を行っている。

表1：教育内容・授業時間数

共通科目名	120	専門基礎科目	120			
リーダーシップ	15	腫瘍学概論			30	
文献検索・文献講読	15	がん看護学総論1			30	
情報管理	15	がん看護学総論2			30	
看護倫理	15	乳がん看護概論			15	
指導	15	がんの医療サービスと社会的資源			15	
相談	15					
対人関係	15					
看護管理	15					
専門科目	120		演習	45	実習	225
集学的治療を受ける乳がん患者の看護	45		総合演習		臨地実習	
乳がんサバイバーとその家族への心理・社会的支援	15			45		225
乳がん患者の意思決定を支える看護技術	15					
乳がん患者のボディイメージ変容への看護技術	15					
乳がん患者のリンパ浮腫の看護技術	30					

(単位：時間)

<研修の評価>

教育課程終了時にアンケートを実施した。アンケートは、倫理的配慮のうえ実施し、無記名で回答は自由意思によるものである。

1. アンケートの回収状況

16名に配布し、16名から回答(回収率100%)があった。

2. 研修全体に関すること

1) 研修期間(6か月間)の長さについて

長い		適当である		短い	
人数	割合	人数	割合	人数	割合
0名	0%	12名	75%	4名	25%

2) 上記の理由（一部抜粋）

- ・ 前半に乳がん看護の基礎を学び、後半に臨地実習を通して、学びを深めることができた
- ・ もう少し余裕をもって学習をし、学びを深めたかった
- ・ 知識と自分の看護観を見直し、実習の記録を見直すのに適当だった

3. 講義・演習に関すること

- ・ ロールプレイの講義時間をもう少し確保してほしかった
- ・ 実習をすることで全ての講義がつながっていたことがわかりました

4. 臨地実習に関すること

1) 実習中の臨床指導者の指導について

十分に指導を受けた		あまり指導を受けられなかった		指導を受けられなかった	
人数	割合	人数	割合	人数	割合
0名	0%	15名	94%	1名	6%

2) 上記の理由（一部抜粋）

- ・ その場その場に応じた指導を受けることができた
- ・ 毎日多忙の中、一日の振り返りをして頂いた
- ・ 主体的に考え行動できるように適切なタイミングで指導を受けることができた

5. 教員の指導に関すること

1) 教員の指導について

十分に指導を受けた		あまり指導を受けられなかった		指導を受けられなかった	
人数	割合	人数	割合	人数	割合
11名	69%	4名	25%	1名	6%

2) 上記の理由（一部抜粋）

- ・ 教員と共に看護を学ぶことができ、曖昧な思考過程を深く考察することができた
- ・ 看護実践を意識化していくことの大切さを学ぶことができた
- ・ 臨床では学べない多くのことを教えて頂きました

6. 研修全体の意見（一部抜粋）

- ・ ここで学んだことを糧とし、これからも学びを重ねていきたいと思います
- ・ 自分の看護を見直すことができたので充実した6か月だった
- ・ 講義は全てわかりやすく、大変貴重であったと思います。カリキュラムも研修生の理解が深まるように組まれていたと感じました

なお、本課程は、平成28年度が、最終年度で閉講予定である等を鑑み、一部受講生の受講期間を延長しており、千葉大学医学部附属病院における追実習等を行っている。平成28年度の最終修了者数は、23名である。

Ⅲ. 資料

1. 教育・研究活動実績

2016年4月から2017年3月

研究活動

[原著]

1. 和住淑子, 野地有子, 黒田久美子, 銭淑君, 鈴木友子, 北池正, 吉本照子: 看護学教育におけるFDマザーマップの開発. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 39, 21-26, 2017.
2. 野地有子: 時代の要請に応える看護職としてのプロフェッショナルリズムを発揮できる人を育てるー看護教育の質保証からー, 保健の科学, 第58巻, 第5号, 301-306, 2016.
3. 河部房子, 黒田久美子, 小山田恭子, 上本野唱子, 池袋昌子, 西山正恵, 野地有子, 若杉歩, 赤沼智子: 看護系大学と実習病院のトップ管理者間の連携の構成要素に関する研究ー看護教育・実践連携評価ツールの開発に向けてー, 日本看護学教育学会誌 vol.26, No.1, P15-P28, 2016.
4. Sachiko WAKI, Yasuko SHIMIZU, Kyoko UCHIUMI, Kawai ASOU, Kumiko KURODA, Naoko MURAKADO, Natsuko SETO, Harue MASAKI and Hidetoki Ishii: Structural model of self-care agency in patients with diabetes: A path analysis of the Instrument of Diabetes Self-Care Agency and body self-awareness, Japan Journal of Nursing Science ,2016.
5. Ariko Noji, Yuki Mochizuki, Akiko Nosaki, Dale Glaser, Lucia Gonzalez, Akiko Mizobe, Katsuya Kanda: Evaluating Cultural Competence Among Japanese Clinical Nurses- Analyses of a translated scale, International Journal of Nursing Practice (23(S1). Journal of Nursing and Human Sciences) in press, 2017.

[学会発表抄録]

1. 吉本照子, 辻村真由子, 長江弘子, 保坂和子: 新人訪問看護師育成を担う事業所内指導者向け研修プログラムの開発. 第18回日本在宅医学会大会・第21回日本在宅ケア学会学術集会合同大会プログラム・講演抄録集, 397, 2016.
2. 清水みどり, 吉本照子, 杉田由加里: 重度の摂食・嚥下障害を有する特養入所者の経口摂取に向けた看護職の役割行動ー看護ー介護連携に着目して. 日本老年看護学会第21回学術集会抄録集, 190, 2016.
3. 杉原幸子, 杉田由加里, 吉本照子: A急性期総合病院の専長看護師による退院支援の必要な患者をスクリーニングするしくみの再構築. 第20回日本看護管理学会学術集会抄録集, 263, 2016.
4. 能見清子, 吉本照子, 杉田由加里: 自治体立急性期病院における中堅看護師の専門職組織人としての目標設定に向けた病棟看護管理者の支援行動. 第20回日本看護管理学会学術集会抄録集, 306, 2016.

5. 吉野尚一, 吉本照子, 杉田由加里: 特定機能病院における総合診療科外来看護師の役割行動を創出するしくみづくり. 第 20 回日本看護管理学会学術集会抄録集, 327, 2016.
6. 小川直子, 田畑陽一郎, 吉本照子, 杉田由加里: 看護経験の少ない新入訪問看護師が介護支援専門員と協働するための学習支援. 第 6 回日本在宅看護学会学術集会抄録集, 77, 2016.
7. 辻村真由子, 吉本照子, 長江弘子: 新人訪問看護師育成を担う事業所内指導者向け研修プログラムの開発と評価. 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 東京, 2016.
8. 吉本照子, 辻村真由子, 雑賀倫子, 深田美香, 大草智子, 森下安子, 森下幸子, 野村陽子, 長江弘子: 行政・実践者・大学の連携による訪問看護師の質的・量的確保のしくみづくり: 千葉・鳥取・高知県の事例から. 第 36 回日本看護科学学会学術集会交流集会, 東京, 2016.
9. 吉本照子, 飯岡由紀子, 小川純子: 合理的配慮を要する学生の臨地実習の質保証に向けた FD プログラム開発 (交流セッション). 日本看護学教育学会第 26 回学術集会プログラム・講演集, 127, 2016.
10. 飛田篤子, 吉本照子, 杉田由加里: エンド・オブ・ライフ・ステージにあるがん患者がより生きるための主体性(エージェンシー)に関する文献検討. *Palliative Care Research*, 11(Suppl), S552, 2016.
11. 西開地由美, 吉本照子, 杉田由加里: クリティカルケア領域における代理意思決定支援を促す看護管理の研究動向と今後の課題. 日本医療・病院管理学会誌, 53(Suppl), 194, 2016.
12. 野地有子, 柳堀朗子, 野本尚子ほか: 管理栄養士が外国人患者のベッドサイドに訪問する病院・しない病院・病院の国際化の視点から. 第 16 回日本健康・栄養システム学会, 2016 年 6 月.
13. 野地有子: 医療介護総合推進法による地域包括ケアシステム改革～新たな病院・施設経営に求められる患者・家族中心の栄養ケア・マネジメントとサービス提供ができる人の教育～. 第 16 回日本健康・栄養システム学会シンポジウム, 2016 年 6 月.
14. Ariko Noji, Mayuko Tsujimura, Yuki Mochizuki, Tomoko Suzuki, Akiko Mizobe, Daisuke Sumitani, Ryoko Yanagibori, Katsuya Kanda, Julia P.Fortier, Noel J.Chrisman: Community and Hospital Relationship for Cultural Appropriate Health Care Services in Japanese Hospitals. The 3rd Korea-Japan Joint Conference on Community Health Nursing (Pusan, Korea), 2016.7.
15. 井上里恵, 小池三奈美, 黒田幸恵, 黒田久美子, 野地有子: A 病院が求める看護管理者と管理能力の実態及び管理者のニーズ・マネジメントラダーと管理者教育プログラムの構築に向けて-, 第 20 回日本看護管理学会学術集会, 2016 年 8 月.

16. 黒田久美子, 和住淑子, 西山ゆかり, 鈴木康美, 室屋 和子, 三谷里恵, 杉原多可子 : 新人看護師教育責任者支援プログラムの開発—自施設の評価をふまえた研修企画能力向上への支援—, 第 20 回日本看護管理学会, 2016 年 8 月.
17. 大島紀子, 炭谷大輔, 野地有子 : 新入社員への健康づくり 第一報 食生活を中心として, 第 32 回日本健康科学学会学術大会, 2016 年 9 月.
18. 炭谷大輔, 大島紀子, 野地有子 : 新入社員への健康づくり 第二報 ゲーム要素を中心として, 第 32 回日本健康科学学会学術大会, 2016 年 9 月.
19. 野地有子, 野崎章子, 望月由紀, 柳堀朗子, 菅田勝也 : 外国人患者へのケア提供に際して看護師が持つ困難さ～テキストマイニング分析から～, 第 54 回日本医療・病院管理学会学術総会, 2016 年 9 月.
20. Akiko Nosaki, Ariko Noji, Tomoko Suzuki, Yuki Mochizuki, Tadashi Kitaike, Daisuke Sumitani: Difficulties in delivering nursing care to foreign patients among Japanese registered nurses, 5th World Congress of Clinical Safety 2015, Boston, USA, 2016 年 9 月.
21. 増澤清美, 小林寿子, 佐野麻里子, 田中希実子, 角田ひろみ, 野地有子 : 産業看護職によるストレスチェック後の保健面接 第一報～情報収集項目の特徴について～, 日本産業看護学会第 5 回学術集会, 2016 年 11 月.
22. 田中希実子, 小林寿子, 佐野麻里子, 角田ひろみ, 増澤清美, 野地有子 : 産業看護職によるストレスチェック後の保健面接 第二報～継続支援の判断に焦点をあてて～, 日本産業看護学会第 5 回学術集会, 2016 年 11 月.
23. 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯岡由紀子, 溝部昌子 : 看護系大学における国際交流と大学間・学部協定に関する調査研究～MOU の評価の視点から～, 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月.
24. 小寺さやか, 野地有子, 近藤麻理, 飯岡由紀子, 溝部昌子 : 看護系大学における国際交流推進のための FD コンテンツの効果～報告会後のアンケートより～, 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月.
25. 坂本明子, 正木治恵, 大原裕子, 黒田久美子 : 他職種からみた高齢者ケアの継続・連携に関するチーム医療を促進する看護師のコーディネーター機能, 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月.
26. 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯岡由紀子, 溝部昌子 : 看護系大学におけるグローバル人材育成と国際交流の推進を考える —国際交流委員にあたってしまったら!—, 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月.
27. 野地有子, 野崎章子, 望月由紀, 北池正, 溝部昌子, 菅田勝也 : 我が国の看護職のカルチュラル・コンピテンス能力開発領域に関する研究～テキストマイニング分析から～, 第 7 回日本看護評価学会学術集会, 2017 年 3 月.
28. 中村明日香, 野地有子 : 手術室看護師が行う術後訪問の意義の検討, 第 7 回日本看護評価学会学術集会, 2017 年 3 月.

29. Lucia Gonzales, Anne Koci, RoseMary Gee, Ariko Noji: Musings of biobehavioral researchers in studying women's religiousness globally, 2017 Conference on Medicine and Religion, Huston, USA, 2017.3.
30. Masako Mizuno, Mieko Masubuchi, Ariko Noji, Lucia Gonzales, Noriko Oshima, Mayumi tanii, Mika Kokayu, Tomoko Hashizume : Discharge support for the acute care in Japan~Lessons learned from Community-based Care Transitions Program in the US~, The 20th EAFONS, Hong Kong, 2017.3.
31. Yuki Mochizuki, Ariko Noji, Mari Kondo, Yukiko Iioka, Akiko Nosaki, Masae Nishiyama, Eiko Ootomo, Manami Sakamoto, Daisuke Sumitani : Educational nursing application to cultivate cultural competence in Japan, The 20th EAFONS, Hong Kong, 2017.3.
32. Tomoko Hashizume, Kazuko Komori, Kaemi Ninomiya, Ariko Noji : Priorities for nursing managers in conducting hospital support during the 2016 Kumamoto, Japan Earthquakes: Lessons learned from the Japanese Red Cross Headquarters, The 20th EAFONS, Hong Kong, 2017.3.
33. Mika Kogayu, Masako Ozawa, Michiyo Kobayashi, Koji Kobayashi, Ariko Noji : Modifying and Enhancing a Support Program for Newly Employed Nurses in a Small-scale Hospital, The 20th EAFONS, Hong Kong, 2017.3.
34. Noriko Oshima, Ariko Noji : Health Promotion for New Employees: Focus on Nutrition and Exercise, The 20th EAFONS, Hong Kong, 2017.3.
35. Mayumi Tanii, Hiromi Issiki, Koji Kobayashi, Ariko Noji : Multi-departmental, multidisciplinary action research for creating a perioperative care pass to improve procedural efficiency and visualization of perioperative nursing duties Case study from a Japanese acute care hospital : The 20th EAFONS, Hong Kong, 2017.3.
36. 和住淑子, 山本利江, 齊藤しのぶ : F. Nightingale の業績を現代に活かすための '類比' の方法論. ナイチンゲール研究学会第 37 回研究懇談会, 2016.
37. 石川ひとみ, 和住淑子, 黒田久美子, 河部房子, 若杉歩, 白川秀子 : 増床・組織再編・病棟移転を若手リーダー育成のチャンスとするための看護管理者の支援内容. 第 20 回日本看護管理学会学術集会抄録集, 234, 2016.
38. 黒田久美子, 和住淑子, 西山由加里, 鈴木康美, 室屋和子, 三谷理恵, 杉原多可子 : 新人看護師教育責任者支援プログラムの開発-自施設の評価をふまえた研修企画能力向上への支援-. 第 20 回日本看護管理学会学術集会抄録集, 347, 2016.
39. 高木夏恵, 和住淑子 : 患者の力を活かして支える看護体制構築に向けた Partnership Nursing System の活用. 第 20 回日本看護管理学会学術集会抄録集, 213, 2016.
40. 林由美, 和住淑子 : 救命救急センターにおけるリーダー看護師育成プログラムの開発と展開-地域で生活する患者の回復促進を目標に据えて-. 第 20 回日本看護管理学会学術集会抄録集, 242, 2016.

41. 高見治一郎, 加藤陽子, 郡山智絵, 伊藤一枝, 舩本智津子, 和住淑子: 眼科看護に誇りと意欲を持つための支援方法の検討—熟練看護師の展開した硝子体術後の腹臥位ケアに関する教育プログラムの評価から—。第32回日本視機能看護学会学術総会, 2016.
42. 東香織, 大貫佳美, 神澤由佳, 比田井理恵, 和住淑子: 救命救急センターICUから一般病棟への転棟をきっかけに発症した過活動型せん妄の背景要因。日本救急看護学会雑誌, 18 (3), 282, 2016.
43. 銭淑君, 松本毅, 和住淑子, 前田隆, 片桐智子, 永田 亜希子, 河部 房子: 看護学生の「生活特徴と自覚症状の関係」に焦点をあてた生活改善プロトコルの開発に向けた基礎研究。第36回日本看護科学学会学術集会, <https://confit.atlas.jp/guide/event/jans36/subject/PB-18-26/category?cryptoId=>, 2016.
44. Shu Chun Chien: The use of internet health education for prevention diabetes in workplace from perspectives of human beings and living processes. The 11th IDF-WPR Congress 2016 & 8th AASD Scientific Meeting. 30 October 2016, Taipei, Taiwan. <http://11thidf-wpr-8thaasd2016-abstracts.elsevierdigitaledge.com/#46>
45. Shu Chun Chien, Yoshiko Wazumi, Toshie Yamamoto, Takeshi Matsumoto, Takashi Maeda, Tomoko Katagiri, Akiko Nagata, Fusako Kawabe: Program for promoting self-management of health status for nursing students based on oriental medical concepts. Creating Healthy Work Environments- The conference of Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing, 2017
46. Toshie Yamamoto, Shu Chun Chien, Takeshi Matsumoto, Yuka Kanai: Study of promoting health management for nurses working at a highly advanced treatment medical center. Creating Healthy Work Environments- The conference of Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing. 18 March 2017, Indianapolis, Indiana USA.
47. 森小律恵, 古山景子, 岡崎優子, 中山法子, 黒田久美子, 米田昭子, 福井トシ子, 数間恵子: 特定行為研修を活用しよう!—特定行為研修は糖尿病看護に何をもたらすのか?。第21回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 2016年9月。
48. Tsuji T, Koyama T, Kondo T, Takakura Y, Masuda Y, Kobayashi T, Horaiya K, Knda N, Sugimori N, Masaoka K, Nakagawa M, Abe K, Kurihara M: Promotion of Cancer Rehabilitation in Japan: The Impact of The CAREER(Cancer Rehabilitation Educational Program For Rehabilitation Teams) Workshop Project, Supportive Care in Cancer, 24(1), 218, 2016.
49. Arahori Y, Masujima M, Abe K, Naduka Y: Changes in Menopausal Symptoms in Premenopausal Breast Cancer Patients Undergoing Endocrine Therapy, International Conference on Cancer Nursing 2016, 165, 2016.

50. 井関千裕, 阿部恭子, 国府浩子, 武石優子, 荒堀有子, 金澤麻衣子, 大野朋加: 乳がん看護の知識の習得と臨床実践の拡大を目指す教育プログラムの効果に関する研究(第1報). 第24回日本乳癌学会総会プログラム抄録集, 353, 2016.
51. 佐藤まゆみ, 片岡純, 森本悦子, 大内美穂子, 塩原由美子, 阿部恭子, 高山京子, 佐藤禮子: 外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のための外来看護師育成プログラム: プログラムの妥当性を高めるための課題. 第20回日本看護管理学会学術集会, 326, 2016.
52. 井関千裕, 阿部恭子: 乳がん看護認定看護師の活動を推進する看護管理者の支援. 第20回日本看護管理学会学術集会, 291, 2016.
53. 阿部恭子, 井関千裕, 金澤麻衣子, 荒堀有子, 大野朋加: 初発乳がん患者への看護に焦点をあてたe-ラーニングの実施とプログラム評価. 千葉看護学会第22回学術集会, 40, 2016.
54. 井関千裕, 阿部恭子, 荒堀有子, 金澤麻衣子: 乳がん看護認定看護師の活動の推進を目指した調査. 千葉看護学会第22回学術集会, 41, 2016.
55. 阿部恭子: 実践報告の抄録の書き方と発表のコツ. 日本乳がん看護研究会誌, 12巻, 20, 2016.
56. Abe K, Iseki C, Suzuki M, Kokufu H, Arahori Y, Ohno T, Kanazawa M, Takeishi Y: Results of an Educational Program Delivered through e-learning, Focused on Nursing for Primary Breast Cancer Patients. The 39th Annual CTSC-AACR San Antonio Breast Cancer symposium, 100, 2016.
57. 友岡道子, 佐藤紀子, 吉田澄恵: ファーストレベル受講者の事例レポートにみられる臨床判断の内容と看護管理との関連, 日本看護学教育学会誌. 第26回学術集会プログラム・講演集, 154, 2016.
58. 村越望, 佐藤紀子, 吉田澄恵: 全室個室病棟で働くキャリア基盤形成期の看護師の看護実践, 日本看護学教育学会誌. 第26回学術集会プログラム・講演集, 210, 2016.
59. 長尾祥子, 佐藤紀子, 吉田澄恵: 病院で働く非正規雇用看護師の経験, 日本看護科学学会学術集会第36回講演集, p198, 2016

[報告書]

1. 平成28年度 看護学教育ワークショップ報告書, 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターおよび平成28年度看護学教育ワークショップ実行委員会, 1~125, 2017年3月

2. 平成 28 年度文部科学省委託事業看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究，学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発，看護系大学における「到達目標 2011」の活用実態と背景要因の解明に関する全国調査報告書，看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター，1～60，2017 年 3 月
3. 看護学教育研究共同利用拠点，千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター，FD マザーマップ・コンテンツ開発委員会（国際交流班），野地有子，近藤麻理，小寺さやか，飯岡由紀子，溝部昌子，炭谷大輔：看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の推進，平成 27～28 年度 看護学教育 FD マザーマップ・コンテンツ開発，「10 年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進」コンテンツ報告書，1～38，2016 年 11 月．
4. 看護学教育研究共同利用拠点，千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター，「教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える看護学教員向け FD コンテンツ開発と評価」プロジェクト研究共同研究員，和住淑子，黒田久美子，高島直美，飯岡由紀子，山本真実：「看護学教育における FD マザーマップ」対応型，FD コンテンツ開発報告書，教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える－学生への対応に困った 10 事例を通して－，1～48，2017 年 3 月

[単行書]

1. 野地有子：第 10 章公衆衛生看護の歴史．米国と英国の公衆衛生の発達と公衆衛生看護活動の歴史，標準保健師講座，公衆衛生看護概論．医学書院，230-238，2016.
2. 阿部恭子：第 4 章医療の質 1. チーム医療・クリティカルパス．日本乳癌学会編，乳腺腫瘍学 第 2 版，金原出版株式会社，350-352，2016.

[総説・短報・実践報告・資料・その他]

1. 吉本照子：看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターFD・SD 支援の取り組み．第 1 回大学教育イノベーションフォーラム，2017 年 3 月 9 日，東京国際交流館。
https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1485418757
2. 高橋在也，岩城典子，長江弘子，石丸美奈，清水直美，吉本照子：生き方の理解と支え合いのための場の模索－エンドオブライフを考える市民参加型プログラムの事例から－．生命倫理，26(1)，159-168、2016.
3. 野地有子：学会ポスター出展．「研究者と実践者の出会いコーナー」（大学院生の留学とキャップストーン・プロジェクト），第 20 回日本看護管理学会学術集会，2016 年 8 月．
4. 野地有子，Hardin, S.B., Gonzales, L., Curran, C.：「看護の未来」にむけた国際共

同教育の実践—学术交流協定に基づく千葉大学とサンディエゴ大学の連携から—, 千葉大学大学院看護学研究科紀要 39, 51~57, 2017.

5. 炭谷大輔, 野地有子, 大島紀子: 我が国の保健医療福祉におけるゲーミフィケーションの活用と課題, 日本健康科学学会誌 35(1), 51~61, 2017.
6. 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 溝部昌子: 「共同研究推進のための合同研究発表会」グローバル人材育成と国際交流の推進に向けたFD・SDに関する調査研究—看護系大学全国調査から—, 千葉大学西千葉キャンパス, 2017年3月27日
7. Ariko Noji, Heeseung Choi: Symposium 2: Aging Issues in Community Health Nursing, The 20th EAFONS, Hong Kong, 2017.3.
8. 黒田久美子: 臨床で活かす看護師のコンサルテーション, 富山大学看護学会誌, 16(1), 80-89, 2016年9月.
9. 森小律恵, 古山景子, 中山法子, 岡崎優子, 黒田久美子, 米田昭子, 福井トシ子, 数間恵子: 委員会活動報告「特定行為に係る看護師の研修制度」を理解する. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 20(1), 57-66, 2016年.
10. 黒田久美子, 汪宜静, 蔡明燕, 錢淑君, 清水安子, 内海香子: 外来通院中の高齢インスリン療法患者・家族の認知機能低下により生じる療養生活の移行, ホテルプラザ菜の花, 千葉市, 2017.3.
11. 阿部恭子, 大野朋加: ICT活用による看護の継続教育, 千葉看護学会第22回学術集会, 53, 2016.
12. 長坂育代, 眞嶋朋子, 吉田澄恵, 井関千裕, 坂本理恵: 知って活かそう! オンコロジャーナースの看護実践, 千葉看護学会第22回学術集会, 54, 2016.
13. 阿部恭子, 一場慶, 久本佳奈, 福島芳子, 宋奈緒子, 小原泉: 事例から学ぶがん治療を受ける患者への療養支援. 第31回日本がん看護学会学術集会講演集, 307, 2017.
14. 吉田澄恵. 第61回日透析医学会学術集会・総会 シンポジウム セッションテーマ: 透析医療と看護倫理. 2016年6月11日.

教育活動(学外)

1. 平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月 野地有子
 - ① 派遣先：千葉県看護協会
 - ② 目的：認定看護管理者教育課程運営委員会（副委員長）
2. 平成 28 年 5 月 15 日 吉田澄恵
 - ① 派遣先：静岡県看護協会
 - ② 目的：認定看護管理者研修ファーストレベル「看護専門職論」講師
3. 平成 28 年 5 月～平成 28 年 3 月 和住淑子
 - ① 派遣先：千葉県救急医療センター
 - ② 目的：看護研究個別指導・発表会指導
4. 平成 28 年 5 月 10 日, 11 月 10 日 吉田澄恵
 - ① 派遣先：東京都看護協会
 - ② 目的：認定看護管理者研修ファーストレベル教育課程「看護サービス提供論」講師
5. 平成 28 年 5 月 23 日 和住淑子
 - ① 派遣先：福岡大学医学部看護学科
 - ② 目的：FD 事業計画研修会「FD マザーマップを活用した自組織の課題発見、課題解決に向けて」講師
6. 平成 28 年 6 月 野地有子
 - ① 派遣先：日本健康・栄養システム学会
 - ② 目的：臨床栄養師研修（平成 28 年度認定講座）講師「地域栄養活動論」
7. 平成 28 年 6 月 9 日, 6 月 10 日 阿部恭子
 - ① 派遣先：和歌山県立医科大学大学院 保健看護学研究科
 - ② 目的：講義「緩和ケア B」非常勤講師
8. 平成 28 年 6 月 18,19 日 吉田澄恵
 - ① 派遣先：宮城大学大学院看護学研究科博士前期課程
 - ② 目的：看護教育学 非常勤講師
9. 平成 28 年 6 月 25,26 日, 9 月 24,25 日 吉田澄恵
 - ① 派遣先：愛媛県看護協会
 - ② 目的：認定看護管理者研修ファーストレベル教育課程「看護管理概論」講師
10. 平成 28 年 6 月 28 日, 11 月 15 日 黒田久美子
 - ① 派遣先：千葉大学医学部附属病院
 - ② 目的：シニアプリセプター研修 課題解決のために必要な能力ー事例の問題の構造的把握のために必要なシニアプリセプターとしての視点ー」講師・グループワークファシリテーター

11. 平成 28 年 6 月 28 日、11 月 15 日 和住淑子
 - ① 派遣先：千葉大学医学部附属病院
 - ② 目的：シニアプリセプター研修 講義「課題解決のために必要な能力－事例の問題の構造的把握のために必要なシニアプリセプターとしての視点－」、グループワークファシリテーター
12. 平成 28 年 7 月 野地有子
 - ① 派遣先：Seoul National University, South Korea
 - ② 目的：千葉大学とソウル国立大学の国際学会における共同シンポジウム企画
13. 平成 28 年 7 月～8 月 野地有子
 - ① 派遣先：University of San Diego, USA
 - ② 目的：看護管理者のグローバル人材育成の国際共同教育
14. 平成 28 年 7 月 11 日 吉田澄恵
 - ① 派遣先：防衛医科大学校
 - ② 目的：看護学科 2 年 成人看護援助論①「回復期にある患者への看護の実際－運動器の機能障害をもつ成人への看護」特別講義
15. 平成 28 年 7 月 24 日 吉田澄恵
 - ① 派遣先：日本腎不全看護学会北海道地区
 - ② 目的：2016 年日本腎不全看護学会北海道地区セミナー「透析医療における看護倫理について考えよう」講師
16. 平成 28 年 7 月 28 日 和住淑子
 - ① 派遣先：獨協医科大学大学院看護学研究科
 - ② 目的：「保健医療福祉特論」非常勤講師
17. 平成 28 年 8 月 1,2,11 日 和住淑子
 - ① 派遣先：宮崎県立看護大学大学院看護学研究科看護学専攻
 - ② 目的：「看護管理」非常勤講師
18. 平成 28 年 8 月 1 日 黒田久美子
 - ① 派遣先：千葉大学医学部附属病院ひがし棟 3 階病棟
 - ② 目的：勉強会「糖尿病をもつ人への看護支援」
19. 平成 28 年 8 月 4 日 和住淑子
 - ① 派遣先：大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
 - ② 目的：「看護理論」非常勤講師
20. 平成 28 年 8 月 6 日 和住淑子
 - ① 派遣先：岐阜県立看護大学大学院看護学専攻
 - ② 目的：「看護政策論」非常勤講師
21. 平成 28 年 8 月 9 日 阿部恭子
 - ① 派遣先：静岡県立静岡がんセンター 認定看護師教育課程：乳がん看護

- ② 目的：講義「意思決定支援」講師
22. 平成 28 年 8 月 10 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：東京都ナースプラザ
- ② 目的：中堅看護教員ブラッシュアップ研修「中堅教員に必要な能力」講師
23. 平成 28 年 8 月 13 日, 11 月 3 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：北海道看護協会
- ② 目的：認定看護管理者研修セカンドレベル教育課程「人的資源活用論. 人材を育てる看護マネジメント (キャリア開発支援)」講師
24. 平成 28 年 9 月 1 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：東海大学健康科学部
- ② 目的：健康科学部 FD 研修「講義科目の展開における自主的学習を促す仕掛け」
25. 平成 28 年 9 月 2 日 和住淑子
- ① 派遣先：埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科看護学専修
- ② 目的：「看護理論」非常勤講師
26. 平成 28 年 9 月 5 日、10 月 31 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：東邦大学医療センター 大森病院・大橋病院
- ② 目的：大森病院・大橋病院「看護師の臨床の知研修」講師
27. 平成 28 年 9 月 6 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：久留米大学医学部看護学科
- ② 目的：FD ワークショップ「臨地実習における指導のあり方、指導力の向上に向けて」講師
28. 平成 28 年 9 月 12 日, 10 月 3,31 日、11 月 14 日 吉本照子
- ① 派遣先：千葉県看護協会
- ② 目的：認定看護管理者教育課程セカンドレベル「ヘルスケアサービス管理論. クオリティマネジメント」講師
29. 平成 28 年 10 月 3 日, 11 月 7 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：千葉県看護協会
- ② 目的：認定看護管理者教育課程セカンドレベル「人的資源活用論」講師
30. 平成 28 年 10 月 8 日、11 月 26 日、12 月 17 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：東京慈恵会医科大学大学院
- ② 目的：看護教育特論 非常勤講師
31. 平成 28 年 10 月 11,17,20 日 和住淑子
- 平成 28 年 10 月 14,18 日 黒田久美子
- ① 派遣先：千葉県看護協会
- ② 目的：平成 28 年度「実習指導者講習会 (40 日コース) 実習指導の原理」講師

32. 平成 28 年 10 月 28 日 和住淑子
- ① 派遣先：日本救急看護学会
 - ② 目的：社員（評議員）・学会員公開学習会「臨床研究の意義と査読について」講師
33. 平成 28 年 11 月 野地有子
- ① 派遣先：Khon Kaen University, Thailand
 - ② 目的：アジア TCN(Transcultural Nursing)演習の国際共同教育企画と現地視察
34. 平成 29 年 11 月 3 日 黒田久美子
- ① 派遣先：京葉銀行文化プラザ 櫛, 千葉市
 - ② 目的：第 18 回千葉県糖尿病看護研究会「糖尿病をもつ人の在宅療養を支えるチーム医療～私にできること、みんなでできること～」企画・実行・グループワークファシリテーター
35. 平成 28 年 11 月 6 日 黒田久美子
- ① 派遣先：京葉銀行文化プラザ 音楽ホール, 千葉市
 - ② 目的：千葉県糖尿病協会主催 第 13 回市民のための糖尿病教室「災害は予告なしにやってくる～その時、あなたならどうする～」企画・実行・座長
36. 平成 29 年 11 月 8,9 日 黒田久美子
- ① 派遣先：大阪府看護協会
 - ② 目的：新人看護職員研修責任者研修 講師
37. 平成 28 年 11 月 8,9 日 和住淑子
- ① 派遣先：大阪府看護協会
 - ② 目的：「新人看護職員研修責任者研修」講師
38. 平成 28 年 11 月 14 日 和住淑子
- ① 派遣先：千葉県立保健医療大学看護学科
 - ② 目的：「看護政策論」非常勤講師
39. 平成 28 年 11 月 18 日 和住淑子
- ① 派遣先：J R 東京総合病院高等看護学院
 - ② 目的：戴帽式特別講演会「『看護覚え書』と看護の本質」講師
40. 平成 28 年 11 月 19,20 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：宮城大学大学院看護学研究科博士後期課程
 - ② 目的：生涯健康支援看護教育特論 非常勤講師
41. 平成 28 年 11 月 28 日 和住淑子
- ① 派遣先：旭川医科大学
 - ② 目的：FD 講演会「実習における教育実践力の向上 - 学生が経験から学ぶことを支援する -」講師

42. 平成 28 年 12 月 5 日 和住淑子
- ① 派遣先：学校法人慈恵大学
 - ② 目的：平成 28 年度看護監督者研修「看護管理に必要な知識体系」講師
43. 平成 28 年 12 月 9 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：東京都看護協会
 - ② 目的：認定看護管理者研修ファーストレベル教育課程「看護専門職論」講師
44. 平成 29 年 1 月 23 日 和住淑子
- ① 派遣先：横浜市立大学医学部看護学科・看護学専攻
 - ② 目的：FD 研修会「『看護学教育における FD マザーマップ』の開発とその活用」講師
45. 平成 29 年 2 月 19 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：徳島腎不全看護研究会
 - ② 目的：「透析看護における毎日の関わりの再考ー学んだはずの看護学の活用」講師
46. 平成 29 年 2 月 24 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：JR 東京総合病院高等看護学園
 - ② 目的：特別講演「看護師としてのキャリアデザイン」講師
47. 平成 29 年 3 月 野地有子
- ① 派遣先：The Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong, China
 - ② 目的：The 20th EAFONS(East Asian Forum of Nursing Scholars)
千葉大学とソウル国立大学の国際学会における共同シンポジウム開催
48. 平成 29 年 3 月 30 日 和住淑子
- ① 派遣先：湘南医療大学
 - ② 目的：研修会「看護系大学教員としての FD 課題を考える」 講演「FD 研修課題を見出すための FD マザーマップの活用方法」講師

2. 職員配置

附属看護実践研究指導センター

研 究 部	職 名	氏 名
セ ン タ ー 長	教 授	吉 本 照 子
ケ ア 開 発 研 究 部	教 授 准教授 講 師	野 地 有 子 黒 田 久 美 子 赤 沼 智 子
政 策 ・ 教 育 開 発 研 究 部	教 授 准教授	和 住 淑 子 錢 淑 君

大学院看護学研究科看護システム管理学

領 域	職 名	氏 名
病 院 看 護 シ ス テ ム 管 理 学	教 授 講 師	手 島 恵 飯 田 貴 映 子
地 域 看 護 シ ス テ ム 管 理 学	教 授 准教授	吉 本 照 子 杉 田 由 加 里
ケ ア 施 設 看 護 シ ス テ ム 管 理 学	教 授 助 教	酒 井 郁 子 黒 河 内 仙 奈

外部資金等

名 称	職 名	氏 名
認 定 看 護 師 教 育 課 程 (乳 が ん 看 護)	特 任 准 教 授 特 任 助 教	阿 部 恭 子 井 関 千 裕
看 護 学 教 育 C Q I モ デ ル 開 発 と 活 用 推 進	特 任 准 教 授	吉 田 澄 恵

3. 看護実践研究指導センター運営協議会記録

運営協議会委員名簿

委員区分	氏名	職名等
1号委員 (看護学研究科長)	宮崎 美砂子	千葉大学大学院看護学研究科長
2号委員 (センター長)	吉本 照子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長
3号委員	中村 伸枝	千葉大学大学院看護学研究科教授 (千葉大学評議員)
	手島 恵	千葉大学大学院看護学研究科教授
	野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教授
	和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教授
4号委員	小見山 智恵子	東京大学医学部附属病院看護部長
	市川 智彦	千葉大学大学院医学研究院教授
	高橋 浩之	千葉大学教育学部長
	高田 早苗	日本赤十字看護大学
	佐藤 禮子	関西国際大学副学長
	島田 陽子	厚生労働省健康局がん対策・健康増進課保健指導官

平成29年2月27日現在

第36回看護実践研究指導センター運営協議会

1. 日 時 平成29年2月20日(月) 17時30分～19時15分

2. 場 所 千葉大学看護学部 大会議室

3. 出席委員 宮崎会長(看護学研究科長)、吉本委員(看護学研究科附属看護実践研究指導センター長)、中村委員、手島委員、野地委員、和住委員、高橋委員、高田委員、島田委員
オブザーバー 吉田澄恵 阿部恭子 井関千裕

4. 議 題

(1) 平成29年度センター事業計画(案)について

I. 特別経費(教育関係共同実施分)による事業

- ① 看護学教育の継続的質改善(Continuous Quality Improvement:CQI)モデルの開発と活用推進
- ② 看護学教育ワークショップ

II. センター独自事業

- ① 国公立大学病院副看護部長研修
- ② 看護学教育指導者研修(ベーシックコース)
- ③ 共同研究

III. 委託による事業

- ① 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業
- ② 看護管理者研修(ベーシックコース)

5. 報告事項

(1) 平成28年度センター事業について

I. 特別経費(教育関係共同実施分)による事業

- ① 看護学教育の継続的質改善(Continuous Quality Improvement:CQI)モデルの開発と活用推進
- ② 看護学教育ワークショップ

II. センター独自事業

- ① 国公立大学病院副看護部長研修
- ② 認定看護師教育課程(乳がん看護)
- ③ プロジェクト研究

III. 委託事業

- ① 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業
- ② 看護管理者研修ベーシックコース

4. 看護実践研究指導センター運営委員会記録

運営委員会委員名簿（平成28年度）

委員区分	氏名	職名等
1号委員 (センター長)	吉本 照子	看護実践研究指導センター長 教授（大学院看護学研究科看護システム管理学専攻）
2号委員	野地 有子	教授（看護実践研究指導センターケア開発研究部）
	和住 淑子	教授（看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部）
	黒田 久美子	准教授（看護実践研究指導センターケア開発研究部）
	銭 淑君	准教授（看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部）
	赤沼 智子	講師（看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部）
3号委員	手島 恵	教授（大学院看護学研究科看護システム管理学専攻）
	酒井 郁子	教授（大学院看護学研究科看護システム管理学専攻）
	杉田 由加里	准教授（大学院看護学研究科看護システム管理学専攻）
	飯田 貴映子	講師（大学院看護学研究科看護システム管理学専攻）
	黒河内 仙奈	助教（大学院看護学研究科看護システム管理学専攻）
4号委員	中村 伸枝	教授（大学院看護学研究科看護学専攻）

看護実践研究指導センター運営委員会（平成28年度実施分）

- 年月日 平成28年4月20日（水） 16:20～17:05
議題等 1. 平成28年度副看護部長研修応募者採否について
2. 平成28年度看護学教育指導者研修（ベ－シックコース）受講者の推薦について
3. 平成28年度国公立大学病院看護管理者研修（ベ－シックコース）受講者の推薦について
4. 平成28年度共同研究員の採否について
- 年月日 平成28年4月25日（月）～4月26日（火）…持ち回り審議
議題等 1. 平成28年度看護学教育指導者研修（ベ－シックコース）受講者の推薦について
2. 平成28年度国公立大学病院看護管理者研修（ベ－シックコース）受講者の推薦について
- 年月日 平成28年5月25日（水） 15:00～15:37
議題等 1. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生選抜試験の合否判定（案）について
2. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）講師及び授業概要等について
3. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）時間割について
4. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）臨地実習施設（案）について
- 年月日 平成28年6月15日（水） 16:20～17:10
議題等 1. 平成28年度看護学教育指導者研修（ベ－シックコース）の受講者（案）について
2. 平成28年度国公立大学病院看護管理者研修（ベ－シックコース）の受講者（案）について
3. 平成28年度看護学教育指導者研修（ベ－シックコース）の時間割（案）について
4. 平成28年度国公立大学病院看護管理者研修（ベ－シックコース）の時間割（案）について
5. 平成28年度看護学教育ワークショップ実施要領（案）について
- 年月日 平成28年7月20日（木） 16:20～17:35
議題等 1. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）臨地実習要項（案）について
2. 平成28年度看護学教育ワークショップ参加者決定までの日程（案）について
- 年月日 平成28年8月26日（火）～8月29日（月）…持ち回り審議
議題等 1. 平成28年度看護学教育共同利用拠点 看護学教育ワークショップの参加決定について
- 年月日 平成28年11月16日（水） 17:10～18:00
議題等 1. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生について

年月日 平成28年度12月14日(水) 16:20～16:50

議題等 1. 平成28年度認定看護師教育課程(乳がん看護)研修生の修了判定について

年月日 平成29年1月18日(水) 16:20～17:15

議題等 1. 平成29年度附属看護実践研究指導センター事業計画(案)について
2. 平成29年度国公立大学病院副看護部長研修について
3. 認定看護師教育課程(乳がん看護)修了後の相談窓口の設置について

年月日 平成29年2月15日(水) 16:20～17:40

議題等 1. 平成29年度附属看護実践研究指導センター事業計画(案)について
2. 認定看護師教育課程(乳がん看護)終了後の相談窓口の設置について
3. 認定看護師教育課程(乳がん看護)閉講に伴うお礼状の送付先(案)について
4. 平成29年度共同研究員の公募について

年月日 平成29年3月7日(火)～3月8日(水)・・・持ち回り審議

議題等 1. 平成28年度認定看護師教育課程(乳がん看護)研修生について

年月日 平成29年3月15日(水) 16:20～17:15

議題等 1. 平成29年度看護系大学FD企画者研修実施要項(案)について

5. 看護実践研究指導センター認定看護師教育課程運営教員会記録

認定看護師教育課程運営教員会委員名簿（平成28年度）

委員区分	氏名	職名等
1号委員 (センター長)	吉本 照子	看護実践研究指導センター長 教授（大学院看護学研究科看護システム管理学専攻）
2号委員	阿部 恭子	特任准教授（看護実践研究指導センター認定看護師教育課程（乳がん看護））
	井関 千裕	特任助教（看護実践研究指導センター認定看護師教育課程（乳がん看護））
3号委員	赤沼 智子	講師（看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部）
4号委員	手島 恵	教授（大学院看護学研究科看護システム管理学専攻）
	増島 麻里子	准教授（大学院看護学研究科先端実践看護学専攻）
	田澤 敦代	副看護部長（医学部附属病院看護部）
	大野 朋加	看護師長（医学部附属病院看護部）
	寺口 恵子	公益社団法人千葉県看護協会 常任理事

看護実践研究指導センター認定看護師教育課程運営教員会（平成28年度実施分）

年月日 平成28年5月25日（水）9：00～

- 議題等
1. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生選抜試験の可否判定（案）について
 2. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）講師及び授業概要等について
 3. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）時間割について

年月日 平成28年7月13日（水）～7月15日（金）・・・持ち回り審議

- 議題等
1. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）臨地実習要項（案）

年月日 平成28年11月16日（水） 9：00～9：45

- 議題等
1. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生について

年月日 平成28年12月13日（火） 9：00～9：30

- 議題等
1. 認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生の修了判定について

年月日 平成29年1月25日（水）～1月27日（金）・・・持ち回り審議

- 議題等
1. 認定看護師教育課程（乳がん看護）終了後の相談窓口の設置について

年月日 平成29年3月2日（木）～3月3日（金）・・・持ち回り審議

- 議題等
1. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生について

年月日 平成29年3月8日（水） 9：00～

- 議題等
1. 平成28年度認定看護師教育課程（乳がん看護）再実習について
 2. 平成28年度修了判定保留となった研修生の修了判定について

6. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程

平成16年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人千葉大学の組織に関する規則第16条に定める千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター（以下「センター」という。）の管理運営に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、教育関係共同利用拠点として、看護学の実践的分野に関する調査研究、専門的研修その他必要な専門的業務を行い、かつ、国立大学法人の教員その他の者で、この分野の調査研究に従事するものの利用に供することを目的とする。

(研究部)

第3条 センターに、次の研究部を置く。

- 一 ケア開発研究部
- 二 政策・教育開発研究部

(職員)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- 一 センター長
- 二 教授、准教授、講師、助教、助手及びその他の職員

(センター長)

第5条 センター長は、センターの管理運営に関する業務を総括する。

- 2 センター長の選考は、看護学研究科の専任の教授の中から研究科長の推薦により学長が行う。
- 3 センター長の任期は2年とし、1回を限度として再任することができる。

(運営協議会)

第6条 センターに、センターの事業計画その他運営に関する重要事項を審議するため、センター運営協議会（以下「協議会」という。）を置く。

(組織)

第7条 協議会は、次に掲げる者をもって組織する。

- 一 看護学研究科長
- 二 センター長

三 看護学研究科教授会（以下「教授会」という。）構成員の中から研究科長が選出した者若干名

四 看護学研究科外の学識経験者若干名

2 前項第3号及び第4号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 第1項第4号の委員は、看護学研究科長の推薦により学長が選考し、委嘱する。

（会長）

第8条 協議会に会長を置き、看護学研究科長をもって充てる。

2 会長は、協議会を召集し、その議長となる。

（運営委員会）

第9条 センターに、次の事項を審議するため運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

一 センターの事業計画に関すること。

二 センターの予算の基本に関すること。

三 その他センターの管理運営に関すること。

（組織）

第10条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

一 センター長

二 センター所属の教授、准教授及び講師

三 看護システム管理学専攻専任の教員

四 教授会構成員（前2号に掲げる者を除く。）の中から研究科長が選出した者3名

（委員長）

第11条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

（会議）

第12条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開き議決することができない。

2 委員会の議決は、出席委員の過半数の同意をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

3 委員長は、必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させることができる。

（共同研究員）

第13条 センターは、国立大学法人の教員その他の者で看護学の実践的分野に関する調査研究に従事するものを共同研究員として受け入れることができる。

2 共同研究員に関し必要な事項は、別に定める。

(研修)

第14条 センターは、必要に応じ看護教員及び看護職員の指導的立場にある者に対し研修を行うものとする。

2 研修に関し必要な事項は、別に定める。

(事務処理)

第15条 センターの事務は、看護学部事務部において処理する。

(細則)

第16条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に関し必要な事項は、研究科長が定める。

附 則

1 この規程は、平成16年4月1日から施行する。

2 この規程の施行の際国立大学法人法（平成15年法律第112号）附則別表第1の上欄に掲げる千葉大学（以下「旧千葉大学」という。）において定められた千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター規程第7条第1項第3号及び第4号の規定により任命された委員である者は、この規程の施行の日において、それぞれ第7条第1項第3号及び第4号により任命されたものとみなす。この場合において、その任命されたものとみなされる者の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、それぞれ旧千葉大学において付された任期の末日までとする。

附 則

この規程は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成21年4月1日から施行する。

2 この規程の施行の際千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター規程（以下「旧規程」という。）第7条第1項第3号及び第4号の規定により任命された委員である者は、この規程の施行の日において、それぞれ第7条第1項第3号及び第4号により任命されたものとみなす。この場合において、その任命されたものとみなされる者の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、それぞれ旧規程において付された任期の末日までとする。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年10月1日から施行する。

看護実践研究指導センター年報

№. 35 (平成28年度)

平成29年5月発行

編集兼発行者 千葉大学大学院看護学研究科
附属看護実践研究指導センター
〒260-8672
千葉市中央区亥鼻1丁目8番1号
TEL 043-226-2464

印刷所 三陽メディア(株) 千葉営業所
千葉市中央区浜野町1397
TEL 043-266-8437

千葉大学大学院看護学研究科 附属看護実践研究指導センター

〒260-8672

千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1

TEL 043-226-2464

URL <http://www.n.chiba-u.jp/center/>